
恋姫世界で二人旅

ものぐさ兄さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫世界で二人旅

【Nコード】

N5697X

【作者名】

ものぐさ兄さん

【あらすじ】

大谷 保おほたに たもつと上尾 司あげおつかさ二人が自称神に叩き起こされると見知らぬ空間、自称神は俺達の腐った精神を叩きなおす為過酷な異世界で修業して反省しろと。三国志世界いけるならラッキーと修行ではなくバカンス気分な二人、普段から悪ふざけしかしない二人は恋姫世界に転生したが、そこでも悪ふざけをし生きながらえる事が出来るのか？

プロローグ（前書き）

はじめましてものぐさ兄さんと申します、思い付きで真・恋姫十無双の二次創作をはじめてしまいました。処女作だからとはいえ、どうしようもない駄文です。読まれる方は生温かい目で見守ってください。

プロローグ

老人『起きなさい』

グース力寝ている二人組の男を起こそうと声をかけるいかにも仙人という恰好な老人。

男性A、B「グースカピー」

老人の呼び掛け等何処吹く風というように寝ている二人

老『起きなさい二人共』

先程より大きい声で、念のため耳元で声掛ける老人

「ウーン……、グースカ」

怒鳴り声の五月蠅さに一瞬魘されるがすぐに熟睡し続ける二人

『先程から何度も呼びかけているが起きないならやむを得ないな。』

ポトツ、老人が懐から取り出したスポイトで水を一人の男の耳に垂らす

「うひゃああっっ！」

寝耳に水という諺が出来る位であり驚きで簡単に目が覚める男

『やっと起きたな、それにしても大袈裟な。』

「おい、このクソジジイ、寝ている人間の耳に水垂らして人を起こしやがって!」

今にも掴みかからんとばかりに鼻息荒く怒っている男、それにたいし老人は慌てるでもなくゆっくりと話をする。

『寝起きなのに何されたかよく分かったな。』

「今までさんざん人にやってきたから。」

『何でそんな強気に話すんだ恥じるべきで自慢することでないのに、まあいい、そんな駄目なお前さんを起こしたのは話があつてな。』

「俺が駄目なのは自分の事だから分かる、だが他人に言われたくないぞ、あんた誰だよ!？」

最悪な起こされ方にイラつき全身から殺気を放ちながら話をする男

『私は世間一般で言う神で、君達は今朝死んだんだよ、大谷 保君、たもつ横で寝ている上尾 司君つかさを起こして、そして教えてあげなさい。』

「はいつ・・・!？」

自称神、更に自分が死んでいるという発言に固まる大谷 保であった。

大谷が固まっってから数秒が経過、とりあえず周りを見渡し、先程まで怒っていた思考に対し、
落ちつけ今どんな状態だ？と脳を動かし始めようとする。

“此処は何処だ？あとなんで司と俺はこんな所で寝ているんだ？それと誰だ俺が死んだ、とか、
神だとかいう危ないジジイは？”

周りを見渡すと真っ白な部屋、壁が見当たらず真っ白な天井と床が地の果てまで続いている、
たぶん自分がいるのはそんな部屋の真ん中であるとなんとなくわかる。

『危ないジジイとは失礼な、先程も言ったが私は神だぞ、あと此処はあの世とこの世の境とでも言えばいいかな。』

目の前のジジイに思考を読まれている、自分の理解を超えている事態に頭が混乱する、
とりあえずは横で寝ている友人の肩を激しくゆすりながら声をかける。

「司、起きろ、司、なんか変な事が起きているぞ。」

司と呼ばれる男の肩をゆすり声をかける、起こし方にコツがあるのか神が声掛けたときと違い目を覚ます。

司「むわあ、……おはよう」

大口を開けてあくびをしながら司が挨拶をする、自分みたいに驚かされて起きたわけでないからハッキリ目を覚ましてもらうまで時間

が少しかかるなと思い、その間考え事をする。

自分の姿を見てみると、いつものダブルのスイツにネクタイ、足元には愛用のブランドのスイツケースが転がっている、息が酒臭い。

自分の恰好を見て、少しずつだがいろいろ思い出してくる。

“誕生日に出張が入り一人地方のホテルで寝泊まりは寂しいから、と、司に電話で愚痴ったら、

明日東京に帰ってきたら野郎二人と絵面は良くないが飲みに行こうと誘われた。”

“そうだ、司が人気の焼鳥屋をわざわざ抑えてくれてそこで飲んで、明日は休みだし二次会、三次会と吐くまで行くぞとなって。”

少しずつだが前日までの記憶を思い出していく、思い出すため頭をひねる自分の姿を見て、

よしよし思い出してるなどでも言いたいのかうんうんとうなずいている自称神

“ただ、そこから先が思い出せない、それで寝ていたら見知らぬ自称神という、

危ないジジイに驚かされ、しかも、俺らは死んだと言われた。”

二日酔いでガンガンする状態なのに、怒鳴ったり考え事したりと脳を必死に動かしたため、

頭痛が悪化、気分が悪くなってくる、ならばと今は考えるよりも吐くことにした。

『若造に危ないジジイ呼ばわりされるのも癪だし、二日酔いでは話

にならないし、
目の前で吐かれるのは嫌だから二日酔いを治してやる。』

ひとり言のように俺に向かって何かつぶやいた後、神の右手が俺の肩を触れた瞬間に、溜まっていた気分の悪さとか一気に無くなる、ちょうどその時寝ぼけていた司も意識を覚ました模様。

- 司 -

友人であり先輩な保さんが誕生日が出張先で孤独、と電話で愚痴っていたので、

昨晚二人で飯を食いに行つて何件もはしご酒してからの記憶がない。

「そして自分が保さんに起こされ目の前には仙人姿の変なじいさん、保さんはじいさんを神様だという、わけわからん……???’」

とりあえず保さんが自分を担ごうとしているのでは?と思う。

「保さんの悪戯でしょ、昔、自分が目を覚ましたら車のトランクに閉じ込められていた、

なんて事がありましたし、この変な場所に自分がいるのも悪戯ですよ。」

「司さんよお。俺はあまり面倒なことはやらないぞ、だいたいトランクの時は、お前さんはお返しに俺を騙してアーっな人専用のサウナに連れて行つたら、

危うく尻に惨劇が?と、無事だったがあの時は生きた心地がしなか

「たぞ。」

「30過ぎの保さんが怯えて泣き入っていたのは笑わせていただきましたよ、まあ本物の人に

「貴方転向したらモテるのに」と上目遣いで言われたら怯えますか普通は。」

昔の事を思い出しニヤリと笑う、「保の悪戯は洒落にならないが司のはそれどころでない」

と友人達によく言われているそうで、大袈裟な。

とりあえず保さんが言うには目の前の爺さんは神様ということらしい、

昔JR上野駅周辺にいた「俺は暗殺拳の使い手だ」と言っていたおっさんと同じタイプだ！

という結論に行きつく自分は。

とりあえず、そういうタイプの人は話を否定すると危ないから優しく話を聞いてあげよう。

- 神 -

『上尾 司、君もなかなかいい根性しているねえ。』

見知らぬ人間が自分の名前を知っている、それと思考を読まれた事に驚いているようだな、

ただ、まだまだわしが神だと納得はしていないようだ。

『そちらの男と違って二日酔いではないから治してやれないが、神

だと証明してやるぞ。』

そういつてワシは右手をパチンと鳴らした。

その瞬間、辺りは真っ暗になり彼らの目の前に立体映像が流れはじめめる。

何店回ったのだろうが太陽が昇りはじめる早朝の東京、そこに酔ってフラフラな二人が歩いている。

酔っ払い二人は大通りの向かいに止まっている空車のタクシーを見つげ、

フラフラな酔っ払いのくせに妙に機敏な動きで道路に飛び出す、運悪くそこにトラックがきて、そして二人は跳ねられたあとピクリともしていない。

9

二人とも下を向いて肩が震えている、いくら事実とはいえ、自分が死んだ映像を見させられたら流石に落ち込むのも仕方無いかと。

「「なんでこんな中途半端な死に方なんだ！もっと面白く死ねよ俺！」「」

ワシはあまりに今までのワシが知っている人間達と考えが違つことにポカンとしてしまった。

「驚いているようだが何を驚いている、どうせ人間は死ぬのだから、ならばダーウィンアワードで表彰されるような間抜けな人の記憶に残る死に方をしないと。」

ただまあ、この映像を見て司も爺さんが神だという事には納得したようだ、とりあえず話を進める。

「俺ら二人に用があつて忙しい神である貴方がわざわざ俺らの前に現れたのは何の用だ？」

偶然はないだろう地球には66億人以上いて毎日阿呆みたいに人が死んでいるのだから、用もなければ確率的に俺らの前には現れないだろ？」

『少しはキレる頭はあるようだな、簡単な事だお前さん達に説教をしようと思つてな。』

「説教？」

見事にハモる二人

自分達二人の家は先祖代々問題児が多いらしく特に酷いのが現れると、

その度に神が呼び出して反省の為異世界に送り更生するように修行させると。

まあ俺も司の実家も家柄というか歴史的には大変由緒正しいのだが、家柄と反比例するかのように先祖にろくな人間がいないのが特徴で。

だが、そんなろくでもない人間が急に真人間になったという伝説が何個もあった。

母方のひい爺さんなんか、とある地方の寺全てをまとめる大物だったのだが、
生真坊主で数え切れないほどの愛人と隠し子が日本中にいた糞坊主
だったり。

父方の先祖ならば水戸黄門の悪役商人のように、お偉方と結託して
相当荒稼ぎした豪商とか、
とか最盛期の頃は世間的に自慢出来ないような後ろ暗い素敵な人間
が大層多いのが。

司の先祖にしても、趣味が辻斬りなんて大変愉快で素敵な趣味を持
つ武士がいたり、と。

たしかにろくでもない先祖、しかも、ある日を境に急に真人間にな
ったなんて

普通ではありえない言い伝えが何個も伝えられているのだから。

神が言うには俺ら二人は歴代の先祖のように目に見えて方に触れる
悪い事はしないが、
己の人生や才能の無駄遣い、悪ふざけが酷いから精神を叩き直そう
と修行の旅に。

正直余計なお世話である、だいたい悪ふざけが酷いとか大袈裟であ
る。

ハロウィーンでコスプレする際に悪魔のいけにえのレザーフェイス
のコスプレを頑張ってやったら、
チェーンソー片手に持った不審者がいると近隣から通報されたりし
たくらいで私ならば。

司にしても、高校時代に一学期はオール5、二学期はオール1、三学期はオール5とかやって、担任の胃に何度も穴を開けかけたりしたただけである。

とりあえず、私的にはやましい事をしていないので素直に神に、

「悪い点があれば反省したい所存でございます、ただ当方としましては説教されるような謂れは一切御座いません。」

証人喚問中の国会議員のようにコメントをする。

そんな私の発言をたしなめたるつもりか司は罪を認める、ただ……。

「恥の多い人生を歩んできました反省したいのですが心当たりがありません、

今回は一体どの件についてでしょうか？」

どうやらこれらの発言が神に止めを刺したらしい、神の両肩がプルプルして、そして噴火。

『それら全てだ〜〜!!』

男塾の江田島平八ばりの大音量に気絶しかける二人。

- 神 -

“駄目だ、こいつ等は既に手遅れだ、だが、こちらこそ神として意地

がある更生させる。”

とりあえず二人には反省の旅に出てもらうしかないな！

『お前ら二人は生きる事を舐めすぎている、命の無駄遣いをしてい
る、神への尊敬もない、

だから今から罰としてお前ら二人を過酷な異世界へ送りつけてやる。

』

『お前らがその世界で更生し更に偉業を成し遂げるなどといった結
果を出したなら、

お前達の死は無かった事にして世界に戻してやる、もし嫌だと言う
ならば、

あの世送りにしてやるぞ、そうなるという人間に輪廻転生出来るか
分からないぞ。』

此処まで脅せばいいだろう、神の怖さを認識したなこの二人でも、
まあ更生したら偉業は達成しなくても元の世界に蘇らせてやるぞ、
懐の広さを見せつけてやるか。

まだワシは二人が予想を覆す人間であることを認識出来ていなかった
のであった……。

- 司 -

「あの世送りにももらえますか特に現世に未練ないですし、あの
世はあの世で楽しそうですし。」

自分の発言に対し、保先輩も考え始め、そして口を開く

「そうだなあの世送りもいいな、落語の地獄八景であったが冷静に考えたらあの世いいかも、

好きな音楽家や落語家、司の好きな歌舞伎とか歴代の名人天才は皆いるんだから、

辛い異世界で修行するよりもあの世ライフを満喫した方が楽しいな。

」

神と言っていた爺さんが口をあんぐりと開けて固まっている。

「自分達二人が生に執着すると思っていたのだろうか？神を名乗るくせに頭が悪い。」

吐き捨てるように神に言うことにした。

神が震えだす、人間よりもはるかに偉いはずなのに、万物の主はずなのに遂に泣きつき始めた。

「お願いだから異世界に行ってください、異世界は異世界で大変な事になっていて、

そのための手段で君達を送るつもりだったの、助けてください！！

！！！！」

土下座からの足に縋りつき、そして泣き落とし、神にプライドは無いのだろうか？

「お願いします、助けてください色々と力を上げたりとか優遇しますから。」

“神大丈夫なのか、そんな事をして世界のバランスは崩れないのだろうか？”

大体それでは修行にならないのではないか？”

とはいえ、さすがに宇宙で一番偉いはずの神が私たちの足元で、涙と鼻水で顔をグシャグシャにして泣きついている姿を見るのは忍びない気持ちになる。

保さんの顔を見ると仕方ないなという感じの顔つきになっている、保さんも自分と同じ意見なのがわかる。

「顔をあげてください、そして泣きやんでくださいよ、そこまで頼まれましたら、幾らふざけてばかりいる自分達とはいえわかりましたから。」

顔をあげた神が笑顔になる、二人は口をそろえて神に思いを伝える。

「だが断る！」

時が止まる、どうやらトドメを刺してしまったようである……。

- 保 -

”だが断る、効果のある一撃として使いたいと思ったがここまで威力があるとは”

神がエグエグと泣きながら体育座りで左の人差し指で地面にのの字を書いている。

“ぶつちやけ気持ち悪い絵面だ、女の子ならまだしもいじけているジジイなど絵にならない。”

このままでは日が暮れると思う、真っ白い空間で日が昇るも暮れるもへったくれもないんだが。

「俺も司も悪ふざけや悪戯はひどいが弱い者虐めは嫌いだから、暇つぶしも兼ねて行ってやるよその異世界へ修業に。」

『嘘だ!!!!!!!!!!』

神が壊れた、まさかジジイが鉈女みたいになるとは、完全に人間不信になっっている、

誰だ!?!とても偉い神様をこんな風にしたのは。

とりあえず説得をする、散々宥めすかしたらなんとか落ち着いた模様、

ヤクザの交渉術である7殴って3抱きしめる、この比率でいくやり方がまさか神にも通じるとは。

どうやら俺達が修行に行く世界は色々あるようで本来は神が勝手に行き先を決め、

神の代理として戦争の鎮圧だとかさせられるのだが、今回は俺達に選ばせてくれるとおかしな成行きに。

トロイアやら三国志、戦国時代、30年戦争とか色々ある、面白そうな戦国時代か三国志で悩んだが、

日本の戦国時代だと殺した人間が自分の先祖とかだと後の自分に影響があつたら怖いので三国志に。

三国志に行けるなんて楽しみだけでもうお腹一杯という状況なのに、なんか気を良くした神が俺達に更に能力とか望む物をくれると言いだすしまつ。

最初から最強は面白くないので自分の努力次第でもしかしたら最強になるかも？という事で限界突破。

あと病気とかつまらない死に方したくないからとにかく健康、あとは三国志の時代ならば空気を読んで銃や車はやめて時代に合った武器とか馬が欲しいと。

『努力しないで望めば最初からフリーザくらいの戦闘力にはなれませんよ、

それなら異世界修行の旅もあつという間に終わりますよ。』

俺らの精神を叩きなおす修行で行かされるはずなんだが、神がおかしなことを言っている、
なんで神がこんな壊れてしまったのだろうか……。

『成長限界突破でも鍛え抜けば武なら範馬勇次郎、知らんヤン・ウエンリーを超えます、
健康はヘルシングのアンデルセン神父くらい再生すればいいか？』

『武器と馬は使える体力がいたら頃に届くようにす、武器はその時に欲しい物をオーダーで、

ロンギヌスでもなんでもいいからな、馬は原哲夫作品の馬程度でいいかな？』

名目は俺と司の修行であり、神の代理で紛争の鎮圧に行くのかなん
だが、
いくらなんでもアンデルセンの回復力やら聖槍とか貰うのは駄目だ
る。

運が良くて俺達が神の代理ではなく神になり替わり、最悪悪魔の使
いだと処刑されかねん、
だから、武器でも馬でも健康でもほどほどにしてくれと頼む。

とりあえず、なんか妙にこちらを優遇する神との打ち合わせも終わ
り、
神が指を鳴らすと突如どこでもドアらしき物体が現れる。

扉の前に立つと色々な思いがわき出る。

“この扉をくぐると遂に三国志か、任務達成まで戻れないどころか
途中で死ぬかもしれない、
だが面白さを求めて行きますか。”

横を見ると無二の親友である司も笑顔でこちらを向いている、覚悟
はできている模様、
深呼吸をして息を整え心を落ち着け扉をくぐる二人。

扉をくぐり二人がいなくなってから、肝心な事を伝え忘れていたこ
とがあるのを思い出す、
ふざけた、耄碌したやくたたず神だったとは……………。

プロローグ（後書き）

プロローグが長くなりすぎた、そうでなくても駄文なのに、さてどうなりますかこの小説は、作者のくせに何も考えていなく不安であります、どうしましょう。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております

第一話、転生したはいいけれど（前書き）

とりあえずプロローグに続いて第一話を書いてみました。

どうしよつもない作品ですが、もしお暇なら生温かい目で読んでみてください。

第一話、転生したはいいけれど

保

「話が違つ、いや、話が違つんではない、もっと考慮しろと言つべきか・・・」

いきなり何がと思われるだろうが、今の俺の心情としてはこうしか言えない。

申し遅れた、俺の名前は大谷 たもつ 保33歳、会社役員だった。

東京近郊のとあるベツトタウンで数百年前から先祖代々商売をする金持ちの息子で、まあ変わり者の両親の元で人並みではない体験をしながら元気に育った。

変わり者ではあるが優秀な両親の血を引いたのもあり努力らしい努力をすることもなく、苦勞せず良い大学に行き卒業後は父の会社に入社。

入社当初は親の七光と言われたりもしたが仕事も順調にこなし続け、後継ぎという点もあるが今や最年少取締役、次期社長として働いている。

「まあ親族からは会社を背負つてたつものだから三十過ぎて結婚してないのはいかん」と小言を言われるのは不満ではあったが、それ以外とくに主だった不満はなかった。

不平等な世界だが私は運良く皆と違って人生イージーモードでお気楽ライフを堪能していたと。

そんな順風満帆な生活だったはずが・・・。

無二の親友とご機嫌に飲み歩いていたはずが変な場所で目覚めて、現れた神にお前達は死んだと言われ三國志の世界に行く羽目に。

まあ、ここまではいい。

普通の人ならば「死んでるのにいいのか!？」とか言いそうだが、人生イージーモードは面白みがない、ならば波乱万丈な方がいいと。

あつ、今さら言うのもなんだが、誰に対して説明している文章なんだって突っ込みは無しで。

転生とか喜んでいるはずなのに何で戸惑っているのかといったら、まあ切実な問題が。

過去に行ける扉をくぐったら意識を失い、目を覚ましてまず最初に視界に入ったのは、サッカー中継時の川平慈英並みにハイテンションな見知らぬ男の笑顔がドアップ。

目を覚ましたら、いきなり川平慈英はびびるぞ。

川平もとい、男のテンションの上がり方と「董家の跡取りが」「君

に似て可愛い顔立ちだ」
などの会話の内容で、この男は父親なんだと理解した。

転生させた神に問題として言いたかったのは、何故赤ん坊からなんだ！と。

まあ前世である30歳過ぎたおっさんが異世界で修行だといって鍛えはじめても、
年齢的に脳細胞も体も衰えていく一方、ならば若い頃からやりな
した方がいいのはわかる。

だが、生まれた直後から私の自我があるのはなんとかならなかったのかと、鼻水垂らすまで説教したい。

赤ん坊ですよ、自分でトイレに行けるわけなくオムツにお漏らしをするしかない、
赤ん坊なら当たり前ですがこの前までおっさんな私としては常識でおもらしはできない。

あと母親だけでなく侍女達にオムツをかえられる羞恥プレイも精神的ダメージが。

しかも、恥ずかしいというだけでなく、オムツを人にかえられる恥辱が、
何か新しいものに目覚めてしまいそう、堕ちてしまいそうな自分が、
その恐怖に耐えるのが・・・。

せめて3歳位になって自我が確立するころに前世の記憶とかが目覚めてくれればよかったのだが。

あと、もう一つ問題が、神が転生させる際に記憶や能力引き継ぎしてもらったことで。

私は赤ん坊らしく起きて寝てを繰り返す、そんな私が父親と初対面した時に事件が。

ハイテンションな父親の話し声に目を覚まし、前世での生活のように起きてしまう、

問題は私が生まれたばかりの赤ん坊であるというのが。

寝台から上半身を起こし背伸びしながら「とおしゃん、かあしゃんおはよう」と、

舌足らずながらも普通に挨拶してしまった。

自分で、あつ、と気づいた段階で手遅れでしたよ。

赤ん坊ではあり得ない姿を見て両親はわなわなと震えだしたと思ったら、

父はいきなり窓から「うちの子は神の子だー！！！！！！！！」などど、

近隣住民から頭を疑われるような事を叫びだし、

母親はあまりの出来事にフリーズし、侍女達は俺の姿を見るなんて畏れ多いと皆ひれ伏しているのが。

これはまずい、と既に手遅れだが、そのあとは普通の赤ん坊の振りをして過ごす、

まさか転生した初日に既に普通の赤ん坊の振りする生活に気疲れするとは。

どうしてこうなったと赤ん坊ながらため息をつく生活を送るように

なるとは。

???

妻が妊娠したと知ってからいつ生まれるのだと毎日仕事が付かず、一日千秋の思いでいたが、ある日執務室で政務に励んでいると我が子が遂に産まれたと待ち望んでいた報告が。

仕事を投げ出し、従者を振りきろつが構わんと走って我が子に会いに行く。

出産に疲れ寝台に休んでいる妻、産婆や侍女達には悪いが我が子と喜びの対面をさせてもらう。

妻と一緒に寝台で寝ている我が子のなんと可愛い事が。

「お前に似た可愛い顔立ちだ、将来はモテるぞ」と妻に向かって話しかけると、

妻は微笑みながら「私よりも貴方に似ていますよ、賢い顔つきなところとか」と。

侍女達は「旦那様の聡明さ、奥様の美しさを兼ね備えた将来が楽しみな若様で。」

と大変嬉しい事を言ってくる。

照れ臭いのごまかすためではないが産まれたばかりの我が子に、「お前は父である私に似て賢く母に似て美しいとの事だぞ。」と語

りかける。

妻は「あらあら」と言いながら微笑んでいる、なんと幸せな光景だろうか。

まさか、寝台でスヤスヤと寝ていた我が子が目をパチリと開いたと思ったら、
上半身を起こし背伸びをして「とうしゃん、かあしゃんおひゃよう
と。

首が座っていないどころか数刻前に生まれたばかりなのに、起き上がって喋った……。

我が国の遙か西にあった国で、釈迦という王子が生まれた直後に歩いて

「天上天下唯我独尊」と傲岸不遜な言葉をしゃべった逸話があるのを聞いたことがあるが。

我が董家の跡取り息子も釈迦ではないが選ばれし子供なのだろう。

自分の息子の持つ神々しさについて興奮して窓から

「うちの子は神の子だー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」と叫んでしまった。

近所から生暖かい目で見られるだろうが私は気にしないぞ！ー！

転生してから二週間たちました、そんな故大谷 保（享年33）で
すが

「・・・暇だ、とにかく暇だ」

体は赤ん坊なんだが体力や意識とかは大人ですよ、周りを驚かせな
いようにするため、

連日赤ん坊のふりをしている生活にかなり疲れる。

おっぱいを飲む、おむつの中に漏らす、泣く、寝るしかない。

両親や侍女の会話を盗み聞きすることで我が家がどんな家か自分の
名前や現状を推測したりしたが。

とにかく暇だ。

話し相手がいればいいが話し相手がいない、まあ話をするわけにい
かないんだが、

侍女に話かけたらまたパニック起こされ土下座してきそつで。

とはいえ、読書やゲーム、仕事とか暇潰しが出来ないのだから、せ
めて気分転換で会話がしたい。

『じゃあワシが話し相手になろう。』

聞き覚えのある老人特有のしゃがれた声が脳内に響く。

「この声は私の頭痛の原因を作った自称神、こと、クソジジイ！」

『自称ではないクソジジイでもない本物の神だ！まあ声出さないで

いいぞ思念で会話しているから。』

助かった、自分以外誰もいない部屋で喋れないはずの赤ん坊が一人で会話していたら、

そんな姿をもし侍女達に見られたら神童どころか悪魔憑き扱いだ。

悪魔憑きなんてなった日には、老いた神父と若い神父が家にやって来るよ、

私が緑色のゲロ吐いて、ブリッジしながら階段を降りたわけでもないのに、

悪魔被いされたりしたくない。

『懐かしの映画の話はどうでもいい、どうだ転生してからの新しい人生を楽しんでいるか？』

私の転生してからのストレスを知らないのかと舌打ちしてしまう、大体生まれて1年もたっていないのに何を楽しむんだ！と言いたい。

あと、この前散々私達にへこまされたばかりなのに、なんで今日はまた上から視線なんだと突っ込みたい。

とりあえずはいろいろ突っ込みたい事があるので一気に突っ込む。

「三国志の時代に転生といったが此処は何なんだ！？変な世界に送り込みやがって！

両親が董君雅と池陽君だから俺が董卓の親族はわかる、なんで両親の性別がひっくり返っているんだ！！！！」

「それと董擢ってなんでこんなマニアックな武将に董卓の兄貴で早世したしか情報が無いような、

知っている俺も俺だが、普通三国志なら魏呉蜀とか王道な所に所属する武将が沢山いるのに何で非主流な。」

「一番の問題は、一緒にこっちの世界に来た司ちゃんがなんでいないんだよ、転生なら双子とかじゃないのか？」

私がまくしたてるように一気に疑問をぶつけると、神はゆっくりと答えだす。

『君達が知っている三国志は正史と呼ばれるもので、今、君がいるのが外史なんだ、外史とは一言で言うならIFの世界じゃ、もしかしたらこんな世界があるのでは？という。』

『何故、外史にしたのかは君達が戦国時代を選ばなかった理由と同じじゃ。』

「過去の正史だと正史の歴史を変えてしまう事で未来の俺達に影響する可能性が、ならばそれが無い外史にしたということか？」

『そういうことじゃ、だからお前さんの認識している三国志とは性別や性格とか、色々違う点がある世界なんじゃよ。』

「それはまあわかった。」

『董擢にしたのはたまたま空いていたからだ、先程も言ったがここは外史IFの世界であり、

外史ならば正史にいるはずの人間がいらないなんて事もある、それで

空気があつた人物だからじゃ。』

「そんな理由なのか。」

『あと、お前さんが曹操とかに転生したとして正史での曹操の行動をしっているから行動しづらいだろ、

これだけ資料がない人間ならば好き勝手やれるだろうと気を使つたんじゃないぞ……。』

……の部分に何か別の意思が隠れていそうだ、面白そうだからとか、この前の意趣返しだ、とか。

「どうも騙されている気がしてならないんだが。」

『疑り深いのが、あとも一つの質問の答えだが、お前の相方である上尾司は、

お前と同じ日に転生はしている、この外史でちょうどいい双子に空きがなくて、
やむなく別々になつたんだ、まあ、お前さん達ならばすぐに会えそうじゃが。』

「無事ならばよかった、あいつと俺は前世で義兄弟の杯交わしたんだから、

“生まれは別々でも死ぬ時は別々だ”と誓い合った仲なんだから。」

『それを言うなら“生まれは別でも死ぬときは一緒だろ”じゃろ。』

「落語の粗忽長屋だ！元ネタは知らないのか神のくせに、まあ俺達と一緒に死んだが、

普通一緒に死ぬなんてないだろ義兄弟でも、何寝ぼけた事を言つて

いるんだ。」

まあ、色々言っただけはいるが司が無事だと聞いてとりあえずは安心する、が、釘は刺しておこう。

「こつちに二人まとめて来たんだから司と会えないで、会おうと思つたら、

既にどちらかが死んでいたとかなんてなつたら神だろうが許さないからな。」

『まあ平気じゃよ、そんな心配しなくてもあいつは色々赤子生活を楽しんでいるぞ。』

「嫌な予感がするからあまり聞かない方が良さそうだが、一応聞いておくか。」

聞かない方が良さそうだが好奇心に負けてつい聞いてしまった。

『ブツダの真似して生まれた直後に三歩歩いて天上天下唯我独尊と言ったり、

侍女にオムツを変えられるたびに「はあはあ、抵抗することもできず他人にオムツをかえられ、

恥ずかしい姿を見られる自分の無力さが、背徳感が堪らない、なんで今まで赤ちゃんプレイに興味なかったんだ！」ワシに力説していたぞ。』

て、手遅れだったか………。

とりあえずまあ疑問は解消されたかと思っただけなら、また話をしようというって神の声が聞こえなくなる。

赤ん坊であるおかげと最近の気疲れのせいか？あと親友の司の無事がわかった安心感、
彼が誰になっているのか？いつ会えるか？考えていたら俺こと董擢は眠気に襲われたのだった。

第一話、転生したはいいけれど（後書き）

読みづらい文章ですいません、感想とかありましたらよろしく願
いします。

皆さんのご意見ご感想お待ちください。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？（前書き）

恋姫のはずなのに、時代設定が少し古いからとはいえ劉備も曹操も誰もまだ出ません、ごめんなさい。

というかもう一人の主役を出せていない大丈夫なのか……。あと、今回も無駄に長くてごめんなさい。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？

- 保 -

どうも、この三国志の世界に転生して3年たちました姓は【董】名は【擢】字を【孟高】

そして真名は前世での名前と同じ【保】になりました、故大谷 保こと、

董卓の兄貴で早死に以外は売りがなく、三国志で劉備や曹操といったスーパースターと異なり、
刺身でいうならツマ以上に需要がない董擢です。

いきなりキンクリして三年たっているのはまあ色々とお察しく下さい。

話を本筋に戻しましょう、三国志の世界でなどと言いましたが、神の説明を受けた時に知りました、
此処は私や皆が知っている正史というものではなくIFの世界である外史という物だそうで。

三国志では姓名以外に字があるのは常識として知っていますが、今の私ならば【保】という、姓名や字とは別に真名という物がありました。

この世界を知らない私からしたら真名があると知ったところで最初は“面白いもんだIFの世界は”程度の認識でしたが、そんな生易しい物ではなかった。

真名は命よりも重い扱いでたとえ相手の真名を知っていても呼ぶ事

まあ私は腐つても太守の息子VIPですから、部屋がそんな風になつていたら事件か？
暗殺者にも襲われたか？と思つて母上がパニックになつても仕方ないかと。

30分後、侍女達も復活、私と侍女達から事情を聞いた母上がこちらを向いたと思つたら、

「孟高そこに座りなさい」と普段の母上の姿から想像つかない怒りのオーラが。

これは洒落どころではすまないなと本能で察しましたが、察した段階で既に手遅れ。

床の上に正座させられ説教ですよ、しかも、母の背中には怒りのオーラが見えるが、

一番きつい怒鳴るのではなく静かに淡々と理を持って目を見据えながらの説教なのが。

「貴方は三歳とは思えないほど聡明であり、誰とも分け隔てなく接する優しい自慢の息子ですが、

董家の長男として、いえ、人として真名の重みを理解していない事に私は情けなく思います。

貴方の【保】という真名は、大陸の平和を保つ偉大な人物になつてほしいから・・・以下略」

どれくらい時間がたつたでしょうが、青っ洩垂らしてしまうところではなかつたですよ、

こちらの世界では三歳ですが、精神年齢三十六歳であるおっさんな私が泣きそうになるくらいで。

家族での夕食時に父はその事件を知り「さすがの神童も形無しか真名に関しては次から気をつけるよ」

と笑って、私を慰めるため頭をクシャクシャとなでてくれました。

ただ、その父上の行動が甘やかしているように見えたようで、父上は母上の逆鱗に触れてしまったらしく。

「貴方少しお話があります」と一言、無表情ながら凄まじい怒気を漂わせた母上、
耳を引く張られ連れだされる震えあがった父親。

連れ出される父はたぶんドナドナで売られる牛よりも悲しい顔をしていたのが・・・合掌。

母上は部屋に戻ってきたが父上に戻ってこないで部屋に見に行く
と、

うつろな目をして部屋の隅で体育座りして涙ぐんでいる父上が。

この件があつてから私は両親だけでなく侍従達とも真名を交しなさいと母上が許可をされました。

ただ侍従の方達は真名で呼んでくる事なく「孟高様」「坊ちやま」としか呼んでくれず、

また私も皆さんにおしめを替えてもらったりしたりと育ての親でもあるので、

真名で呼ぶよりも字にさん付となってしまうんですが。

決して、真名の件での母上の説教がトラウマになってしまい、真名の取り扱いに悩んでいるわけではないですよ・・・たぶん。

前世では怖いもの知らずと言われた私が説教くらいでトラウマなんてなるわけが・・・。

ちなみに母上の真名は【和】と、私の保と同じく平和を願ってつけられたそうで、

五胡との争いで亡くなった祖父が、いずれは五胡とも手を取り合い平和を築こうとした事からだそう。

その事を知ってから自分の【保】という真名の重みが三歳児ながらずしりと両肩にかかるのが分かりました。

父上の真名は【空】無限の広さを持ち一面に広がる空のような広い心を持つ人になれと、

祖母に名付けられたようです、ただ父上はお酒を飲んだ際にごくたまに悪酔いするのですが、

その際「世間で私の存在が空気みたいなものだから真名が空なんだよ」とうつろな目で呟く事が。

私の精神年齢より若いはずの父上ですが、たまに妙に黄昏ているのは何か嫌な事があつたんでしょう。

- 和 -

私の自慢の息子である保君が可愛くて可愛くて仕方がない。

保君は生まれてすぐに「父さん、母さんおはよう」「なんて言っ
てしまふ天才児だ、
あの時あの人が窓から「うちの子は神の子だああ」と叫んでい
たがその気持ちがよくわかる。

昔馴染みの友人達が遊びに来た時にも気付くとついつい何刻も息子
自慢をしている私が、
最初は皆「親馬鹿にも程がある、まあ自分の子供に対してはどうし
ても親馬鹿になるがね。」と。

皆実に失礼で、保君の凄さを知らないで親馬鹿という言葉で片付け
るなんて、
彼らの愚かさが嫌になり、少しO・H・A・N・A・S・H・Iしないとい
けないと思うが、
さすがに太守とかを壊してしまうわけにはいかないので、保君と話
をさせてみる事に。

「まさに神童」「麒麟児とはこの子の事か」「天は二物も三物も与
えたか」と話をする。

私や夫の私塾時代の同級生であり私などとは身分が違うのだが分け
隔てなく接してくれ、
私達を可愛がってくれていた劉表様なんか、

「この国を支える人材を育てるための私塾をつくる予定なのだが是
非孟高君を入学させたい」

「いや、私塾の有無など関係無く、私の元で徹底的に学ばせてみた
い、是非私に預けてくれ」と言いだす程に。

大事な大事な愛しい保君と離れ離れになるなんて出来るわけがない

のに、
あまりにもしつこいので、最近愛刀が血に飢えているので愛刀の錆にしようか?と。

ふと気づいたら横にいたあの人が必死の形相で私を羽交い絞めに。

ただ、人を育てる事が好きで優秀な学者でもある劉表様に、まだまだ幼子である保君が、
ここまで惚れ込まれたのは親として嬉しくもある。

いくら褒めても褒め足りないが、保君が神がこの世に遣わした者であると何度思ったことが。

普通ならまだ立つこともおぼつかないような歳である保君に、軍師でもあるあの人が、
「生まれてすぐに喋ったくらいの天才だから保君には早くから勉強を教える」
と言い出した時はさすがにまだ早過ぎると思ったのだが私の予想は見事に覆された。

保君は三歳にして読み書き、四則計算が出来るなんて。

だがこれで驚くのはまだ早く、保君の勉強についてあの人の言葉を聞いて更に驚かされた、
あの人が用意した教材が論語、五経、管子、孟子、荀子、戦国策、呉子、孫子というのは。

読み書きの時ほどのあり得ない速度ではないが、とはいえ保君は少
しずつだが、
噛み締めていくように少しずつだが本を読み着実に理解していつて

るとは。

軍師という物は知識がただあればいいのではなく、大事なのは実戦でいかにそれを生かすかだが、知識だけならば保君はあと数年もすれば大陸で並ぶ者はいない偉大なる知者となるであろうと。

ただ、最近は保君を見る度に親として寂しくなってしまう自分がいる、

三歳なんて世間の子供はもっと親が恋しいはずなのに、保君は平気なのがとても悲しい。

一昨日も大好きな保君と一緒に風呂に入ろうと言ったら「母上恥ずかしいです」と断られてしまった、

たぶんこれが反抗期というものなのだろう保君の言葉に衝撃を受けた私はその晩枕を涙で濡らした。

あの人はそんな私を抱きしめの頭を撫でながら「保もお前が大好きだから平気だよ」

と慰めてくれた、大好きなあの人に撫でられ少しだけ安心したが何故だか怒りがわいてきた。

そう、私は太守の仕事で忙しく、あの人も軍師として忙しく夫婦共に忙しい、

あの人がそれでも保君の勉強のため時間を作っているのは分かる、でも

保君に勉強を教えたりと一緒にいる時間が夫婦で私より多いのが許せない。

気付いた時には「貴方なんか大つきらい」と叫んで本気の正拳突きでぶっ飛ばしていた。

- とある場内警備兵 -

真夜中の城内警備していた時の出来事です。

最近の街の治安の良さ、しかも、この警備厳重な城に忍び込む不審者なんていないだろうと思ひ、

董君雅様に見つかったら気が緩み過ぎと大目玉でしょうが欠伸をして、

早く交代の時間にならないかと見張りをしていた時に事件が起きました。

「貴方なんか大つきらい」という董君雅様の叫び声が聞こえたと思つたら、

庭園から雷でも落ちたのかと思われるようなドカーーンという大音量が。

何事かと城内の警備兵が庭園に走ると、壁には大穴がそして庭園には謎のボロ雑巾が。

まさかボロ雑巾が筆頭軍師である池陽君様だとは。

翌日から城の機能が止まりました、全身打撲で池陽君様は絶対安静、執務室では董君雅様が

「保君が反抗期だなんて、保君に嫌われたらもう生きていけない」と涙するお姿を。

このままでは政務が進まないどころではないと侍従、家臣一同で董擢様の部屋に。

ため息をつかれ「両親が迷惑をかけてすいません」と深々と頭を下
げ執務室に向かわれる董擢様、

ため息のつき方といい謝り慣れしていることといい、この方は本当に子供なのだろうか？と思う。

とはいえ董擢様はやはり三歳児、執務室で泣き続ける可愛らしく董君雅様に抱きついて、

「母上大好きですから泣かないでください」と董君雅様の頬に口づけられました。

この後まさか冷静沈着で有名な董君雅様が飛び上がり叫ばれるとは、

「ヒャッホオオウウ、保君の愛があれば！愛の為に戦います、これで私はあと100年は戦える！！」

と叫んで机の上に山と積まれた竹簡をあり得ない速度で処理している姿が、

更に「来年からこの記念すべき日は保君記念日として休日に」と言い出し始めるとは。

あと董擢様が母親である董君雅様の変わりように引いていらっしやったのが印象的でした。

少し転職を考えてしまっ一日でした。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？（後書き）

主人公の両親や祖父の設定はオリジナル設定です。それにしても董君雅何故ここまで壊れてしまった。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた（前書き）

両親が、というか、和がどんどんおかしくなっていく、どうしてこうなった……。

書いている私が何故こうなってしまったんだと悩むのは既に手遅れか？

とりあえずこんな作品ですが読んで笑っていただけたなら幸いです。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた

- 保 -

どうも、最近の母上が怖い保です。

こちらの世界で両親が私を愛してくれているのは分かります、ただ、愛が溺愛と言いますか、ヤンでいるのが。

この前、両親共に仕事だったので、一人で鍛錬の為に城内を駆け回ったりして、

全身汗と泥まみれになって帰ってきた私を見つけた母上が、

太守の仕事で忙しいのに私とお風呂に入ろうと誘ってきましたよ。

前世でそれなりに女性経験があるわたしです、董君雅はこの世界での私の生みの親です、

とはいえ、やはり妙齢な母上にお風呂で全身洗われたりするのは恥ずかしいです。

あと私とお風呂に入るため明らかに太守の仕事を途中で放り投げているのが。

だから「母上恥ずかしいです」と断ったのだが、まさかあんな風になるとは。

羌族が攻めてきたと報告が上がリ城内は騒然というような事態になつても、

常に冷静沈着、将とはかくあるべきという姿を見せつける母上が。

皆さん見た事ありますか妙齡の女性が「うわーん」と、
漫画みたいな声あげて泣いてダッシュしていなくなるのが。

しかも、その日の夜中にも事件が、父上の方が私と一緒にいる時間
が多いという理由で、

まさか母上が嫉妬でギャラクティカマグナムを父上に決めお空のお
星様にしそつになるなんて。

危うく私はててなしごになるところでしたよ。

翌日も「保ちゃんに嫌われたらもう生きていけない」と死んだ魚の
ような目をして呟き続けていて、

あまりにもなので「母上大好きですから泣かないでください」と頬
にキスしたら復活ですよ。

ただ、

「ヒヤッホオオウウ、保君の愛があれば！愛の為に戦います、これ
で私はあと100年は戦える！！」

なんだろうこの差というか寒暖の激しさは、

これが熱帯魚の水槽だったら中にいた魚は一瞬で全滅しますよ。

しかも、この日を記念して保君記念日成立させるとか言い出すしま
つ、どうすれば。

三歳児ながらまさか胃がキリキリと痛くなるとは。

将来旅に出るつもりですが、伝えたら私を座敷牢に閉じ込めるくらいはするでしょう。

例えば私が結婚するとかになったならばどうなるんでしょうか？

太守の息子ですし普通ならばお見合いとかでしょうが、嫁さん候補が現れたら……。

「お前にうちの息子はやらん」「お前にお義母さんと呼ばれる筋合いはない」

なんてドラマのようなセリフが出てきそうなのが。

いや母上の事だから刃傷沙汰になるか、将来一体どうすればいいのか……？

後に「保君のお嫁さんは私だ」と斜め上どころではない回答が飛び出すのをまだ知らない私だった……。

- 和 -

「…………ふう」

ため息が止まらない、保君と一緒にいたいのに仕事が多すぎる、

いつそ太守を辞めようかという考えが頭の中をちらつく。

こうして私が頭を悩ませながら必死で竹簡の山を片づけている間にあの人は。

保君に勉強を教えるという大義名分は分かるが、でも保君を独占出来るなんてうらやましい。

なんとか太守として忙しい私が保君と一緒にいられないかと考えるが解決の糸口が見えないのが。

例えば保君成分を補充する為私の仕事中は保君を膝の上に置いて仕事する。

実に素晴らしい案だ！と思ったが、これは駄目だ仕事にならないのがわかる、

保君を抱き締めてクンカクンカして仕事しないで一日が終わる、そんな様子が想像出来てしまう。

どうすればいいのか頭を悩ませながら竹簡の処理をしている、とある竹簡に目がとまる。

軍に関する物で、新兵の錬度が低く訓練の相談に関する物が。

これだ！！！！閃きました。

君主自ら新兵の訓練をすれば、兵達も気を引き締め訓練に力が入る。

保君は体を動かすのが大好きらしく毎日自己鍛錬ですと言っては、

空いている時間城内を走り回っていたりしている。

それならば少々早いが保君を予備役軍人という事にすればいいんだ、
太守である私が保君に付きつきりで訓練指導を出来る、

保君は鍛錬が出来る、一石二鳥、完璧な計画だ。

それに予備役ならば、新兵の錬度の問題はあるが現在兵数に問題がないから予備役招集はない。

よし善は急げ、今日は時間も遅いから無理だが明日から私自ら新兵訓練をしよう。

完璧な計画だったはずなのに……。

まさか計画初日にして「君雅様は擢様に付きつきりで新兵の訓練を一切見ていない」と陳情書が来るとは、しかも「三歳の子を予備役にするなんて何考えている」と空に怒られた。

うつ、保君と私を引き離そうと皆が意地悪をする…………。

- 空 -

最近、妻である和の暴走が怖い

保が可愛いからすこしでもいいから一緒にいたいという和の気持ちは良く分かる、私だってこんな竹簡全て投げ捨て、和と私で保と手をつないで家族三人で出掛けたりしたい。

だからとはいえ、三歳の保を予備役軍人とするなんて非常識にも程がある、

しかも太守自らの新兵訓練と言いながら保と二人つきりているなんて羨まし、もとい情けない。

太守の職をなんと心得るのか、まあ和のそんなところも可愛いんだが。

和と結婚することが決まったあとなんか「空と一緒にしないと仕事しません」

なんて泣きながら言い出して、あの時の和の泣き顔が可愛くて可愛くて。

和を抱き締めて泣きやませてあげたんだが、あまりに和が可愛くて、お姫様抱っこして部屋に連れて行って、ふと気づいたら翌日になっ

ていて。
義母様と顔合わせたら「若いっていいわねえ」とニヤニヤされていて照れ臭かったのが。

うーん可愛い妻の願いも叶えてあげたい、でも、妻の泣き顔もちよっと見てみたい、

軍師として頭を悩ますばかりである。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた（後書き）

もう一人の主人公である司を早く出したいのだが、今のままではいつになるのやらと頭を悩ませています。皆さんからしたら作者である私が何を言っているんだということでしょうが。

司ですらいつ出せるかならば、恋姫キャラとなった日には、不安です。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第四話、運命の出会いしちゃった？（前書き）

話の展開が強引すぎるかなと、まあ常に悪ふざけだからいいやといっちゃいました。四話目にしてやっともう一人の主役を出せたとは。

第四話、運命の出会いしちゃった？

保

たぶん、今世界で一番の大根役者である董擢こと皆の保君です。

いきなり大根役者って何があったのかと言いますと、

本日、母上と父上が若かりし頃に学んだ洛陽の私塾時代の仲間の李さんという親子が、

洛陽のエリート文官だったのに涼州くんだりまで仕官しにやって来たんです。

実は今この李さんの後ろに立っている息子さんが、遂にやって来ました転生仲間！

マイソウルブラザーである前世名でいう故上尾 司君ですよ。

3年以上ぶりの感動のご対面、かということ、意外とあっさり丸鶏塩ラーメンという感じでした。

だって、二日前に神との念波での雑談で教えられていたので。

「三日後に司がそっちに行くから、お前さんの親の友達の子として見た目は違うがお前さん達ならばお互いに一目で分かるよ、まして良くも悪くも董卓に馴染み深い名前じゃからのう。」

董卓に馴染み深いという言葉に一抹の不安を感じますが、

遂に司ちゃんに会えるのが、離ればなれになっていた大親友に会える。

あまりの嬉しさに毎日まだかなまだかな学研のおばちゃんまだかな状態です、

まあ、学研の奴やったこと無いのでまだかななんて思ったこと前世で一度もないのですが。

前日の家族揃っての夕食の際に母上から伝えられた際も知らないふりの演技しましたが、

「明日、私達夫婦の私塾時代の友達の子供が仕官しにやってくるのですが、
保君は良い子ですから平気でしょうが同い年の子供だからええったりしないので仲良くしてあげるんですよ。」

はい、平気ですよ、生まれ変わり仲間て前世からの飲み仲間ですので、なんて言えませんが。

で、当日

私も呼ばれて玉座の間で董家ファミリーや家臣一団と御対面ですよ。

やってきた司ちゃんのお母さんが色々突っ込みがいのある格好で。

何故この三国志の時代にタキシードがあるのでしょうか？

なんで李さんは女性なのにオールバックで光り輝く真っ黒なタキシードなんですか、

宝塚の男役なのでしょうか？今から歌いだすのですか？

あと神のヒントである董卓に馴染み深い者で李という姓に大変嫌な予感がして仕方ないです。

「この子は私の自慢の息子で、ほら自己紹介しなさい。」
前に出てきた司ちゃん

「僕は李儒文優と言います、これから母様共々宜しくお願いします。」

久しぶりの司ちゃんの声と普段と違う喋りについてニヤツとする。

まあ私も昔は「俺」司ちゃんなら「自分」と読んでいたがお互い親に強制されたなど。

それにしてもあの【李儒】ですよ、弘農王を毒殺しようとしたり三国志のいぶし銀な悪役、
神にこの大陸の戦乱をおさめる言われたが董家に李儒、うん、
弟で董卓が産まれたら司ちゃんと二人で洗脳・・・、教育するしかないか。

とりあえず司ちゃんと話したいので、なんとかしますか。

私専用の巨大な椅子にちょこんと座っていたが椅子から降りて、
司ちゃんの前に立ち右手を差し出し、「私は董擢、君と友達になりたい。」

うん、大根役者にも程がある演技だ、まあ一応、三歳児だから平気だろう。

「はい、僕なんかで良ければ友達になって下さい。」と手を握ってくる司ちゃん

互いの親達は子供どうし仲良くなれそうで良かったという顔していたが、

私と司ちゃんの二人はお互いの演技の酷さに吹き出しそうだったな。

司

チャッチャチャー　チャッチャチャー　チャッチャチャー
チャッチャー　チャッチャー　チャッチャー

BY特攻野郎Aチームのテーマ曲

「李儒文優　真名は司　陰謀の天才だ、弘農王だって毒殺してみせ
らあ、でも献帝だけは簡便な！」

「司ちゃんいきなりどうした？その言い方なら俺がフェイスマンか。
とりあえず言ってみるか」

「いや電波を受け取って言っただけで保さんがわざわざやらないで
も。」

「俺は董擢孟高、真名は保、自慢の可愛さに涼州の民はイチコロさ、
ハッターかまして
オヤツから涼州馬まで何でも揃えてみせるぜ！三国志に合わせると
こんな感じか？」

「いいと思いますよ、いや、保さんがハンニバルでしょ、なんでフ
エイスマンなの!？」

「リーダーには似合わないから董卓が生まれたらあいつ偉くなっ
たんだからハンニバルにするか、

問題はモンキーを誰にするか?頭がぶっ飛んでいるメカの天才だか
ら……。」

とりあえず特攻野郎Aチーム談義はいいや話を戻そう。

“もう一人の主人公なのに四話目にしてやっと出番が来るってふざ
けるな!作者出てこい”

と誰にだか分からないがとにかく叫びだしたいこと故上尾 司です。

話はほんの30分前、玉座の間でのご対面に戻りまして。

転生から別れて3年8ヶ月と14日ぶりに、ついに保さんと会えま
したよ、

周りから何処のノインだ!と突っ込まれそうですが気にしません。

それにしてもあの保さんが愛らしい顔していて目の前にやって来て、
「君と友達になりたい」って、どんな冗談かと思いましたよ。

前世での自分と保さんがサングラス姿で街を歩くと、渋谷や歌舞伎
町でも、

混んでいる道でも何もしていないのにモーゼみたいに人が避けてい
ったくらいなのに。

まあ向こうも前世での見た目の欠片もない可愛くなつた私が、
「僕なんかで良ければ友達になつて下さい。」発言に笑いそうだったのが。

懐かしい、早く保さんに突っ込みたいし積もる話もしたいがどうすればいいか。

「知りあつてすぐに友達になれてよかつたは、子供達だけで話したいでしょうから、

孟高、文優君を貴方の部屋に案内してあげなさい、あとで部屋にお茶と菓子を持っていかせますから。」

“ おお、ナイスアシストよく分かっているぜ保さんのおばさん”

ギロツ

一瞬だが今にも射殺さんとはかりに睨まれたぞ、心を読まれたのか！？

保さんに手を引かれて玉座の間を後にし保さんの部屋へ。

「今時、劇団ひまわりでもあんな大根役者なガキはいないでしょう。あと、おばさん怖すぎ、保さんのおばさんと思つたら視線だけで殺されそうだった。」

保さんの部屋について周りに人がいないからいつもの喋りにする。

十年以上の付き合いであり笑いながら気楽な口調で喋る。

「女性に対しておばさんはあかんだろ、実際若いんだし、それにしても」

自衛隊員が僕って!?“自分は”でなくて?あとおかんは宝塚か?”

「現役自衛官でなくあくまで元防医卒で今は医官ではなく親の跡継いだ、

単なるしがない開業医ですよ、間違えないでくださいよ。

あと宝塚言っな〜!まあ、いつ歌って踊り出すんだと何度も思ったが。」

そんな私の発言に対しニヤニヤしながら保さんが口を開く

「うわ〜、なんて厭味、あんなでかい総合病院の後継ぎがしがない開業医って、

それ以前に今はって、死んだのもう3年以上前なんだから前世と言うべきでは。」

「保さん突っ込みが細かい。嫌味というのが金持ちなら保さんの家の方がすごいじゃないですか。」

前世トークと特攻野郎Aチームで盛り上がるが、冷静に考えたら生産性がなさすぎる。

「保さん、とりあえずお互いの知っている知識やら現状確認しませんか?

時代がいつなのか、世界がどうなっているか話をしましょう。」

つい先ほどまでケラケラと笑っていた保さんも僕の言葉に真面目な顔になり

「そうだな、まずは現状確認をしよう、だがその前にだ。」

「・・・・??????」

私が頭上に巨大な？を浮かべていると。

「姓は董、名は擢、字は孟高、真名は保、涼州へようこそ、そして久しぶりだ義弟」

「姓は李、名は儒、字は文優、真名は司、今までも、そしてこれからよろしくお願いします義兄」

「ああ、前世ではありがとうな、そしてこの三国志の時代でもよろしくな、会いたかったよ。」

前世で義兄弟の杯交したが、いつも笑顔な保さんが少し涙ぐみながら抱き締めてくれた。

自分もちよっと涙ぐみながら抱き締めて「会いたかったです。」

感動的なシーンですよ、普通ならば。

私の「会いたかった」の所で侍女の方がお茶とお菓子を持って部屋に来たのが、

男の子同士で涙ぐみながら抱きしめい「会いたかった」発言。

城内の侍女間で僕と保さんの関係が間違っただけでなく、

まさか、
大陸全土で売れに売れまくった伝説の大人気801本になるとは知る由もなかった。

。そんな未来を知っていたならこのシーンをやり直せたんだが……

第四話、運命の出会いしちゃった？（後書き）

とりあえずこの話の主役である保と司がそろいました。

とりあえず司とかの設定は近いうちにいろいろ公表しようかと思えます。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？（前書き）

仕事になんでこんな物を書いているのだろうか、明らかに仕事で悩んでいるんでしょうねえ。

みづらじゅん言つところのDS（たしかに）ですよ、とりあえずそんなDSな作者（たしかに）によるDSなお話が始まります。

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？

保

地獄絵図です、ただいま隴西郡の城の玉座の間が地獄絵図ですよ。

あっ、どうも、やっと親友と合流出来たはいいが嫌な予感しかしなかつた董擢こと保です。

玉座の間が地獄絵図とは？何があつたか説明をしますと。

原因は先日、侍女に見られた私の部屋での出来事についてですよ。

私としてはやっと会えた友人で、つい感激して抱き締め「会いたかつた」と。

ただ、侍女の方々に前世での親友であり義兄弟であり一緒に転生したが、離れ離れになっていてやっと会う事が出来たなんて事を知っているわけがなく。

今日初めて会つたのに泣きながら抱き締めあい会いたかつたよ発言する私達

侍女達が皆鼻血を流しながら「ここはなんて桃源郷」と遠い目をして呟く独り言に殺意が。

どうやら私と司ちゃんは4歳目前にしてシヨタBL野郎と侍女達に認定されたようです。

私としましてはこの問題を早く解決したい、あと侍女達のリストラを検討したいのですが。

私だからリストラで済みますがこれが正史の董卓だったらどうなっていたでしょう。

侍女達の解雇とか話がそれているので話を本筋に戻しましょう。

シヨタBL野郎扱いと既にこの段階でかなり死にたい要素満載ですが、

侍女達だけならまだしもお互いの親に知られてしまったのが問題で。

これが私達がもし本当にシヨタBL野郎同士なら当人達の性癖の問題であります、あくまでも侍女達の勘違い妄想、困った事に親達はエキサイト&エスカレートで罵りあいですよ。

「純粹だったうちの保君を返せ、この呪われたクソガキめえ！」
ついには冷静沈着不動の董君雅様と世間で言われている母上が斬馬
刀で司に斬りかかろうと。

“駄目えええ、勘違いで私の義兄弟を殺しちゃ、って、間に合わないー”

母上の攻撃から司を守るうとするが明らかに間に合わない、これではと思つたら。

ガギイイイーン

凄まじい金属音が玉座の間に鳴り響く。

母上の斬馬刀が弾かれている、斬馬刀の横つ面を司の母親である李肅さんが、右斜め下から切り上げるように振り抜いたモルゲンステルンの打撃によって。

突っ込みたい、何処から取り出したんだモルゲンステルンなんか！？

大体あれは13世紀以降のヨーロッパだろう武器として誕生したのは！？

68

『兄ちゃん野暮な事は言いなさんな』

神の声ではないが、なんか謎の警告が来た。

警告を無視して突っ込もうとすると。

『その突っ込みをすると貴様は苦しむぞ！李儒の母親役で何故李肅なんだ！』と、

李肅も董卓とは縁深いが何でもありの世界でもやるならば李儒の兄弟だろ、と言われたら。』

うん、この警告は素直に聞いた方がいい、警告を無視するとこの話が破綻という惨劇が待っている。

『安心せい、既に最初から破綻している。』

うるさい！！とりあえず、この天の声の言う事は聞いておこう、変な声だが。

“言葉でなく心で理解できた！”

母親達の戦いに戻そう、うん、ほんの数行程何も無かった事にしよう。

母上の攻撃をはじめた李肅さんが吠える。

「それは私の台詞であく、和が私の空を奪っただけでなく、お前の息子は私の大事な司を奪おうとするなんて、この薄汚い泥棒猫親子め！！！」

“何を・・・何を言っているのか分からないよ、カヲル君”

自分の理解の範疇を越える李肅さんのあまりにもな発言に何処かの14歳の霊が降りてきたよ。

こうなったら取る手段は一つ、現実逃避だ。

“母上いけー私の心が悲鳴をあげているから、とにかく母上が勝つて話を無理矢理まとめてくれえ。”

「貴様が勝手にうちの旦那に色目を使っているだけだ。泥棒猫は貴様の方だ！」

母上の斬馬刀が今度は右から左への横薙ぎ、それを李肅さんが伏せて回避する、

そして、立ち上がるのと併せて母上に向かって突進、斬馬刀の弱点である懐に飛び込もうと。

母上危うし！？と思ったたらこの動きを読んで、横薙ぎ中に握っていた柄から手を離す、

手から離れた斬馬刀は一直線に飛び、轟音をたて壁に突き刺さる。

問題は斬馬刀が父上の顔面ギリギリ数cm脇に突き刺さっていたのが。

泡吹いて失神する父上。

戦いに目を戻すと母上は斬馬刀を振り回した際の遠心力を使って回転し、

懐に飛び込んでからの一撃とした李肅さんの攻撃を避けるだけでなく、

最盛期のフランシスコ・フィリオ以上の鮮やかな上段回し蹴りを決めた。

見事に決まった、蹴り決まって李肅さん吹き飛んでいったし。

「やったか!？」

母上その発言はいくらなんでもフラグです。

母上の見事なK・O劇を見ていた私、ここでふと私の横にいる司を見るとニヤリと黒い笑顔を。

これはヤバい、本能が伝えているこの馬鹿場を更にかき回すつもりだ。

- 司 -

私が黒い笑みを浮かべた事を保さんは気づいたようで、ただ、もう遅い。

「お母さんも董君雅様もやめて下さい、僕は保お兄様のことが・・・フガモガ」

「冗談でもヤメローー!」

久しぶりに会ったんだ、少くくらは保さんを振り回してあげないといけない。

保さんが僕の口を塞ぐが時既に遅し、途中までだがバツチリと母さんの耳に届いたな。

危険な賭けではあった、実際母さんを倒した董君雅様が振り向きこ

ちらをロツクオンしているし。

「排除、排除、排除、保君に近づく悪い虫は排除する」

怖いドス黒いオーラが漂っている、だが、母さんと僕の絆を舐めてもらっては困る。

「た、た、ターミネーターじゃないんだから、なんで立ち上がれるんだよおおお。」

保さんの声に震えが混じっている、董君雅様が後ろを振り返るとそこには。

ペツと血の混じった唾を吐きフラフラになりながらも立ち上がる母さんの姿が。

「なんや今のが攻撃なんか、気合いの入った社交ダンスか、涼州者に洛陽で磨きぬいたほんまもんの暴力ちゅうもんを教えちゃる」

母さんが立ち上がったのは嬉しいが、何処の地域の人間だか分からない口調になっている、

あと気になったのはこの時代の人間である母さんが社交ダンスを何故知っている、まあいい。

「母さん、たとえ上司でも負けてはいけません。」

母さんが一瞬だけだがニヤリと笑ったのが見えた。

立ち上がったばかりの母さんに対し董君様が間合いを一気に詰め
トドメだと、
右ストレートを母さんのボディにねじ込んだ・・・はずだった。

母さんは右ストレートをギリギリで避けてわき腹と左腕で挟んで抑
えていた。

「捕まえた」

母さんは空いている右腕で董君様のうなじの辺りをつかみ避けれ
なくしてから、
いったん上半身を背中側に思いつきそらしてから頭突きを。

渾身の一撃が相手の顔面にめり込む、さらに一撃で終わりなく、更
にもう一発、もう一発と。

何発入ったのだろうか落ちていであろう董君様、それにたいし
血まみれだが母さんは笑顔で

「司が応援してくれる限り母さんは無敵だ」

そう言って母さんは倒れた。

- 保 -

お互いの母親の戦いがダブルK・O・勝者も敗者もない今回では
一番優れた答えが出た。

実に空しい戦いだった、そして、この後どうすればいいのだろう、父上は気絶、母上はノックダウン、司はアリーヴェデルチ、玉座の間は廃墟と化している。

仕方がないからこういふときは“そのうち私は考えるのをやめた”と。

ちなみに、この司の悪ふざけからはじまった戦いは保と司のシヨタBL評価どころか、

お互いの家族を混ぜた壮絶な愛憎劇と侍女達の噂話で面白おかしく脚色され、

瓦版で、本で、お芝居で千年たっても語り継がれる名作になるとはこの時の保は知る由もなかった。

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？（後書き）

書いていて思った、酷過ぎるそうでも酷いが、
思い付きを文章にはいけないと反省するばかりであります。

まあ、笑ってくれる人が一人でもいてくれたら幸いであります、
皆さんのご意見、感想お待ちしております。

第六話、鑑誕生秘話（前書き）

今回はいつもよりは少しだけ真面目要素のある回です、とはいえ相変わらずふざけた内容ですが。読んで笑ってもらえたら幸いです。

第六話、鎧誕生秘話

司

今現在執務室ではこの涼州を統治する最高幹部が集まって会議をしております、

口調がなんで説明口調なんだって？それは言わないお約束です。

「前に話をしていた兵募集についての件はどうなりましたか？」

まずは太守として董君雅様が、筆頭軍師である池陽君様に。

「雇用対策も兼ねての兵募集ですが予算との兼ね合いもあり、希望人員の三分の一の千名の採用が適当かと。」

「軍を率いる人間としては各部隊の希望人数を出した故の三千人だが、

兵が多くても練度の問題も、100万とかで力押しするのではないから少数採用もやむを得ない。」

「財政面としましては、千人程度で宜しいかと、たしかに理想は三千名ですが。

現在は羌族との関係も良好で、他州とのいざこざもなく兵数がさほど必要ないかと。」

「警備部は今の意見に反対です、兵の数が今は足りていても明日は？ならば明後日は？と将来は分かりませんが、実際州内でも治安悪化の報告が。」

警備部が募集するのは、今回の兵はただ戦争で戦うだけの兵ではなく、

街の区画整理案とあわせて治安維持での警邏要員として役割が。」

警備部責任者は一旦話を止め、一口だけ茶をすすり話を続けていく

「また兵の維持費ですが当初の負担よりかなり減るか」と、

試験的に運用しております軍の演習を兼ねての隊商の護衛任務ですが、

隊商には護衛の対価として兵糧の一部負担をしてもらうことで、

部隊は演習出来、隊商及び軍どちらにも利益があります。」

「軍師として疑問が、今までの兵より費用をかけないですむというが、

今回がたまたま上手くいき負担をおさえられた可能性は？」

「軍師が言われたように最悪を想定していくべきなのではないかな？と。」

各々の担当する職務に誇りがあり熱い議論が続くなか、ここで和様が

「色々な意見がありますし議論無き所に発展はないですから、

とりあえず議論は別として、保ちゃん司ちゃん子供らしく話なさい。」

「和の言うとおり、貴方達は自分達の可愛さが分かっていないの？」

「母上、なにも今言わないでも、ねえ父上からも言ってください。」

「ほら保も言っ、貴方は黙って下さい!!!」「・・・はい。」

真面目な議論が延々と続いているなかで途中から変な発言が。

あつ、どうも挨拶が遅れました李儒文優こと司です、

この間まで3歳でしたが、少しだけキンクリして5歳になりました。

『とりあえず歳をとらせたのは今のままでは話が進まないからだ。』

変な声が聞こえてきました、前に保さんから教えていただいた天の声でしょう、

これを聞いたらその件については触れてはいけないとのことですので、話をかえましょう。

なんで5歳児である私が執務室での政務を知っているかということ、はい、私も保さんも文官として参加しているからです。

これだけでも常識的に考えたならあり得ない事態なのですが、和様が保さんを膝上に座らせ抱き締めていながらで、私が母さんの膝上に座らせられ抱き締められているというのが。

保さんは会議の時に「どうしてこんなことになったんだ」とよく呟いています。

まあ、原因は前回のアレがきっかけですね。

私からしたら子供の可愛らしいイタズラだったんですが。

あれ以来僕は和様に、保さんは母さんに目をつけられたと言いまし

ようか。

監視の目がつき二人つきりになるのが許されなくなりまして、冗談ですよと言っても一切話が通じない事態になりました。

「保君に近づく悪い虫は」と和様に殺気発しながら言われると怖くて。

保さんとこの時代についてや未来技術の発明についてこっそり話し合えなくなりまして、
ならば仕方ないと当初の予定では成人してからですがカミングアウトしましたよ。

小学校にも行っていないような年齢の子供が真剣な顔で話をしても、よくて子供の作り話と一笑にふされ、悪ければ頭がおかしいと。

最悪牢屋送りなり斬首の可能性があるかもと気が気でなかったですが、

「貴方は私がお腹を痛めて産んだ子供に違いないのですから安心なさい、
今まで誰にも言えなくて辛かったでしょうね、でもお母さんに秘密を話してくれてありがとう。」

言われて母さんに抱き締められた時は母の胸でワンワン泣きましたよ、

保さんも空様、和様に抱き締められて泣いていました。

それだけならば良い話でしょうがそのあと二人に説教が待ち構えていましたよ。

「お母さんになんで話さなかったんですがそんなに信用有りませんか？」

一番辛いのは、お母さんに正直に言わず嘘をついていた罰として、こちらでは子供なのだからお母さんに甘えなさいと言われたのは。

ダメージでかいです、四捨五入すると四十になるおっさんが、可愛い子供を一生懸命にやって媚を売るような仕草するのは。

おでんと日本酒がしっくりくる年齢のおっさんですよ、目をつるつるさせて上目遣いしたり甘えるんですよ。

どんな羞恥プレイですかまったく。

この姿をビデオカメラで撮影されて披露宴で流されたら会場で即自殺ですよ、

まあ三国志の時代でビデオカメラが存在しないので助かりましたが。

保

この世界に転生してから私の考えでは話すつもりがなかった秘密だが、司の悪ふざけをきっかけにまさかお互い親に話す羽目になるとは。

“母への隠し事が相当後ろめたく、いずれは話したい”と言っていたが。

司は前世で家族という感じがしない家庭に育ったから、今の生活が嬉しくて仕方無い、本当の親子になれたと笑顔で語っていたのが。

こういう話をするといいい話だが、やはり司には色々とお返しをしてあげないと。

羞恥プレイが、とか言っているが、それはこちらの台詞だと、だいたいアイツは性に関しての器のでかさが半端でないのだから。

羞恥プレイなんて言っているが、それで喜んでいる変態に違いない、何故ならば私は奴について神から聞いているのだから。

転生直後に司がオムツかえられる事に喜びをみいだしていたのを、オムツプレイOKな人間が子供演じる羞恥プレイくらいいくだと。

転生、未来の知識はお互いの家族しか知らない秘密としましたが、それにしても技術を伝えるのがこれほど難しいとは。

私達が知恵を出して政務を執り行うにはいささか若すぎるのが、おかげで、私達が仕事をする時は家族しかいない時なのですが。

未来の技術を伝えるときなんか大変ですよ。

今日まで思い付かなかったものを発明するわけですから、

鎧の時とかやりましたよ、外で私が子供演技して鎧を作るまで。

「お母さ〜ん、お馬さんに乗れないよ〜。」泣きつく演技

「涼州の人間が恥ずかしいぞ」厳しく怒った演技

「お母さんごめんなさい、でもお馬さんに乗れなくて、

足かける道具があれば簡単にお馬さんに乗れるのに。」甘えた口調で

「仕方ないな保は甘えん坊で、仕方ない望む物を作ってあげよう」
優しい口調で

「お母さ〜ん、お馬さんに乗れたよー、お母さんありがとう、大好
き」抱きつきながら

「これは馬を取り扱うのに便利ではないか、では軍で採用だ、保偉
いぞ。」

この一連の流れが必要だそうで……。

「鑑の詳細な図面とかだけでいいのに、昼に描くからそれを夜に渡せば」と伝えたが。

私何も間違えたことも変なことも言っていないく常識的発言ですよ。まさか母上が絵コンテまで用意し更に演技指導まであるなんて。

嫌だと言ったら泣きだし始めた、仕方ないからやると伝える。

直前になってやはり嫌になってゴネたら「鑑なんかいらぬ」と言い出した。

父上がさすがにそれはと注意しに行ったら、どこで覚えたのかマッハ突きでぶっ飛ばされていた。

頭と胃が痛い、助けてくれ……。

あと司が陰からこちらを見ていてニヤニヤしていやがった殴りたい。

和

保ちゃんから聞いた鑑を作る為に保と打ち合わせをする。

鑑を発明までに不自然な流れがないか、完璧にする為一連の流れを教える。

私の考えた完璧な鑑が出来るまで物語を保ちゃんは要らないと言ってきた。

「保ちゃんが反抗期だなんてお母さん生きていけない」と泣いたふりをしたら保ちゃんが「やりますから泣かないでください」と。

本当に保ちゃんは何が不満なのだろうか、この完璧な脚本が。

保ちゃんの可愛さを皆が知って、私は厳しくも優しい母親になって、鑑が出来て騎馬軍団は強くなるし、保ちゃんが私に“大好き”と言ってくれる。

当日になって保ちゃんがやはりやりたくないと言い出した。

「保ちゃんがやらないならば鑑なんか要らない」と言ったら空に怒られた。

保ちゃんに大好きと言ってもらえない辛さが空には分からないのだろうか、
意地悪をする空、頭にきたから保ちゃんが名付けてくれたマツハ突きでぶっ飛ばす。

保ちゃんは良い子だから喜んで脚本通りやってくれた。

保ちゃんに抱きつかれて「お母さん大好き」と言われて鑑も出来た。

幸せな一日だったと布団に入る。

夜寝ていたら警備兵に起こされた、錬兵場でボロボロになった空が

見つかつたと、
族が侵入したのだから城内の警備を嚴重にするよつに指示する。

第六話、鍮誕生秘話（後書き）

相変わらずどうしようもない内容ですが読んで笑っていただけたら幸いです、ご意見感想お待ちしております。

それにしても、和を出すと話が勝手に出来上がるのは何故だ・・・。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第七話、発明するのはいいけれど（前書き）

今回は前回に続いて発明に関する話を。

とりあえず恋姫原作キャラをそろそろ出したいんですが。

第七話、発明するのはいいけれど

保

とにかく司にギャフンと言わせたい、まあ今時ギャフンはないだろうが。

そういえば何故ギャフンという擬音が誕生がしたのだろうか？

ポインという単語を大橋巨泉が発見した時のように、もう、これはギャフンとしか表現出来ないような何かがあったのか？

どうも、くだらない事に必死で悩む董家長男の保君です。

まあ、なんでいきなりこんな話なのかと言いますと前回の件ですよ。

単なる未来知識保有というイカサマチートで鑑作りしましたが、鑑が出来るまでにさんざん母上に振り回され続け泣かされましたよ。

それに対し親友である司はさすが転生先が“あの李儒”ですよ、一連の流れに困惑する私を見て助けずニヤニヤするんですから。

伊達に弘農王毒殺しようとする人間ではありません。

まあ、司に嫌味を言ってもニヤリと嫌な笑顔を見せて、

「親子の触れ合いを邪魔したくなかっただけですよ」と言われてお
しまいか。

私の鑑の時みたいにくソ恥ずかしい寸劇やって色々發明しろよ、
なんて思ってたやらせても司は動じなかった、普通にこなされた。

司はこの世界で絶賛マザコンだから母親が喜ぶならば平気なんだろ
う、変態め。

乗馬後に馬の脚を見て「お馬さんも靴が無いと蹄が痛そう」
と目をうるうるさせて親の前で心優しき子供の演技を普通にしゃが
って。

それにしても寸劇やって可愛らしさアピールからの發明って、
訳のわからん流れ作った奴出てこい説教してやると叫びたい！

まあ、母上が出てくるだけなんだが。

説教したいがどうせ泣かれて私が悪くないが謝っておしまいと。

「理不尽だああああー！！」

分かっている母上の涙はテレビでの上島竜兵の技と同じで、

こちらが見ていない隙に涙ぐむという、見せるならぬ魅せる技なの
が。

分かつちやいるが男はやはり女の涙には弱いという生き物で。

うん、女で失敗する人間だな、こんな発言しているようだ。

「保さんは女で失敗しませんよ、だってそれ以前に。」

いつのまにか親子寸劇から戻ってきた司がいた。

「心を読むなよ。」

「こつという時のお約束、口に出ていましたよ。」

そんな馬鹿な！？、これが“そんなバカラ！”ならば、
バカラ賭博中に警察に踏み込まれて捕まった芸人だったな。

「なんか下らない事考えていますね、顔に出ていますよ。」

「そっか、まあいいや、ハマらない理由は？」

「私も保さんの家も親が息子依存症と言っていいくらいの溺愛」

だろうなあ、連れていくのが才色兼備家柄性格完璧な女でも、

「うちの子は渡さない」の一言でおしまいな、しかも運が良くて。

悪ければあの斬馬刀の出番だろうな、しかも、母上のことだから、
ゼンガー・ゾンボルトみたいな名乗りをして一刀両断にと。

「我が名は君雅！董君雅！！保ちゃんに近づくと悪を断つ剣なり！！、こんな感じですかね？」

あり得る、普通なら絶対にあり得ないが母上なら殺りかねない。

やりかねない、ではなく“殺り”かねない、此処ポイント、次のテストに出ます。

「なんであんな悪い意味で個性的なんだ。」

「そりゃ作者の都合でしょ？」

「いや作者も気付くと母上パートが勝手に出来上がっていると。」

「はあつつつ・・・」

お互い困った母親だなと子供らしくないため息をつくのだった、とりあえずメタな発言は無かった事として。

空

お久しぶりです皆さん、同じ夫婦なのに全く出番が無い空です。

うん、真名の読みが空そらではなく、やはり空くうだね、家庭の中で話の中で存在感がない空気並みの扱いと。

こんな未来を予想して今は天国の両親は真名をつけてくれたんです

ね、

なんて先見の明があつたんでしょ、未来予知にも程があります。

グスツ、泣いてなんかいません。

私の涙は置いておいて、あと、やはり泣いてたという突っ込みはなしで。

今現在の涼州の状況とか開発具合について話をしますか。

まずは軍事から、

保達に教えられた鎧で涼州馬を活かした軽装弓騎兵の強化。

例えば軽装騎兵に必要な技術として一撃離脱戦法として、騎乗しながらの後方射撃のパーティアンショットを教えられましたよ。

訓練に教わった流鏑馬、笠懸を採用、騎上射撃の練度が上がりました。

司君が言うには「この時代最強の騎馬軍団が出来た」と、軍師としては大袈裟と思つたが、保達の知る世界の歴史では、約千年後に五胡達の子孫が短期間で世界の大半を支配したと。

まさか五胡の軍団が漢だけでなく大秦近くまで支配したなんて、

だとしたら、この騎馬軍団が世界最強というのもあり得ると。

さらにこれらに関する事で、流鏑馬、笠懸といった射撃練習で、保が、

「本当は犬追物もあつた方がいいが殺さないとはいえ犬好きとしてやりたくない、

必要な訓練は分かるが犬を飼っていたから愛犬でなくても抵抗が。」

こんな発言をしていました、そんな保に対して司君が、

「犬好きな女性とのフラグが今の発言でたつたね」と謎な言葉を。

一方、和は保に「犬に優しい保ちゃん、なんて可愛いのに。」と、これだけならばまだしも「犬が駄目なら虎がいるじゃない！」

「何処のマリー・アントワネットの発言だよ！」と口を揃え保と司君が謎な突っ込みを叫んでいました。

まあ保大好きな和にかかれれば、保の為ならなんだつてと、今から騎乗練習よと、弓片手に虎を狩りに一人で行くとは。

この後、うちの騎兵は虎退治出来ないと一人前と言われない、あり得ない強さの軍団になるとは思いもしませんでしたよ。

まあ、飾りや服の材料として使えるからと虎の毛皮、

漢方の精力剤として性器が高値で売れ経理としては助かりましたが。

あっ、軍事に関する雑談で保が言うには司君は天才との事で、私からしたら保の頭の回転の良さや知識だって恐るべきだと。

司君の凄さという点で、弓もだが女子供でも簡単に撃てる弩があった方が楽だと言い出し、

元戎という連射出来る弩を発明したことが保には驚きだったようで。

保が言うには「存在したというが構造不明な物なのに、どうやって作ったんだよ！だから本物の天才は嫌になる。」

“ごめんなさい保、お父さんは泣いていいですか・・・？”

二人には未来知識があるとはいえ凄い発明を息するようにされると。

それなのに保が卑下するとそれ以下なお父さんの立場は・・・。

保

なんか父上が泣くんでいる、何かあったのだろうか？

父上に軍師として知的好奇心が刺激されるだろうと、釣り野伏せ、車懸かりの陣、

ハンニバルなど歴史的な戦術やら武将やら教えてあげることにした。

まさか父上が「保がいれば僕は要らない子なんだー！ー！！」
と泣きながら叫んで母上の元に辞表を出しにいくなんて。

まあ筆頭軍師が子供に凹まされ辞表は洒落にならないと、
説得されてしまったよ、母上の肉体言語ですが。

司

「足りない、足りない、とにかく足りない！！！！」

ついつい叫んでしまった。

保さんと私が中心となって進めている涼州最強化計画が進まない、
時間が足りない、人手が足りない、予算が足りない、ナイナイ尽く
し。

軍事技術とならば黒色火薬、鉄砲、大砲、方位磁石、
大陸全土の詳細な地図作成、細作網を大陸中に広げたり、
バリスタやら投石器といった攻城兵器。

いくら予算と時間があっても足りないのが、予算が。

保さんが進める、商工業で莫大な利益をあげているが、うん、普通ならば十分すぎるどころではない利益なんだが。

とはいえ軍事、政治、商業、工業と至る部門で出ていく額がでかいのが。

しかも、困った事に涼州は偏狭なのに他の州より治安が良く景気が良い、
商売人だけならまだしも他の州から野盗とか流入するのが。

そうでなくても忙しいのに、子供が過労死しそうなほど忙しいって
どういうこと。

とりあえず捕まえた野盗は取り調べ、経済難や悪政の被害からやむ
を得ず盗人になったなら、
勿論殺人、強姦等の重犯罪していないが条件ですが死刑ではなく懲
役刑を。

そして牢獄内で建築など技術を教え出所後の働き口の問題を無くす
ようにしたりと。

それでも野盗が流入してきたり治安が悪化した時は皆叫びましたね。

そして、保さんが遂に壊れました。

「こうなったら見せしめにヴラド・ツエペシユ方式だ!!!」

第七話、発明するのはいいけれど（後書き）

前書きにも書いたがそろそろ恋姫キャラを出したいなと思ったはいんです、

ただ問題は今現在黄巾党すらまだまだ先なので出てきても赤ん坊とかなるのが。

それでは駄目だな、ならばどうするかと頭を悩ますばかりです。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第八話、天水からの刺客（前書き）

やっと恋姫のキャラを出せましたよ、いや、これを出したと言っ
ていいのだろうか。

詐欺だと言われても仕方がないレベルですいません。

第八話、天水からの刺客

保

三国志の世界に転生したはいいが涼州隴西郡から出た事がない為、狭い世界での生に慣れ過ぎて正史ではなく外史なんだという事を忘れていましたよ。

まあ、両親の性別が入れ替わっていると、私の存在や、李肅、李儒親子とかも酷いが、でも、そんなのが当たり前の狭い世界での生活ですよ。

あつ、名乗り遅れました董家長男の保です。

前置きでうだうだ言っていたのは今東屋にいて驚かされていたもので。

涼州に被害を出す？や羌への対策の報告で母上の友達がやって来たのですが、ちっこくて凄く可愛い現代だったらアイドルに余裕でなれそうなるツクスの娘さんが。

こんな可愛らしい人があの馬騰寿成だとは。

しかも、この人が馬膾と驚いていると、いきなり

「私はとお姉様の親友だから、真名は琅ろうかん？っていうんだけど真名交換しよう」

といきなり言われたのに更に驚かされた。

会って10分もたたずにフランクに真名預けて来るとか、なんだこの自由さ。

自分のどころか娘の馬超さんの真名も預けると言いだして、母上が真名をなんだと思っっているんだと怒ったら謝っていたが。

どうやら母上と同じ年という事だが、そうなると29歳でこの見た目に喋りとかって反則だろ。

背は150cm未満？の小さな体で、栗色の長い髪をポニーテールにして、

背だけでなくちっちゃな可愛らしい顔に不釣り合いな太い眉、

年齢的にはアウトだが柔らかい言い方で成長途上という感じな胸、ギロツ

“怖っ！！！！！”この世界の人間は心が読めるのか、めっちゃ睨まれた、ちびりそう。

ちびりそうな恥ずかしい事態を無かった事にして話を元に戻しましょう。

鮮やかなスカイブルーの上着に胸元にはオレンジのスカーフ、真っ

白なショートパンツ、
そして足元はスニーカー、うん突っ込まないぞ突っ込んだら負けだ。
この中学生と言っても通じるような可愛い見た目でピョンピョン跳ねるような動き。

何、この合法ロリな生き物は！？これで三十路直前の子持ちって。

「ええい連邦のモビルスーツは化け物か！」

あまりの驚きに大佐になってしまったよ。

AVとかで「女子校生〜」なんてタイトルの女優のセーラー服に無理なのがあるが、
うん、ガチでいけてしまうな、年齢上問題ないがビデ倫審査通るかな？

体は子供、頭脳は大人のコナン君と同じですよ、

『お前と司なんか精神は大人とおり越しておっさんだろ！』

うん？今だれかに突っ込まれた、天の声か？

そういえばコナンで思い出したが昔AVのタイトルで「チン探偵ポ
ン」ってあったらしく、

キヤッチコピーが「見た目は子供、アソコは大人！」というのが、
誉め言葉としてどうしようもないな！と笑ってしまったな。

「何か今そっちの方向でどうしようもない不快な思考を感じたよ。」

「私の方を見ながら可愛らしく言っているが殺気だだ漏れなんです、こっちは見ないで。」

「つつい母上と見比べてしまっ、琅？さんが若すぎるだけで母上は年相応ですが、まあ、最近母上は太守の仕事が大変で疲れて老けて見えると愚痴っていたが。」

「保ちゃん、何か言いましたか？」

「はい、先程の琅？さんよりも濃密な殺気が飛んできましたよ、ちびつと漏れちゃったよ。」

「な、な、な、何もありません母上」

「よし！ちびつたことは無かった事にしよう。」

母上は若干ウエーブのかかった薄紫色の腰まで届く長い髪に、丸い輪郭に少しつり上がったキツイ感じの目付きに細い縁無し眼鏡、琅？さんの可愛いとは対照的なクールビューティーという見た目が。

「知的眼鏡いいねえ、って、実の母親に対して何を思っているのですよ、私か私は。」

「保ちゃん、あとで一緒にお風呂に入りましょうね。」

急にニコニコした母上、母上の背景が一瞬お花畑になっていたね、
とはいえ、

何を言っているんですか！？今、言う事ではないよな、あとお風呂
一緒に恥ずかしいです。

母上がシュンと落ち込んでいる。

玲？さんが何があった？と言う風に首をかしげて、父上は何となく
わかったのか苦笑している。

それにしても玲？さんなんでまた馬超を抱えているの、あの錦馬超
がまだ赤ん坊ですよ、

産まれてまだ一年たっていないよね、なんで乳飲み子を連れてきて
いるの？この人は。

うちや司の親みたいに親馬鹿ならぬ馬鹿親で子供自慢なのだろうか？

自慢したくなるのも分かるかも赤ちゃんだが玲？さんの子供らしく
凄く可愛い顔してる。

ただ玲？さんの遺伝子をしっかり継いだ為か赤ちゃんとは思えない
立派な眉毛が。

玲？さんが馬鹿親として子供自慢で来たのなら良かったんだっ
たかなあ……………。

琅？

？がまた軍団で州境の村を襲ってきたけど派手にやり返してあげたから、

当分の間は襲撃は起きないですと報告しに隴西のお城までやってきたの。

本当は普段天水にいて会う事がないから報告という形で久しぶりにとお姉様に会いに来たの。

とお姉様も私が隴西まで報告しに来ただけとは思っていないみたいだけど、

普段冷静沈着なお姉様や空お兄様が私の考えている事分かっているかなあ・・・ニシシ。

？の件の報告は名目だからと分かってくれているから城の東屋で会ったんだけど、

私が翠を連れて来ているから気を使ってくれて玉座の間ではなく、気楽に出来る東屋にしてくれて、お姉様優しいんだから。

東屋に着く既にとお姉様に旦那さんの空お兄様、それにお姉様の自慢の保ちゃんがいたの。

今日は保ちゃんに要があつて来たきたから、会っていきなりだけど、お姉様とは親友だから保ちゃん真名を交換しようと言ったら驚いていて可愛い。

あつ、それでなんだけど、とお姉様つたら酷いの

「私と琅？は親友ですが、いくら私の子供であるとはいえ、初対面の保にいきなり真名を預けようとするなんて真名の重要性を理解していないの。」

むー、とお姉様は頭が固いの、それだけならまだしも。

「まだ孟起ちゃんが産まれて間も無いのに天水から連れて来るなんて何考えているの。」

用件を話していないから仕方ないけど、翠連れてきたのは意味があるからなのに。

「あつ、説明する前にお姉様とお姉様の家族ならば、孟起でなくて真名の翠って呼んであげて。」

ゴチーーン

痛~~~~いお姉様が本気の拳骨をしてくるなんて、あまりの痛さに涙がちよつと出ちゃった。

「琅？いい加減にしなさい、いくら貴女の娘とはいえ勝手に真名を預けるなんて。」

とお姉様が凄く怒っている、こういう時は謝らないと大変な事に。

「お姉様ごめんなさーい」

お姉様が仕方無いという感じのため息ついて真名の件でのお説教は

終わって助かった。

それにしても隴西にきた目的である保ちゃんを見てみるけど面白そうな子供なの。

初対面だからとはいえ、人見知りなのかこつちを値踏みするかのように観察していたり、何か私を見ながらすごく失礼な事を考えているみたいだったりしているようだ。

でも、私が保ちゃんをじつと見つめてみると急に照れて目線そらして可愛かったり、6歳なはずなのに行動に子供っぽさが無くてやけに大人染みていたり変な子供なの。

保ちゃんは3歳までに読み書きとか学び終えていて、今は孫子とかを勉強しているなんて、孫子なんてお姉様に読みなさいと言われても面白くないから嫌になっちゃう本なのに、凄いの。

「ゴホン」

私が考え事しているから和お姉様がわざと咳払いして注意してくる。

「今日はわざわざ天水から隴西まで？の件で報告しに来たのですか、既に無事鎮圧も終わり報告の書簡も届いているのにわざわざですか

？」

とお姉様が直球で聞いてきた、私としてはもっと溜めて溜めて溜まりきったところで、

ドカーーーーンと爆発するように驚かせたかったのに。

仕方がないから今日ここまでやってきた理由を告げる。

春の日差しを浴びながらと心地よい気温の東屋が一瞬で北風吹きすさぶ真冬になっちゃうなんて。

お姉様が保ちゃんを大事にしているのは聞いているが、まさかこんなだなんて。

110

- 空 -

数日前仕事をしていると、天水からわざわざ琅？が？の件で報告しにくる、

という報告の書簡が届いた時から猛烈に嫌な予感がしていたのだが。

見た目だと年齢は全く違うが、実際は和と同じ年であり、三カ月しか誕生日が変わらないのに、

琅？は「とお姉様」と呼ぶのが、和がお姉様と呼ばれる度に不機嫌

になるのが、
和もまだまだ若いのに歳を気にするなんて。

まあ和に言わないが、言ったら怒られるのは嫌なので、君子危うきに近寄らず。

琅？が来るといつも何かしらの騒動が起きているから、当日は朝から胃が痛くなる。

産まれたばかりの孟起ちゃんを連れて報告しにやってくるというから、

確実に？の件で来たのではないのが分かるので堅苦しい玉座の間ではなく東屋でお茶しながらと。

琅？が涼州の軍事の責任者の一人であり、責任者とはいえ琅？は知らないのです、

軍師である私の補佐職にあたる保を立ち会わせたが、なんでそんな判断をしたのかと。

結果論にしか過ぎないんだがあの時の判断をした私の馬鹿さ加減に嫌になる。

まさかあんな問題発言があるとは……。

「和お姉様、保ちゃんと翠を将来結婚させたいの。」

ピシッと音がして東屋周辺が凍りついてしまったのは。

第八話、天水からの刺客（後書き）

馬膳さんのキャラや口調をどうすればいいか分からなかった、喋りや性格は蒲公英、戦いに関しては翠というイメージが。

分かりやすいベタな展開の話ですいませんでした。

皆さまのご意見ご感想お待ちしております。

第九話、保君頑張って考えてみる（前書き）

ギャグにもシリアスにもなりきれない中途半端な文章になってしまった。

相変わらずな駄文ですが、もしよろしければ読んでみてください。

第九話、保君頑張って考えてみる

保

皆さんは子供の頃夏休みとかで楽しい思い出はありましたか？

私は夏休みとか長期休みになるのがいつも憂鬱でしたよ。

大抵、休みになった初日の夕食の際の母親にいきなり言われるんです。

「馬乗りに行く旅行に申し込んであるから、“明日”から“三週間”行きなさい！」

事前にそんな旅行の話無し、いきなりですよ、こちらの予定関係なしですよ。

家族全員と旅行ならいいじゃない？いいえ、私一人だけで行かされるんです、

そつえば家族旅行の記憶ないですよ我が家、いつもみんなバラバラで。

ホテルや旅館に泊まって乗馬でしょ優雅なものでしょ？

自分達が世話する馬のいる厩舎の二階に毛布でくるまって寝る生活です。

当日朝集合地点に着くと日本中から私と同じく死んだ目をした子供達がいて。

着いた先は、テレビもねえラジオもねえ車もそれほど走ってねえあの歌が笑えない、ほぼそんな場所なんだ、そんな牧場で生活スタート

朝5時前に起きて馬の世話して、一日中馬に乗って、飯喰って、寝るの繰り返し。

辛いのは厩舎掃除、尿と糞の臭いがね、まあ人間みたいにトイレ行けないからしかたないが。

あと馬の世話している時によく蹄で足を踏まれたがあれも痛くて辛いんだ。

人間より重たい体重で踏まれるから挟まれた足を引きぬく事が出来ない、馬の足をどかさうとしてもどかしてくれない、足を持ち上げようとしても子供の力では無理。

馬は臆病だから大声出してはいけないと注意されているから、怒鳴らないように必死で我慢しながら馬の首筋撫でたり機嫌とって足をどかさようにしたりするのが。

馬にずっと乗っているから尻と太ももの皮がべろんべろんに剥けて痛いし。

落馬なんか最悪でしたよ、砂まみれになるは落馬の痛みで動けないは、

だからロデオとか見る度に馬鹿じゃないか、と思ったりしますよ。

あと痛いでないが精神的に疲れたのが、全国から集まった子供達の歳が違うから、
歳上で威張ろうとするのがいると嫌な序列が出来ていて、気疲れ。

実に苦い思い出だね、長期休みに地元の友達と遊んだ記憶が全くないし。

そういえば他にも山でテント生活一週間なんてのもやらされたりしましたよ、

今日は川で魚を捕まえられないと食料無しになるとか、

ライター、マッチ何それ？どうにかして火をつけないと生の川魚だよ、とか。

冬だとスキー、苗場とかあんなおしゃれなゲレンデではなくて、荷物背負って山岳スキー、冬の雪山を攻める一員なの子供なのに。

ただこれらのおかげで大抵の事が辛いと思えなくなりましたよ。

乗馬やらサバイバルとかさんざんやらされたせいで三国志の世界に
来てもあまり苦勞しないのが。

三国志の時代なんて不便だろうと思っただら意外と平気と。

そう考えると偶然なんでしょうが、私の幼少期って英才教育？、
三国志の時代に送り込まれてもやっていけるようにするための。

どうも作者・・・もとい、主人公の設定である子供時代の記憶に現
実逃避していた保です。

なんでこんな現実逃避かって言わせないでくださいよ。

馬膳様が娘の马超ちゃんを連れて城に来たと思ったら、
母上に“私を马超の将来の婿に”と言い出して場が凍りついたから
ですよ。

马超ちゃんはまだ1歳にもなっていないのに早すぎ、まして私は体
は6歳ですが、
転生してますから心は39歳ですよ。

もし马超ちゃんと結婚することになったとして式あげる頃には私の
心は還暦間近ですよ、

子供が成人した頃には下手すれば、ではなく確実に心はジジイですよ。

いきなりなんでまたこんな話になったんだ。

空

誰か助けてください！！

保を取られるという妻の怒りの殺気が凄すぎて気絶しそうです、
今にも琅？に切りつけかねなさそうなのが。

妻の暴走も怖いが、理由もなくこんな話がくるわけではない、何故なのか考える私。

今回の話が来たのは何故だ？

やはり羌側からなのか？

漢王朝が異民族対策をしると漠然とした指示してきたのを利用し、
殺しあうのではなく異民族も取り込み融和しようとしてきたが。

こちらには羌族との混血である琅？がいるので交渉役になってもら
い、

食料や家畜飼料の支援することで羌族とは良好な関係が築けている。

ただ、今は良好な関係を築けているとはいえ羌族も次の世代になっても融和政策が続くのか？

それに対する手段で羌の人間でもあり漢の人間でもある琅？の子供である孟起ちゃんと、融和政策の指導者である董君雅の息子である保を結婚させようとした？

羌族と保で婚姻だと漢王朝は反意有りか？と難癖をつける可能性があるから。

実際、王朝の目の届きにくい遠方である涼州で異民族対策でと募兵し続ける、

それを好ましく思わない人間が洛陽に多いのが。

しかも、兵を集めながら異民族打倒ではなく融和なんてやっている、それで羌とうちの家族が縁組みとなると漢に対し反意有りなんて騒がれかねないのが。

ならば、これが羌にとっての次善の策として提案されたのか？

琅？の策だろうか？天水郡も琅？みたいな漢王朝寄りもいれば韓遂のような反漢王朝もいる、

表立ってはまとまっているが一皮むけば一枚岩でないという状態にある。

太守一族と縁組みすることで威光を利用して天水をまとめるつもりなのか？

うむ、提案された理由が分からない、では、この話を受けたらこちらの利益は何か考えよう。

羌族との安定した関係の維持、涼州に齒向かう匈奴・？対策に集中出来るというのが。

精強で名高い馬騰率いる軍団を再編して取り込めるというのも大きい。

お互いに利益は大きい計画としては荒い計画だ。

琅？は羌族との混血で羌の協力者だがやはり漢の人間である、どちらか一方にたてるのか？

和や私がいなくなった後に保が涼州を継ぐ保証はない点、保が方針転換する可能性。

だが、一番の甘さは、和の保好きを甘く見すぎたなど。

和の保好き度は、いざとなったら一人で五胡全軍を相手するとか言いかねないくらいなのに。

和を見てみる相変わらず怒りで殺気が凄いが私のように何故この話がと考えているようだ。

そんな状況で肝心要の保を見ると、子供らしくないため息をついていた。

保

母上は今にも怒鳴りだしそうだが必死でこらえている、父上も母上もどちらもなんでこの話が出たか悩んでいるのかな？

うーん、こついう時は一旦検討するといって翌日以降持ち越しにして、

お互いの考えや今後の対策をじっくり話すべきだが、母上がその前に限界迎えそう。

私の正体を隠したいから出しゃばりたくないが早く終わらすために仕方ないやりますか。

「はあっ」

ため息をついてしまった、ため息をつくとき幸せが逃げるとよく言うが。

私のため息に両親が反応する、アイコンタクトでここは任せてと伝える。

伝わったか不安だったが、両親共に頷いてOKしてくれた。

「本命の案は羌への支援拡大ですか？」

馬騰さんが明らかに驚いた顔をしている、やはりそっちが本命か。

囿の提案である婚姻が成立すれば万々歳、だがあくまでも最初に無理難題を出して、

断られていいようにして本命の対案として支援拡大案を出して了承させると。

まあ、よくある手段ですね、単純だが効果がある、囿を使う事で、答えは何個もあるはずなのにこれしかないと思えてしまっただよなあ。

うーん、私をだしにされたのは面白くないので少し苛めてみましょう。

今までたんなる子供だと思っていた子が腹の底読んでいたなんて不気味でしょうねえ。

親達も驚いている、まあ、私の正体を隠す為黙っていると思ったら私が話し始めるんですから。

ここでまたわざと可愛らしい言い方してみますか。

「お腹がすいた羌に涼州がご飯を上げたら他の子供達は羨ましがらないのかな？」

こっちに支援拡大要請するのはいいが、五胡は一つにまとまった民族ではなく、

あくまでも漢王朝に認められなかった異民族の団体ですが、羌がこちらに近づきすぎたらどうなるか。

馬騰さんは羌出身だが今は馬騰さん個人があくまでも涼州の軍人として戦っているだけ、

だが羌がこちらに近づいてきたら他はどう思うか、涼州の前にまずは裏切り者から血祭りになんて事も。

「お腹すいたら涼州のご飯食べて遊んだら仲良し、でも今までのお友達と仲良くできるの？」

あと他の民族がどう思うかではなく、羌の部族の人間が涼州と組んで他の部族と戦えるのか？

馬騰さんの表情がどんどん変わって言っている明らかに動揺している。

うちからの支援が拡大するとなるとどれだけのリスクが増えるか計算しているだろうが、

これくらいで動揺するなんて、見積もりが甘くないかなと、こちらにはまだまだ手段がある。

いざとなった時の涼州の提案は今の政策と相反するが強烈なものも。

羌が？を売る事で漢王朝に服従したとか情報を流したり、優遇すること、

こちらではなく彼ら自身潰し合わせ弱ったところを一呑みするとか。

「白い猫でも黒い猫でも鼠を捕る猫は良い猫ですよね。」

涼州に従ってくれるならば何処の部族だって、邪魔なら切ればいいだけ

無邪気な感じで言ってみる不気味に感じるだろう。

単なる子供がこんな事言う、ただその子は太守の息子、まさか太守達も同じ意見なのか？

子供が考えているのではなく太守達の本音だと普通なら思うな。

会った直後の軽い感じではなくなっている馬騰さんのまもっている空気が。

私が一方的に殴り続けているだけですが、そろそろ助け船を出しますか。

「馬騰様言葉が過ぎましたことをお詫び申し上げます。」

急に私が謝るから、どうすればいいんだと一瞬ポカンとしている。

「謀に対しては謀をと、つい、からかってしまいました、お詫び申し上げます。」

こちらの本意ではない事を伝える、まあ、こうなるとそう簡単に信用できないだろうが。

「羌への支援拡大検討させていただきます。」

一旦言葉を区切り馬騰さんの顔を見してみる、どういう腹積もりかと判断しているのか。

「馬騰殿はまだしも羌の方の中には仲間と戦うのは辛い方も多いでしょう、ですので、

対価は？など他の部族への不可侵および貿易の交渉説得、および牽制の協力をお願いしたいのですが。」

正直協力など無くても？などは食いつくでしょう。

今回も追い返され涼州には敵わないというのが分かっている所に、涼州だけでなく羌が説得に来れば、まして隷属ではなく不可侵と貿易という形ですから。

まあ協力してくれている羌の顔がたつようにしないと。

とはいえこちらは交渉の場に軍を連れていく砲艦外交をやるつもりではあるんですが、

争って全滅よりは手を取って飯を食う、の方が選び安いでしょうし。

馬膳さんが急に私の前に立ったかと思うと跪いて

「董擢殿への数々の無礼深くお詫びします、我が姓は馬、名は膳、字は寿成、

私の真名琅？を董擢殿にお預けします」

ふう、どうやら今回の騒動の解決の目処がついたようです、今後の異民族対策の方針もつきましたし。

問題は涼州の最高責任者である両親の目の前で、私が相談することなく、

勝手に異民族対策という大問題で話を進めているのが。

こんな独断専行したらどうなるかな、うん下手すりゃ、下手しなくても処刑されかねないね。

さてどうなるのかなあとと思ったら、別の問題が起きた。

「異民族問題は目処付いたから良いけど、結婚しないの？董家も馬家も安泰するよ。」

「何故今日はいないはずのお前さんがいて、話に混ざろうとしているんだ司くーん」

「休日だった母親と買い物していたが面白そうな事ありそうだから

きたの、
そしたらこんな楽しい事が、ちなみに最初から見ていたから、そこ
の茂みから二人で。」

李肅さんまでいたよ、オイオイ大丈夫なのかこの城とっていると
怒声が。

「やはり我慢出来ない、どんな理由であろうと保ちゃんに近づくと
い虫は取り除かないと、
保ちゃんのお嫁さんは私なんだああああああ。」

うん、聞こえてはいけないような発言が聞こえたような……。

とりあえず、遂に母上が斬馬刀を引きぬき琅？さんに襲い掛かった、
あっ、止めに入った父上が一撃の元に吹き飛ばされた。

どうするんだよこれ、とりあえずは原因である司をぶっ飛ばすか。

「司君すこしO・H A・N A・S H Iしないとね。」

いろいろあったが、今日も涼州は良くも悪くも平和です。

第九話、保君頑張って考えてみる（後書き）

うん、本当にシリアスもギャグも中途半端な話になってしまった、
うん、馬騰の理由も覚悟も無しだな、ご都合主義にも程がある反省
と。

ちなみに幼少期の思い出は誇張無しです、普通とは無縁だったなあ・
・・・しみじみ。

みなさん今回の話もお付き合いいただきありがとうございます、
皆さんのご意見感想お待ちしております。

第十話、なんでこんな場所にこんな建物が。(前書き)

うーん、今回もギャグが少なめ、シリアスな文章を書けず、ギャグも半端なんですけど読んで楽しんでいたただけなら作者冥利につきます。

第十話、なんでこんな場所にこんな建物が。

ザツザツザツ、砂地を速いテンポで元気良く駆け抜けていく二人の足音が響く

「まだまだ先は長いから飛ばしすぎないでね、吸って吸って吐いて吐いてだよ。」

ドタドタドタ、先程走り抜けた二人とは対照的な重たい足音が。

「おらっ、とつとと走れ走れノロマ共が！いつも馬に乗れると思っ
たか！」

「「「「「はいつ！！！！」「「「「「」

更に走り続ける

ザツザツザツ

「二人共若いんだからもつと足を上げて元気良くいくよ」

「「はいつ」「

ドタドタドタ

「遅いんだよ、早く走れ騎馬隊にケツを槍で刺されたいか！」

「「「「「ヒーーーー」「」」」」」

ザッザッザッ

「二人はあと五周だから、ここから更に飛ばしていいですよ。」

「「はい!!」「」

ドタドタドタ

「二人に抜かされた奴は罰でもう五周と昼飯抜きだからな!」

「「「「「ウギャー」「」」」」」

城壁の周りを元気良く競争するちびっこ二人、それに対し、
バテバテになりながら走る大人達、その後ろで追いたてる少女?

・司・

「第三者視点で見ると凄い絵面だな。」

「どうした司?急に独り言なんて」

独り言が聞こえたらしく競争していた保さんが速度を緩め話しかけてくる。

「たいしたことじゃないんですが、訓練風景を端から見たら異常だなど。」

「たしかにガキが元気に大人が悲鳴、見た目少女が怒声って。」

こゝろにちは僕司君です！！

ドラ もんっぽく名乗ってみました。

勿論ドラ もんはのぶ代ですよ、わさびは認めません、ちなみにサ エさんは日曜日だけでなく火曜日にもやっていましたよ。

火曜の方はお隣が浜さんでしたが、たしか浜さん家は画家でしたっけ？

周りを見ると日曜日のサ エさんしか知らない人ばかりって僕も年老いたなど、

知らない人に説明するならば火曜日が外史、日曜日が正史？

多分正史は新聞連載なんでしょうが。

サ エさんトークは置いておいて状況説明をしましょうか。

只今琅？さんの部隊に混ぜてもらっての訓練中でございます。

もうすぐ8歳になります。が少しずつですが人外に近づいてきております、

兵隊さん達軽装にたいして子供が重装備で更に重り背負って圧勝ですから。

まあ圧勝も当然なんです。が転生引き継ぎしてますから生まれた直後から大人の体力、

それに鍛えた分強くなれる成長限界突破これだけでも反則。

あと異常な健康ですよ、これがチート具合を加速させていますよ。

普通ならば運動 筋肉痛 一、三日間休憩して超回復 筋肉太く

こうなるはずなのですが

激しい運動 筋肉痛になる前に回復 筋肉ついている。

成長限界突破ですから、このままいくとオーガどころか、

80歳とか普通ならジイサンだがフリーザ様並みになりそうです。

『久しぶりです神様です、フリーザは無理、ただし江田島は余裕』

おい、いきなり念波で語りかけないでくれ。

『たまには出番をと思つてな、そんな話は置いておいて、転生前に話をしていた武器をいい加減に取りに來い。』

どうやら私達二人の鍛練の成果が出てきたようで、神が用意する武器を取り扱えるようになったようです。

『あつ、神具はさすがに今程度ではほとんど無理だから。』

むう、ままならないものです、ならば何故呼んだと。

出番が欲しいなんていったらファリスの牡牛でこんがり焼いてやる。

『それは怖いぞ、私は死なない分永遠と焼かれるのは。』

やはり出番欲しさか、いつか殺つてやる。

とりあえず武器を手に入れるにはどうすればいいか尋ねると、城下町の武器屋、鍛冶屋が並ぶエリアに來れば分かると。

保さんに神と会話したことを伝え、午前の訓練が終わつたら街に行こうと。

この後の訓練で組手となり保さんと二人一組で琅？さんに挑んだが、ボコボコにされ過ぎでしたよ、あまりにやられ過ぎて途中の記憶が

ない。

琅？さんは得意の槍を使わず無手で、私と保さんが馬上で使うのに便利だと習っている槍で。

普通は刃を潰した槍なんだが真剣ですよ、危ないと思ったが。

そんな心配まったく要らなかったですよ、かすりのかの字も無かったです。

私達の実力としては、琅？さんに毎日鍛えられている兵隊に余裕で勝てるんですよ、

小隊長クラスでも余裕で勝てますよ、いやまあ、調子にのっていたわけではないが。

でも、これだけボコボコにされるとは。

多段突きを全て紙一重で避けられ槍の柄を掴まれたと思ったたら投げられた保さん。

私は今がチャンスだと保さんを投げた瞬間を狙い背中から切り上げるが、

振り向きざまに裏拳で槍頭をぶつ叩かれはじかれ「残念」と言われ懐に飛び込まれ鳩尾に一撃。

避けられ、捌かれ、白刃取りされ、小突かれ、蹴られ、投げられ

本当にここまでやられているのにこれでオーガ以上になれるんでしょうかねえ。

ハツと気付いたころには全身スタボロですよ、普通なら余裕で全治一ヶ月とかでしょうが、このふざけた回復力のおかげでなんとかなるのが、明日には完全回復しているでしょうし。

それにしても七歳児がここまでボロボロになりながらも向かい続けている姿に、

琅？さんに率いられていた百戦錬磨の兵達がビビってしまうとは。

うーむ、体力だけは凄くても技術がまだまだですよ、回復はするが痛い物は痛い、

手っ取り早く強くなれませんかねえ、とか無理な事を考えてしまう。

とりあえず午前の訓練が終わり、昼食を済ませて午後から街に出て武器をもらいにいきましょう。

- 空 -

保と司君が琅？の訓練を終えて戻ってきた、まだ小さい体なのに強くなりたいと頑張る、

親馬鹿な意見だろうが二人とも恰好いいじゃないかと思ったが、姿

を見てさすがに引いた。

食堂でご飯を食べるのは良い、せめて顔を洗い治療して着替えてから来てほしい。

顔は青あざだらけ、鼻血を流したのにふき取っていないから血が乾いてこびりついているは、服は破れ、ご飯を持ってきた侍女達があまりの姿に卒倒しているのは。

保も司君も私なんかより頭がいいのだが、常識がいささか不足しているというか。

どうしてこうなったのだろうか。

あと、今の保を和が見たらどうなるだろうか、不安で仕方がない。

噂をすれば影がさす

「保ちゃん、司君せめて顔洗って、着替えるくらいしなさい。」

「「「「「えっ!?!」「」「」」」」

食堂内にいる皆が驚いている、訓練だとはいえこんな姿になっているのじ。

絶対に何処から取り出した斬馬刀を片手に握りしめて、

「琅？いますぐ出て来い、保ちゃんの敵は叩つ斬る」位言っはすなのに。

「あなた……」

まさか私が斬られるとは……。

- 保 -

昼ご飯食べたのですが何を食べてもレアステーキを食べているのか血の味しかしないです。

あと父上が母上の斬馬刀でまさに叩き斬られていました、あれはいくらなんでも。

アンデルセン神父並みの回復力の私でもあれは無理かも、なんで父上は無事なのだろうか。

とりあえず父上への疑問は置いておこう、司連れて武器をもらいに行きましょう。

武器屋鍛冶屋が集まっている所にいけば分かると聞いたがどんな店なんでしょうか。

区画整理を行い業種毎に固めた為、この一角に来ると鉄を打つ槌の

音が至る所で聞こえる。

そんな一角に明らかに不釣り合いな建物が、

明らかに違うねえ、武器屋だよねえ、なんでコンビニっばいの？

自動ドアだよ、何これ？

テンテンテンテテテテテレレレレってあの曲が流れたらファミマだよ。

でも、武器屋だね什器に並ぶ物が一番くじでなくて青龍刀とか飾つてあるよ。

秋葉原にはエロのコンビニがあったが、涼州には武器のコンビニがあるとは世界は広い。

そんなくだらない事を考えていると見た事ある人間がやってくる。

『おっ、来たか』

おいつ、神、自称でなくて神なんだろ、なんでお前がいる。

『久しぶりに会いたいと思ってな』

「出番欲しいとか言ったら八つ裂きにするからな。」

明らかに司が不機嫌だ、もうすこし友好的にいかないと。

「お前なんかの出番があるのに、なぜ母さんの出番が無いんだ。」

うん、不機嫌になるね、このマザコンは。

拠点話で司親子の休日とかやりたいとか言っているが何が面白いんだとかいうくらい平凡だったし。

あまり変な話をしていると話が進まなくなるので武器を見せてくれと。

じゃあ、奥の部屋に来てくれと、どう見ても冷蔵庫裏に向かう扉だよな、ついたら真っ白な部屋だ。

俺と司が転生前に呼ばれた部屋だ、何処までもどこまでも真っ白な床と天井しか見えない部屋。

『この携帯に望む物を言えば武器が出てくるぞ』

まさかあれかなと思ひ、神から渡された携帯らしき物体に「武器を」と伝える。

やはり見た事ある奴だった、マトリックスで武器出て来るところだ。

端からものすごい勢いで武器満載の棚の列がやってくる、ギャグな作品だから、

その棚に吹っ飛ばされるくらいありえるのだが無事だった。

とりあえず感想としては武器の準備やり過ぎだ。

こっちは未来知識を総動員してこの時代に無い武器を作つてやろうと黒色火薬を作つて、火縄銃を作れないか研究してるのに普通にXM109パイロードやM134とかあるよ。

歴史がひっくり返るよ、まあ既に自分達が思いっきりひっくり返しているか。

でもM134には夢があるね、バッテリーと弾丸背負つてこれで戦う、プレデターでもターミネーター2でも使われたし、格好良かったのが。

フル装備で100kg超えて反動もあるから現実では無理なんだが、子供ですらあり得ない体力というこの世界なら使えてしまうのが。

憧れを取るか？チートをある程度抑えるか？

やはりこの時代で使えそうな武器を捜すか。

そうおもつて三国志的な武器を捜していると見つけた三国志の世界ならばやはりこれか、

実際にはまだこの時代には無いはずだが、まあ演義で存在する方天画戟を手取る。

あとはこれは私の趣味だが流鏑馬やったりするので重藤弓を。

武器はこの二点でいいやと思い、暇だから部屋中の武器を見てみる、黒漆五枚胴具足、メルカバ、グルカナイフ、潜水艦やらなんだってあるよ。

ピアノ線まであるよ、本来はキャタピラ潰すくらいしか使えなさそうだが、一応もらっておこ、ピアノ線使っていざとなったらピアノでも作るか。

『ここは武器ならば何だってあるからこそ、そのコンセプトからコンベニにしたんだ。』

“絶対に嘘だ！！”後付けの理由に違いない、目立つ為とかそんな程度の理由に違いない。

神に対し内心突っ込んでいると「これがあっただった！」

司の声が広大な空間に響く、少し離れた所にいた司が何かを手に持ち呟いている、

「三国志の世界ならばやはりこれか」なんか方天画戟見つけた私と同じような事言っている。

司が手に取っている本をこちらに見せてくるまさかあの“太平要術の書”とは。

「三国志でも演義でだがこれと張角の身柄をこちらが事前に抑えていたら黄巾党の乱起きるかな？」

黒い笑みを浮かべながらの発言である、だが、正直実に面白そうなたくらみではある、
こっちが黄巾党を立ち上げないようにしたら発生するのか気にはなる。

三国志のIFの世界であるならば楽しまないともつたいないなと二人で意見が一致する。

こんな風にして武器を手に入れるのだった神の『ロンギヌスや草薙の剣はいいのか？』
あまりに物騒な単語が聞こえてきたので聞こえないふりをしてコンビニを後にするのだった。

司は鉄扇と太平要術の書と二点だけ、意外と二人とも欲が少ないんだなと改めて思った、
とはいえ、伝説の物体である太平要術の書とか手に入れている段階で欲深いか。

自分達の事なんだが、はてさてこの三国志の世界をどういじれるの

かな、楽しみではある。

第十話、なんでこんな場所にこんな建物が。(後書き)

とりあえず太平要術の書を出してみました、いくらご都合主義だとはいえ

ちよつとこれはという感じになりましたが。

この話を読んで笑っていただけならば幸いです、ご意見ご感想お待ちしております。

第十一話、絶対に負けられない戦いがある(前書き)

とりあえず恋姫キャラを更にどんどん出していこうという事で更に話を進めてみました。

相変わらず壊れたメンバーばかりで収拾つくのかと作者ながら悩むばかりであります。

第十一話、絶対に負けられない戦いがある

- 司 -

こんな保さんを見たくなかった、なんでこんなことになったんだよ。
。。。

保さんの色々な姿を見ていると面白いですよ。

前にも話しましたが、アーアーな人たちが集まるサウナに騙して連れて行き、

“自分の貞操の危機が！？”と怯える姿を見てついニヤニヤしてしまった事も。

普段ふざけているが急に真剣になって事業について話す姿も良いですよ、

皆でこっそり準備して誕生日祝いやった時の照れ臭そうにする保さんも良いですし。

保さんのいろんな姿を見る事が好きなんですよ、私のライフワークの一環として、

楽しいですよ、この人はいろんな面を持っていて観察していて感心してしまう。

でも、こんな姿の保さんは見たくなかったよ。

「妹がこんなに可愛いなんて、生きていてよかったー！ー！！」

どうも、李儒文優こと腹黒軍師な司です。

保さんの叫びから分かりますように保さんに妹が出来ました。

三国志史上最大の悪役、あの董卓仲穎が遂に誕生しましたよ。

悪役とは言いますが、それは敗者だからこそ悪役になっただけで、歴史の勝利者だったならば悪くは言われなかったでしょう。

実際羌族とは良好な関係を築いたり、部下に恩賞を配ったり、かなりの親分肌だったみたいですし、死んだあと惜しまれたりとかもありますし。

劉備の方が遥かに胡散臭いですよ、あんな乗っ取り屋が仁君って。

まあ、劉備だろうが曹操だろうがどんな三国志の英雄でも、我々涼州の邪魔をするならば早々にご退場していただきましょう。

大陸全土に広がっているうちの会社によってね・・・ニヤリ。

おっ、といけません、つい楽しい想像して現実逃避してしまいました。

今は保さんを現実に引き戻しましょう。

「保さん、保さん仲穎ちゃんが可愛いのは私もよく知っていますが、仲穎ちゃんを愛するのはとりあえず仕事終えてからにしましょうよ。」

「

ギロツ

怖っ、保さんだけでなく空さんまで睨んできましたよ。

睨まれただけで人が死にかねませんよあの視線は。

メドゥーサじゃないんだから、あれは石ですけども。

ちなみに太平要術の書を手に入れたあの日から2年がたち、私達も9歳になりましたよ、キンクリしたのは許してください。

仲頼ちゃんが産まれて半年以上たっていて毎日会っているのに、いまだに毎日これなのだから兄馬鹿にも程がありますよ。

やるべき事は幾らでもあるんですよ太平要術の書を手に入れた事で。

便利な物です、便利で済ませてはいけませんね反則です、子供達がやる草サツカーにバルセロナを送り込むくらい卑怯です。

此方が望む知識がどんな物でも幾らでも手にはいるのですから。

保さんとの意見で歴史だけは見ないようにしました、さすがにそこまで分かってしまうのは興醒めですから。

とりあえず我が国の為、色々な物の作り更に名産品が増えましたよ。食料ならば砂糖、養蜂、麦芽糖、ビール、日本酒、ワイン、焼酎、医療ならばペニシリン、阿片といった薬品も出来ました、安価な紙や鉛筆の製造、活版印刷とか金になりそうな物は片っ端から。

それらは三国志の中で商売人として有名な張世平蘇双と協力関係をもち、商品の委託販売、または製造販売させパテント収入を得たりしています。

商売人は我々と組み利益を出す限りは裏切らないですから。

あと信用出来る部下を徐々にですが各地に散らばらせ、涼州のアンテナショップ兼地域の情報を得るスパイの拠点としたり。やることは幾らでもあるんです、1日が48時間になっても足りません。

この大陸の外れであり疎まれてきた辺境の涼州が、食料、衣料、医療、軍事、文化といった至る物で、大陸をけん引しようとしているのに大丈夫なのでしょうか？

漢王朝に疎まれ厄介者扱いにされてきた涼州の怖さを漢に見せつけてやるんだ！

ロックフェラーや三菱のようになるんだ、奴らを手の平の上で踊らせてやるんだ！

馬鹿共はそれに気づかないでいる、その間抜けな姿を見て笑い飛ばしてやるんだ！

と言っていた、あの時の保さん帰ってきてくれえー！！！！！！！

- 保 -

司がまた怒っているようだ、むう、残念で仕方ない。

仕事に熱心なのは良い事だ、いや私も仕事はきちんとやっていますよ。

何故司は私の内からあふれる月への愛を理解してくれない！？

司は前世で妹がいたから、妹に夢を見ていないんだろうが、私は前世で妹がいませんでしたが、妹に夢見るなんて無かったです

が。
“おれのいもうとがこんなに可愛いわけがない”なんて作品がありました、
あれをみて司の言った言葉がよかったなあ。

「あんな妹がいたら、とりあえずアックスボンバー食らわしているね。」

それを聞いて大笑いした後、私は

「私ならば木村健悟ばりに稲妻レッグラリアートを食らわせるが。」

そんな私の発言を聞いて大笑いする司だったな。

やはり似た者である司と私は、でも、月への愛を叫ぶと司がため息をつくのが何故だろうか。

寝台ですやすや寝ている月の寝姿だけで丼飯5杯はいけるくらい可愛いのに。

お母様に似た紫色のウェイブのかかった髪、まあるく光輝く特徴的なおでこ、赤ちゃんだからというだけではなく小さな体を見ると私が命かけて守ってやらないと覚悟を決める。

私が三国志の世界に転生したのは月の兄になる為に違いない。

そうだそうに違いない!!

ああ、この嬉しさを、この喜びが、情熱が、体内からあふれて来る。

「妹の月が可愛過ぎて生きているのが辛い、なんでこんなに可愛いんだ————!!!」

つい部屋の窓を開けて外に叫んでしまった。

ふと視線を感じたので振り返ったら、父上がサムズアップしていた。

“今日、私は父上と本当に親子になれたんだと思いました、ありがとうございます。父上。”

だがこの後、母上に「月が寝ているんだから静かにしなさい」と父上共々ぶっ飛ばされるとは。

でも、月への愛があるからそれくらい余裕で耐えられるんですが。

とはいえ、これ以上怒られないように仕事を早く終わらせますか。

とりあえず父上に相談して月誕生記念で祝日を作るかなと。

空

娘が産まれたがこれが実に可愛くて可愛くてしょうがない、和が言うには目元は僕そっくりだと、全体的に和そっくりだが。

お互いの良い所を全て取った可愛い自慢の娘になってくれるであらう。

息子の保だつて自慢出来る息子だ、ただ、可愛らしいではなく、
聡明さ、あと最近は成長してきて逞しさが出てきた。

逞しく賢い兄に可愛らしい娘、董家自慢の兄弟である。

今や私は、知性では保や司には及ばず、武では和や琅？には届かず、
そういう点では父親としては大変情けないかぎりだが。

あの子達が笑顔でいられるように私は露払い役として頑張ろう、
子供達の笑顔を守る為ならば私は鬼にも悪魔にもなつてやろう。

少しは父親の格好良い姿を見せてやらないと親として情けないから。
それにそうすれば、いずれ大きくなった月が私を見て言ってくれる
だろう。

「お父さん格好良い！そんなお父さんが月は大好き！
月は将来大きくなつたらお父さんのお嫁さんになる！」

と言ってくれるに違いない。

ドゴツグチャ、鈍い音が室内に響く

い、痛い和と保に殴られた、司君が汚い物を見る目で此方を見てい
る。

「貴方思つのは自由ですが声に出ていましたよ。」

なんと……！！声に出ていたとは。

保が和に続いて注意してくるかと思つたら、意外な言葉が。

「思つのは自由だが月は僕のお嫁さんになるんだ————！！！！」

よろしい息子よ、私は今、父として男としてお前の前に立ちふさが
る壁となってやろう。

和には勝てなくても私もそれなりには武を嗜んだ、その力を見せつ
けてやろう。

絶対に負けられない戦いがある！！

保ともども和にぶっ飛ばされるなんて、怒れる和に勝てる者はいな
かったか。

だが、私がやられても、すぐに第二第三の月を愛する私が現れるで
あろう……グフツ。

第十一話、絶対に負けられない戦いがある（後書き）

常識人だったはずのお父さんまでこんな事になってしまった、本当に大丈夫なのかこの話は？

とりあえずこんな駄文ですが笑っていただけたら幸いです、皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第十二話、保のターンに司のターンで涼州統一？（前書き）

この悪ふざけ作品で珍しい真面目な展開、まあ見事なご都合主義です。

とりあえずどうしようもない駄文ですが、今回も皆さん生温かい目でよろしく願います。

第十二話、保のターンに司のターンで涼州統一？

保

天水にておかしな動きあり謀反の兆し有りか？

執務室で私と両親、司親子、琅？さん6名が揃っている時に伝令が来る、

涼州に散らばった商人、となっている細作達からの早馬がくる。

むう、遂に涼州の武闘派韓遂が動き出しましたか。

とりあえず集めておいた天水に関する資料を並べそれを見ながら6名で議論。

あくまでも謀反の兆しか？

理由を聞くと少し前から米、麦、鉄といった物の価格が上がり買主は豪族達、

兵隊の動きがやけに活発、城内が慌ただしい、最近平和だったのに連日の実戦に即した演習。

もし本当の反乱ならどれくらいの規模になるか見積もることに。

、
どうやら蠢いている連中の筆頭は宋揚だが、首謀者は韓遂で間違い

ないか。

大将の宋揚だけなら多くて三千、韓遂が周辺豪族巻き込むから一万越えるのは確実。

話が変わるが、涼州の武闘派って変な言葉だな、今はおとなしいが母上、
琅？さんとか、よくよく考えたら主力將軍が武闘派な人しかいないんだから。

話を元に戻しましょう。

韓遂ですよ、演義だと琅？さんの義兄弟、実際は涼州を30年以上支配した実力者、

反乱を起こすが常に大将ではないキングメーカーで居続ける実力者。

それにしても何故今なんでしようかねえ？

母上が行っている異民族への融和政策が甘いと判断されたからか？
羌は取り込み、匈奴、？とは羌の仲介もあり良い感じになってきているからか。

異民族とは鬭争あるべきなんていう奴等からしたら甘いと思われたか？

あとはなんだ？やはり嫉妬か、ここ数年の涼州の好景気、ただまあどうしてもなのだが、やはり拠点である隴西郡が他の地域に比べて一人勝ちの様相を呈しているのが。

隣家が金持ちで経済格差を感じた時に努力の差と言われて、“はいそうですか”と、簡単に納得はいかないだろうな、せめて異民族にやる金があるならこちらにもっとよこせか？

異民族対策の為、琅？さんが天水ではなく此方に常駐も響いたな、監視の目が届かな過ぎたか。

とりあえず反乱か？と思わせる牽制程度で、もし、このままいけそうならそのまま反乱か。

参ったねえ、反乱なんか起きたら母上は統治能力無しと洛陽の連中に解任されるか？

いや、涼州治められる人間がないし、口を挟んでくるくらいか。

仕方がないですね、指導者は舐められたらおしまいですし恐いところを見せますか。

宋揚は調べた情報を見る限り臆病な馬鹿だから、視察だなんだと軍

引き連れていけば良いとして、ただ時期が良くない、常備軍だけでは規模が小さい、徴兵はもうすぐ収穫期だから避けたい。

大規模なのは費用の問題もあるし、うーん、ケチりたいしどうすればいいか……。

董卓が洛陽でやったあれをやりますかねえ。

思い立ったが吉日、提案してみましよう。

「父上がすぐに出陣できる兵五千を率いて視察兼演習で来たと城に入る際に簡単な策を、馬鹿で臆病な宋揚ならばすぐに機嫌伺いに来ますよ、そこで脅せば終わりでしょう。」

とりあえず策の説明をする、簡単なトリックだが臆病者には効果的なのを。

「彼は臆病なくせに細作を放つなどの情報收拾をするような人間ではないから効果的でしょう。」

「答えを知ると単純だけど、戦うかも？と考えている時なら引つかかってしまつかも。」

「追い込まれたならば打って出る事も出来ない人間で、安全性も高いから良い策かなと。」

宋揚の人となり私以上に知る人達には有効と判断された模様。

ただ、こんな提案をするのだから私も責任を取って同行しないといけないな、
うっくん、策を考えるよりも母上を説得する方が骨折れそうぞ。

母上の説得は置いておいて、肝心要の韓遂をどうするかだなあ？

ふと、司ならばどんな悪辣な手が思い付くかな？と思いい司を見ている。

心がオッサンだとはいえ肉体年齢9歳とは思えない悪い顔している、これは期待出来そうぞだ。

司

保さんが此方を見ている、面白い策を教えるという事か。

「韓遂からしたら今回は隴西郡への威力偵察ではないでしょうか？
皆さんはご存じだと思いますが細作や住民の情報、実績などから判断して宋揚は無能です。」

とりあえず皆の表情など反応を見ながら話を続ける。

「韓遂が勝つ気ならば馬鹿を神輿になんかしません、威力偵察に使うのに丁度良い捨て駒と。」

保さんの策は宋揚には利くが韓遂にはすぐに見破られるでしょう。

「宋揚達を押さえても韓遂は次の機会までと一瞬だけおとなしくなるだけでしよう。」

ここで一旦話を区切り周りを見渡す、韓遂の厄介さを知る面々が頷いている。

「馬膾様、韓遂は馬を大事にされてますか？」

いきなり話をふられ、しかも脈絡のないような質問に何の話だ？と首を曲げてから答える琅？さん。

「調べてある事の再確認？涼州の人間だから馬がないと生活大変だから、

大事にしている馬がいるよー、その馬の自慢をはじめて会った人にするくらいだから。」

初対面に自慢って、資料見て性格分析もしましたがかなり良い性格で、

それほどの名馬ならば余程大事にしているんでしょうねえ……。

此方を舐めてきたのですから統治者としてはそれ相応の罰を与えましょう、

撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけ、なんてセリフがありませんねえ。

今回の方法は策というほどではないですが、単純だからこそ効果があるかと、

向こうさん此方の怖さにびびるでしょう。

「宋揚の時とは違って韓遂には下手に出るようにして会いに行くと良いかと思われませう。」

向こうの方が悪いのに何故こちらが下手に出るんだ？と考えているのが表情で分かる琅？さん。

「池陽君様と董擢様が隴西郡の新たな名物のお酒でも土産に持って挨拶すれば、

翌朝、韓遂さんも素敵な目覚めを迎え、今回はやり過ぎたと反省してくれませうよ。」

話が漠然としすぎているからほとんどの人が頭に？マークを出している、
ただ皆ろくでもない策なんだろうという事だけは気付いていたようです。

保さんは僕が何を考えているのか分かったらしく苦笑していた、あの映画みたいに。

韓遂も見た目10歳にもならない私や保さんにこけにされるとは想定していないでしょうねえ。

嫌がらせやドッキリは昔から得意なんですよ……フフフ。

およそ一ヶ月後、玉座の間にて董君雅様の前に跪き全面降伏をする韓遂や宋揚達反乱軍が。

韓遂

参った、参ったどころではないか、まさかワシが子供に手玉に取られるとは。

ここ最近、董君雅の奴に知恵を貸している新しい軍師はどれ程なのかと思ひ、いずれ反乱を起こす準備の為に起こした威力偵察だが此処まで一方的にやられるとは。

宋揚の馬鹿をおだて、反乱の準備をするふりだけで有利になると焚き付けたのはよいが、予想よりもはるかに早い展開だった、池陽君が五千の兵を連れてくるのは。

こっちが反乱の可能性ありと情報をわざと伝える事で驚かすつもりが。

読まれていたのか？と一瞬不安が、ただ当初の予定よりかなり早い

が、馬鹿には予定通りだと伝える、と簡単に信じ安心していた。

この後、馬鹿から頻繁に連絡が、連日三千近い兵が入城していると
“ここ一週間で城内に待機する兵は一万を越えている、このままでは数の優位が”と連絡が。

元から自分の兵が三千しかいなく人頼みの数の優位という段階で数の優位など無いのだから、
当たり前事が分からないお前なんかと共に死ぬ気のある人間がいるか、と苦笑いする。

ただこの報告にワシはどういう事態なのか必死で考える、いくらあの隴西郡でも、
わずか数日で万単位の兵をすぐに用意できるはずはないのにと焦る。

翌日ふと気付く、夜半に兵をひっそりと城外に出し隠し、翌朝わざと派手に入城し、
これを繰り返す事で勘違いさせた、と。

小癩な真似をしてくれる、と策に気付いた時には遅かった、馬鹿から手紙が。

“話が違つ、だから、私は反乱の意思など無いことを伝えに行く”と。

奴の無能ぶりに頭にくる、いくら捨て駒とはいえここまで無能だとは。

細作から報告があつたがこの後城に行つた宋揚達はさらに震え上がったそうだった。

「いろんなところから寝返りを伝える手紙ばかり送られて困る視察に来ただけなのに」

と池陽君に苦笑されながら言われ手紙の束を投げつけられたそう。

助言してくれるような者もないあの馬鹿には、偽手紙だとは分かつたらず、

誰が味方か？敵か？命の保証は？などいろいろ気が気でなかつたろう。

細作にわざとこれらの情報を流してくるといふ池陽君のやり方に苦笑する。

それにしても馬鹿が行動開始してから二週間で戦わずに頭を下げさせるとは。

その三日後に天水に池陽君がわずかな兵を連れ酒を土産に悠々と現れたのは驚かされた。

奴は余裕を見せているが演技で、本当に戦を起すかワシの真意を汲みに来たただけだろう、

今の奴らはワシらと全面戦争をする根性はないと判断したが、これが間違ひだった。

何故、奴は私に会いに来る際に自分の子供を連れて来たのかが分か

らなかった、
子連れはこつちを侮辱する為か？子供もいるし我々は最初から争う
気はないと伝える為か？

ワシは己の読みの逆ばかりいつておる状況に驚き、冷静さを失つて
いた。

慇懃無礼とかではないが妙に下手に出る空の態度、わざわざ土産ま
で持ってくる、

池陽君は軍師だが毒殺だとか手段を選ばないような人間ではないか
ら酒は安心して飲めるなど。

結果論だがこの酒と董擢という役者にやられたんだつたなど、見た
目は10歳くらいか？

話してみた感じは顔は両親に似たが単なる甘ったれの馬鹿餓鬼だ
なと思った。

産まれてすぐ「涼州の神童」という二つ名を持つ事を忘れていたの
が痛恨の失策だった。

池陽君は涼州の今後や異民族問題を相談してきた、今回の騒動につ
いて糾弾したいが、
そんな真似をしてワシがへそを曲げ実際拳兵したら？と怯え回りく
どく話すんだなと判断した。

筆頭軍師とはいえ所詮は単なる頭でっかち空がワシを攻めあぐねて
いる姿に内心大笑いする、

そして勝者の余裕を見せてやろうと奴の馬鹿餓鬼とも遊んでやるか

と。

董擢様も甘え上手で可愛らしく思え城内を案内し愛馬に乗せてゆったりと遊んでやる。

夜になり私が勝者だとはいえ池陽君は仮初めにも涼州の筆頭軍師で太守婿、主賓として宴席に招待する。

宴席が始まると酒に酔ったか主賓であるはずの空が親子そろって酌をしにきたりと、

ワシは日本酒の美味さ、口当たりの良さとは対照的によく利く酒だったらしく、

場にも酔ったのか、いつにも無いほど眠けにおそわれる。

夜も遅くなり、気にしないと言うので自分の部屋に戻り寝る事に。

朝、目を覚ますいつにも無く頭の動きが鈍い嫌な目覚め、なにか布団に違和感がある。

部屋中に強烈な血の匂いがする、よく見ると自分の腕や体が血まみれになっている、

違和感のあった布団をめくると、そこには血にまみれた愛馬の切断された首が転がっていた。

叫びたいが叫ぶ事など出来ない、必死で自分に落ち着けと言い聞かせる。

何故、誰が、どうやって、必死で頭を働かせるが、あまりの事態に脳が全く動かない。

そしてはじめて気づく、部屋の隅に池陽君と董擢様がいた事を。

ワシに向かつて董擢様は昨日の甘えた喋りではなく淡々と悪魔の笑みを浮かべながら

「良い夢は見れましたか？ 気に入っていただけましたか私の特製枕と薬入りの酒は。」

この後は急に口調を変え、明るく子供らしい喋りで、内容は真逆だったが

「殺しに来なければいつでもきてね、おじさん、寝ている時でもご飯の時でもいいよー、でも、殺しに来るからには殺される覚悟はしておいてね韓遂君」

こんな子供に勝てるわけがないと思ひ知らされた、武人としての誇りとか関係なかった、愛馬を殺され侮辱された怒りとかどうでもよかった、とにかく涙を流し許しを請うだけだった。

どれくらい泣いたか、許しを請うたか分からないが、董擢様が耳元で囁かれた。

「韓遂文役、あんたが漢王朝に敵意を持ち反乱を企ててようが私は一向に構わない、

私と友達になりたいのならば喜んで迎えてあげましょう、ただし、刃向うならば、

次は大事な馬どころか、こちらはいつでも、どんなふうになっても出る事を……。」

それだけ言っただけで董擢様は天水城から帰られました。

- 保 -

うん、今回の件は我ながらやり過ぎたね、ちょっと調子に乗り過ぎたところでないのが、思い返してみると恥ずかしさで布団の中でジタバタしてしまひますよ。

ただ今回の騒動で韓遂さんまで、琅？さんに続いて母上でも父上でもなく私に忠誠を誓ってくるって。

精神年齢でははるかに年上だが、年上に服従されるのはやり辛い、だっただけ僕の子供だもん。

「ワシの名は韓遂、字は文役、真名は雷らい、ワシの命と真名を董擢様に。」

なんて風に涼州のボスに服従されるのですから嬉しいなんてもんじゃないですよ、

董家が涼州を完全に支配に置けたのですから。

ここから余談ですが、雷さんがどうやら気になっていたのか執務室で仕事中に質問してくる、

「董擢様、もし私が馬を大事にしていなかったらどうされましたか？」と聞いてきた。

司が満面の笑顔で「その時は朝起きたら寝台の横に切り落とされた玉を並べていた」と。

雷さんが、とうか皆引いているよ、それにしても私も同類と思われたのは心外なんですが。

第十二話、保のターンに司のターンで涼州統一？（後書き）

うーん、保の怖さ、不気味さを上手く表現出来なくてすみません、話の展開も強引で見事なご都合主義、上手くいきませんねえ。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十三話、人材難にやり過ぎたかもしれない（前書き）

このご都合主義三国志で出演者を新たに増やそうと頑張りましたよ。問題は一気に増えすぎたのと、恋姫原作キャラで無いまたオリジナル。

大丈夫なのか、話がまとまるのか、全員のキャラ設定できるのか？
作者でありながら頭を抱えるばかりです、こんな駄文ですが生温かい目でよろしくお願いします。

第十三話、人材難にやり過ぎたかもしれない

保

「前々から言っていますがいくらなんでも人手が足りなすぎます！
！」

分かつちやいるけどやめられない〜 だとスーダラ節ですが、
やめるやめないではないね、むしろ辞められたら人材不足で大ピンチ
無駄話はやめましょう、話を真面目に進めましょう。

「^{あせみ}薊さんが言うように人手が足りないのはわかっています、
ただ、人材不足は一朝一夕で解決するわけなく、キツイが今の状態
で。」

流石、父上常識人です、このメンバーの突っ込み役です、
言っていることが此処までザ・普通なのが、頑張れ父上。

そして、第十三話にして、遂に司のお母さんである李肅さんの真名
が。

作者が親馬鹿なら和がいるしキャラかぶりで特徴が出し辛い、
だから必然と出番がなくなる、真名を決めてすらいない。

まさかこんなふざけた理由で涼州の最高幹部の出番がなくなるとは。

頑張れ薊さん、私は応援していますから。

「短期的な物と、長期的な物がありますが。」

司が口を開く

「短期的な物から説明を。」

母上が司に説明するよう促す。

「一番早いのは和様や母さんの私塾時代の知り合いとかを登用ですかね。」

まあ、一番早い解決方法ですな、ある程度知力なり武力なりある人間が手に入ります。

「問題は今疎まれ干されている人ならばうちに来やすいでしょうが、母上の知人ならば実力ある人でしょうしそれなりに地位を持っているでしょう、

本人が乗り気でも此方に来れるかどうか。」

母上のように太守とかしていたら登用なんて絶対に無理ですし、優秀ならば今の上司達が手放したがるか？という問題が。

私がつりあえず案に対する問題点をあげてみる。

個人的には母上の知り合いである劉表さんが普通に來たら笑うんだが、それにたいし私や父上が「お前は荊州太守だろ！」と突っ込めるかどうか。

「ねーよ!」

うん、心の中で思った事が口に出ていたね、父上突っ込みが荒いです。

「真面目に話すならば景気は良いがこんな遠方に来るか?と。」

荒い突っ込みに文句を言うのはやめて、一番の問題点を口にする。

「……たしかに」「」「」

私と司以外の全員が同意する。

「私みたいに涼州出身とかでないとなかなか此処には來たがらないでしょう。」

母上がいう、確かに父上も母上と結婚したから涼州にいるわけ。

「洛陽にいられない、とか、追放されたとかでないとか来難いですね。」

齒に衣着せぬ発言などで洛陽の宦官に睨まれ島流しみたいな感じで來た薙さんが続く。

「ただ、今の漢王朝に不満がある洛陽にいる不満分子を引っこ抜くのはいい案かと、
実力あるが玉無しや馬鹿將軍に気に入られないために干されているなんて、
不遇な時代を迎えている者は幾らでもいるでしょうから。」

父上、口が悪いです洛陽に恨みあるんでしょうが、多分あるんでしょう。

「たしか裏切り敵国の細作になる者の理由は主に三つしかなく、
地位などで評価されないことへの怒り、自分の実力に対し貰える少ない報酬、
国の仕事で己の信じる正義と反するという正義感、まずこのどれからですからねえ。」

FBIだったか、CIAであった人がスパイになる理由を思い出し口にする。

「話を持ちかけられた人間も細作としてその国に残り同僚を裏切り続けるのと違い、
今の評価されない職場に早々に見切りをつけ転職ならば彼らも抵抗が少ないでしょう、
給与という点や見合った地位という物ならば洛陽よりは得やすくなるでしょうし。」

子供らしくない発言の私と司に対し雷さんが驚いている、前回それ

で痛い目にあつたのに。

まあ精神年齢が40過ぎで雷さんより実は年上なんて思ってもいないだろうから仕方ないか。

「では、近いうちに洛陽に父上なり薊さんに行っていたただきたいのですが、

大谷商会洛陽支店建設の下見を兼ねて向かわれるのがよろしいかと。

」

涼州のアンテナショップを洛陽に作る計画が進行中なので、

そこは将来、洛陽でクーデター起こす際の拠点にするつもりなので。

流石にクーデター起こすなんて司以外誰も知りませんが。

「保さん、クーデターとはなんですか？」

薊さんが口を開く、おおう、また心の声が口に出ていたか。

「ここより遙か西の国の言葉で極秘裏に進めて開催し皆を驚かす祭の事です。」

とっさに答える。

「保さんお祭りなんか計画しているんだお祭り楽しいから大好き、それにしても保様は相変わらず博識なのー、異国語も知ってるなんて。」

琅？さんが感心しているようで、まあ、嘘はついていませんし、極秘裏に進め馬鹿な指導者達を血祭りあげるだけなんですから。司が苦笑している。

「この案はいいとして、人材確保の他の手段はなんですか？」
話が逸れてきていたので元に戻そうと母上が。

「各地に散らばる大谷商会で涼州で人材募集の為の試験をすると告知を、
遠方で費用などで来難い参加希望者は、涼州に荷物を送る荷馬車に同乗させれば。」

これなら涼州までの移動費用やらなんやらで躊躇している人間でも、負担軽減やら移動の安全確保されやすいという点から参加しやすくなるでしょう。

「問題はどの程度の質の人間が来るのか予想がつかないのでは。」
たしかに父上が言う通りで、告知範囲は広いが誰でもとなると。

「ならば、読み書き出来るかとか、告知の際にこの問題が解けたらとか、
そこで最低限のふるいわけをすればよいかと思えます。」

かなりハードル低いなと思ったが識字率が段違いに低い時代だったんだ、私達が小学生の時にやったようなテストより簡単でもかなり人が絞れそうだな。

「長期的計画という点ではどのような案がありますか。」

母上が最後の案を聞いてくる。

「国で孤児院を開く事です。」

やはりそれが、司の発言に一人納得する私。

「口減らしに捨てられる、または殺される子供や戦争で親がいなくなった子供、

また教育を受けさせたいが家が貧しく私塾に通わせられない家庭の子供に対し、

国が食事と寝る場所だけでなく教育を受けさせるという事です。」

ほお、という感じで案の内容に反応する雷さんと琅？さん。

「必ず優秀な役人になるとは保証できませんが、そういった子供たちが野盗になったとか、

路上で餓死したなどという事を防ぐことができる治安維持の観点からも進めたいと思います。」

司の発言に対し、父上が問題点をあげる。

「涼州の教育を受けたが他州に仕官とかならないか、それだと税金の無駄使いにならないか？」

その件に対し私が

「それに対しては、やり過ぎは良くないですが教えの中に愛国教育とでもいいでしょうか、

涼州のおかげで生きていると思えるような事を教える事で流出し辛くするのは？」

愛国教育をやり過ぎるは良くないが、大抵の国でやってますし少しくらいなら許されるでしょう。

「子供達も友達が身近にいてくれるのならば一緒にいたいと思えるでしょう、

僕は保さんがいたから楽しく、保さんだけでなく孤児達とか皆と友達になりたいですから。」

照れながら可愛らしい事を言つ司、演技ではなく素で言っているな、ちよつと可愛いぞ。

薊さんが鼻血を流しながら司の姿に興奮しているのは見なかった事にしよう。

全体的に今回の提案の評価はよく、あっさり可決される。

「とりあえず洛陽への視察は人員の調整やらないと人を送れないので、大谷商会経由で各地に涼州が人を募集しているという通達を出しましょう、孤児院の件は予算を見ながら。」

方針が決まり、母上が結論を出す。

- 司 -

全国に広げた涼州アンテナショップである大谷商会、これを効率よく使って人材募集しましたが、実は通達を出す時に保さんには話しましたが他の人には内緒でやった事が。

チートなので普段は使いませんがあまりに人手不足なので使いましたよ太平要術の書を。

将来に不安を抱えているそこそ有能で仕官先探している人は何処か？と読むと、

まあ出るは出るは、色々な名前が多く出たエリアに優先的に人材募集の広告を出しましたよ。

数カ月後、

登用試験が終わりでしたがやり過ぎたという感じになり、話進めた僕ですがなんか頭を抱えました。

いくらご都合主義なこの話にしても、何でしょうかこの応募してきたメンバーの優秀さは、
といましようか、歴史上こんな所にはいけない人間が大半なのが。

軍人部門では、まずは普通に使える淳于瓊さんが加入されましたよ、
いいのかこの人いて？

演義だと単なる飲んだくれで官渡の戦いでは無能で烏巢落とされ最後処刑されましたが、
西園八校尉に選ばれたりしたくらいの人間で、官渡では奇襲に必死で耐えたり結構堅実な戦いが。

堅実な戦いが出来る淳于瓊さんには、突撃が得意な琅？さんの副官として頑張ってもらおう事に。

私李儒に並んで董家らしい軍人がきました、郭？さんに李？さんが、
ぴったり過ぎる二人。

二人とも軍事ではそれなりに活躍したが長安ぼろぼろにしたり、邪教にはまったりと、
なんと言いましようか、母親のお腹の中におつむのネジを忘れたの

でしょう脳味噌が。

二人は保さんへ絶対の忠誠を誓う雷さんの元で老獺さというか頭を使う戦いを学んでいただきましょう。

まあ、ふざけたこととするようならば僕と保さんで洗脳、もとい教育すれば大人しく出来るでしょう。

それに保さんが普段と違う黒い笑顔をしながら、「可愛い可愛い月に被害が出るような馬鹿なら、生きてたまま鼠の餌やら産まれた事を後悔する地獄を延々と味あわせてやる。」とボソツと。

月さんが絡むと保さんが怖いですが、保さんの黒いオーラで背景が完全に歪んでいます。

軍人は良いんです、問題は文官といいますが軍師が冀州から大物ばかり来ました。

田豊、沮授、審配の三人が、私は二日酔いでもしているのでしょいか？これ何て袁家ですか？

これであと郭図がもしいたのならば袁家の軍師勢揃いですよ、大丈夫なのか袁家は？
人手足りるのかと他人ことながら心配をしてみました。

演義とかで彼女達は意見対立激しく袁家がボロボロになった原因の一つで、

逆にもめごとの種が無くなってこれのおかげで強くなるのか？無いな。

それにしましても何でもありの世界とは言いますが、全員年齢は17、8くらいで、ブレザーにタータンチェックのスカートごめん、それ何処の女子高生という感じの。

気づいてはいけないのは彼女達が途中で衣装チェンジしないと、ずっと女子高生姿、黄巾党が始まるのが、官渡の戦いだろうが、赤壁の戦いだろうが女子高生姿、どんな熟女マニア向けAV何だという感じになりそうだと不安で仕方がないです。

仕事の話に戻しましょう、史実では袁家の軍師だったわけで、採用試験パスするなど、三人とも真面目に仕事したならば相当に優秀ですから、そういう点では安心できます。

この三国志は正史ではなく外史だから何でもありとはいえ演義やらなんやらと真逆で、三人が幼馴染の仲良しで、しかも仲良し通り過ぎてなんか百合百合しい感じが。

将来何処かの国で色々な意味でキャラかぶりが激しいと突っ込みが来そうな予感がするの。

それにしましても、女三人寄れば姦しいなんてよく言いますし大変やかましいです、
和様の顔を見ると喧しさに表情はいつも通りですが明らかに怒りをこらえているのが分かります。

涼州の高級役人として採用即和様の怒りで斬馬刀でバラバラに切り刻まれ鳥葬、
なんてのはさすがにまずいので、なんとかしないといけません。

ここは全員の配置をバラバラにして黙らせましよう、和様の補佐役に田豊さん、
空様の補佐役に沮授さん、母上の補佐に審配さんと決めました。

あとは僕と保さんの手元に優秀な軍師見習いが欲しいのですが、まあ、
知らない人からしたら子供に補佐職はとなりますので、これはおいおい募集していこうかと。

將軍クラスが3人、軍師が3人新規加入と涼州の人員不足解消の目処が立ちそうです、
まあ、とはいえこれから人材募集の手を緩めずにいきましょう。

うちで出番無いくらいでも飼殺しにすればその分他国は人材難となるのですから、
やってやりましようと思いましたがね、劉備や曹操が人材不足だった

ら面白いでしょう。

さてさて、これからの董家、いや、私と保さんの悪ふざけが何処までいけるかと楽しみです。

人材が確保できたならば、涼州だけでなく領土を広げるとか考えてみますか、

司隸州は流石に無理ですが、そうですね益州の漢中とかくらいは欲しいですね。

楽しいですねえ、こういう謀略を考えるだけで、それにしてもふと思っただのが、

イレギュラーな存在の私と保さんが頑張ってますが、正史で言う董卓と入れ替わりですかね？

まあ、もしそうならば悪役として突っ走って董卓とは違って勝つようにしましょうか。

第十三話、人材難にやり過ぎたかもしれない（後書き）

書き終えて一言、6名は人が増えすぎた、オリジナルキャラばかり。

これで話が進んで恋姫原作キャラが来たらどうなるのだろうか、大丈夫か私？と胃が痛くなるばかりであります。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十四話、恋姫達と天才作家（前書き）

今回は拠点フェイズ、董家兄弟の触れ合い編です。

この話を読んだ皆さんに喜んでいただければ幸いです。

第十四話、恋姫達と天才作家

保

まさか、私が子供達に大人気になるとは思わなかった、前世の私を知っているのならば皆が口を揃えただろう「嘘だ!!!」と。

友人ではなく、なんか蝉が鳴く話の鉈女が出てきそうだが。

蝉で思い出したが仕事のしすぎで疲れていたんでしようね、蝉の鳴き声が「死ぬ死ぬ」言っているようにしか聞こえない、と支店長に話したら「今すぐ有給を取れ」と言われ休まされた事が。

昔の思い出話は置いておいて何が人気なのかと言いますと、紙芝居屋さんを始めたんですよ、今や街を歩くと子供の列がついてくる。

まるでハーメルンのバイオリンひきか、レミングスの集団入水だなどと。

きっかけは可愛くて可愛くて仕方無い月の為に絵本を作ろうと。

実は前回の話からまたキンクリしまして私が12歳、月が4歳に、私の服の裾をつかんで「おにいたま、あしよんでください」

舌足らずに喋るところや私の後をとことこついてくる姿が愛おしくて、

何度吐血しながら「我が生涯に一片の悔い無し」と叫んだことか。

そんな可愛い月の頭を撫でてあげると頬を染めながら上目遣いで、「へうつ、おにいたまはずかしいでふ」これもヤバかった気絶していた。

ある日なんか遂に月に「やさしいおにいたまだいすきでふ」
死んでも良いと思えましたね、司が言うには三日間意識不明だったと。

後に聞いたが父上は、自分よりも先に月に大好きと言われた私に嫉妬、
だが、父親として私を助けないと血涙を流して苦悩していたよう
で。

だから私が目を覚ました時壁にめり込んでいた父上がいたと。

月の可愛さを語り始めたら何年かかっても止まらないので、
話が脱線しすぎは不味いですし、話を元に戻しましょう。

前に話をして計画していた孤児員が完成しまして、
孤児員は聞こえが悪いと保育園とさせていただきましたが。

同い年位の子供が多いからと月や馬超こと翠ちゃんをよく連れて行

ってあげるのですが、
月が「おにいたまのはなしをみんなにしてあげてくたしやい」と。
こんな事言われたならば兄としては頑張らないといけませんよ、
執務、鍛練、保育園で授業、新商品開発、視察、
やる事だらけですが寝る時間を削って紙芝居作りですよ。

「夏の間遊んでいたキリギリスは冬になりご飯がなくなり困っていました。」

月や子供達は目を輝かせて私の話を聞いています。

「おにいたま、きりぎりすさんはどうなるんでふか？」

話の展開を気にする月が可愛すぎる。

「ご飯無くなったら戦えないからどうするんだ何処かに食べに行くのか？」

なんで飢えて困っているのか分からないのか翠は、なんでこんな残念な子に。

「ゆ、月が気にしているんだからはやく続きをはなしなさいよ、
ぼ、僕も月につきあって話を聞いてあげるんだから。」

緑の髪の子は保育園で一番賢いがやはりまだまだ子供で自分が気に

なるのに、
必死で誤魔化そうとするなんて可愛いなあもつ、それにしても月に
真名を許されているとは。

「なあ、てきちちゃん、きりぎりすはどつなつてまづんや。」

何故かこの時代に関西弁の子は、私を妙な呼び名で呼んでくる。

「じはんがないならかりをすればいいんだ、なんじゃくな。」

銀髪の子は幼子とは思えぬ勇ましい発言が、軍人にしたら楽しみな
ような不安なような。

「……じはん？」

赤いアホ毛のあるこの子だけ明らかに話に食いつく場所が違うのが。

「はやくはなすのです、きりぎりすはどつなるんです！」

黄緑の髪の子は一番子供らしい反応だな、気になって仕方がないよ
うで。

いろんな子供がいるが皆話をすると反応が違って面白い。

ここで蟻とキリギリス“弱肉強食編”の話を続きをはじめ。

「夏に頑張つてご飯を貯めていた蟻さんはキリギリスさんを家に呼びました、

大変だったね外は寒かったろう、早く入つて。君を歓迎するの宴会だよ。」

ここでまた一旦話を区切って見渡してみると。

「きりぎりすさん、たすかったんだよかった」

ああっ、もう、月は優しいなあ、ついつい目を細めてしまう

「なんだ宴会準備してあつたんだよかったじゃんキリギリス」

裏があるとか考えないのでしょうか翠は、お兄さん貴方の将来が不安で仕方ないです。

「なんで蟻はキリギリスを甘やかすの、弱味を握られているの？」

子供らしくない意見だ、もっと素直にいこう私が言うのもなんだが。

「なんやたすかったんかいな、えんかいかさけでるなんていいな！」

酒のさの字も知らないガキンちょが、まあ、大人ぶるのも可愛いな。

「なきつくきりぎりすもなさけないが、あまやかすありもありだ！」
君は何故そんな人生ハードモードを歩もうとするんだ。

「えんかい、・・・」はん

お兄さん君に話を理解してもらうのは諦めたぞ。

「あまやかすとやさしさはちがうのですぞ、ありはしょうらいくる
うするですぞ。」

なんだろうとお兄さん、将来君がそうなりそうな気がしてしかたがな
いんだが。

流石にみんな蟻とキリギリス“弱肉強食編”の展開は読めないよう
で。

「宴会の最中にキリギリスさんは安心からか寝てしまいました、
蟻さんはその姿を見て笑いながら“やっと薬が効いたか”と眩きま
した。」

ザワザワ、福本な擬音が部屋に鳴り響く

「冬の間の御馳走が自らやって来るとはな」と蟻さんは、哀れキ
リギリスさんは、

蟻さんに殺され食べられてしまいました、油断大敵、蟻さんやった

ね、めでたしめでたし」

創作紙芝居、蟻とキリギリス“弱肉強食編”が終わり周りを見渡すと。

「へうっつ、きりぎりすさんたべられちゃうなんて。」

泣きそうな月が可愛い、はうっお持ち帰りー！

「なあ、兄貴、キリギリスを食べるつもりなら宴会はしなくても良くないか？」

油断させるとか策だという事は分からないんでしょうか、策があっても気にしないのか。

「僕も先を読めなかったが、蟻の真意を読み取れなかったキリギリスの負けか、

いや、準備らしい準備をせず冬を迎えた段階でキリギリスの負けか。

軍師みたいな思考をする子だな、鍛えたら面白そうな、

とはいえ、やはりキリギリスが食べられた事は驚きだったようで。

「まさかたべられるとはおもわなかった、いんどじんもびっくりや。」

インド人もビックリって古い表現だな、いやこの時代なら新しいか、
といますか、なんでお前さんはその言葉を知っている。

「くすりはなんとひきょうな、ぶじんのかざかみにもおけん」

蟻は武人じゃないぞ、お兄さんは君が将来猪武者にならないか不安
だ。

「ごちそう、おなかすいた、ごはん」

うん、お兄さんそう言われると君の台詞を読んでいたよ。

「ありのさくはみごとにきまっただですが、ねねにはつうじないです。」

君が将来キリギリスに食われる蟻になりそうな気がしてならないよ。

余談だが、この時の私は知らなかったが私が作った創作絵本、

「蟻とキリギリス弱肉強食編」「三匹の子豚く逆襲の狼」「カチ
カチ山復讐の代償」

等の作品が、後に大陸中の軍師見習い達に策の重要性を教える教科
書になったそうぞ。

「はわわ、実は蟻の策は冬になる前から仕組まれていたなんて。」

「ほお、狼は完璧な籠城したと思った豚をこっ破るとは面白い」
「なんで狸もあっさり引つかかるの馬鹿じゃないの、だから男は駄目なのよ」

各地に散らばる軍師予備軍達にはかなり好評だったようだ。

更に余談ですが、夜中のテンションで一気に作った大人向け絵本、「白雪姫く鬼畜の宴」 「桃太郎く栄光の代償」 「裏切りの兎と亀」といった作品も、後に各地で大ヒットし、舞台化され上演はロングランになるのだった。

「あわわ、これは過激すぎるでしゅ、でも、朱理ちゃんにも教えてあげないと。」

「なんて華麗でないのかしら私と違って、私ならば皆がひれ伏したでしょうしオーホッホ」

「霸王はいつでも全力、とはいえ力を見せつける兎のような存在も面白いはね」

とりあえず色々な場所で色々な人に愛された作品だったようだ。

紙芝居終わった頃合いを見計らっておやつを持った女性がやって来る。

まさか、この黒髪を束ねたエプロン姿の上品な女性が、憂いを含んだ微笑みをする綺麗な女性があのだ丁原だなんて。

呂布の育ての親の丁原がまさか保育園の保母さんをするなんて、

丁原という名前を聞いた時は驚いて飲んでたお茶吹き出したくらいで。

丁原さんがいるくらいですからもしかしたらこの保育園に、

三国志最強の呂布がいるのか？なんて馬鹿な事思ったりしましたよ。

とりあえずおやつですよ、新たなバトルが始まりますよ。

「おにいたまいっしょにおだんごたべまひょう、へうっ。」

月が私の手を引いて隣に座らせる、それにしても舌足らずなだけでなく噛むのも可愛過ぎるよ。

あまりの可愛さにちょっと鼻血でたし。

「僕は月と一緒に食べたいだけなんだから、でも月が望むから一緒にしてあげてもいいわよ。」

そう言いながらも隣にちょこんと座る子、可愛いなあ、この年で僕っ娘ツンデレメガネって。

「おっ、なんやいつもどおりおもしろそうなことになっておるやんか。」

この子はなんで反応がこうおっさん臭いんだ、ただいずれ一緒に楽しい酒が飲めそうだな。

めっちゃ好かれていますよ、ちびっこハーレムですよ、ロリならたまらないんでしょうなあ。

精神年齢45歳のおっさんには微笑ましいとしか思えなくて。

一方、団子に必死な連中を見ると、

「よし、お前と勝負だどちらが沢山食べられるか。」

翠、この中で7歳と一番お姉さんなのに、仕方がないなあ、これがあの錦馬超だとは。

「なにをー、はやくたべないならせんぶわたしがもらっぞ……うぐうぐう」

急いで団子を食べるかのどに詰まらせているよ、この銀髪の娘は。

「………もきゅもきゅ」

一心不乱に団子食べているこの子、何？食べている姿にめっちゃ癒されるんですが。

「れんどのー、おだんごだけでなくおちゃもありませぬ。」

うん、間違いなくこの子は将来貢いで痛い目にあっ子だね。

こうして私の月達との紙芝居の会は終わるのだった。

第十四話、恋姫達と天才作家（後書き）

今回の話はいかがだったでしょうか？

それにしても前回出した6人のオリジナルキャラの設定をとばして、恋姫原作キャラを一気にこんなに出してしまうとは。

大丈夫なのか私、話が進むのか、どう絡ませて遊ぼうかな、とか、不安だったりわくわくだったりと変な感じを楽しんでいます。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十五話、保と司の考え事（前書き）

真面目とギャグが中途半端に交じってしまった、
ギャグオンリーなはずがどうしてこうなった。

そして話数を間違えていた直したが恥ずかしいミスして気づかない
とは。

第十五話、保と司の考え事

- 保 -

朝の執務も終わり昼食を取る、訓練も無く午後からする事が無く、ならば、と思ったが月達は侍従達と保育園に行っている。

未来技術の応用開発もする気が起きない、たまには、と部屋で一人ポーンとする。

ポーンとしていると、ふと、いろんな事を思い出す、司が前に面白い事を言っていたなど。

私は正史での董卓の代わりとして今の時代にいるのではないかと。

この世界には董卓である月がいるとはいえまだまだ幼子であり、時代は三国志にはまだ早く、皇帝は霊帝になったばかりで、とはいえ本来ならば董卓はそれなりの歳になっていないといけない。

まだ12歳という若い私が月を若いというのもなんなんだが。

正史ならば既に死んでいるはずの董擢という存在になった私がいて涼州を実質治めている、

後の董卓の悪事の協力者で知恵袋な李儒が司であり、いないはずの時期に手元にいる。

董卓の元にいた郭？に李？までもが手元にいる状態、この外史では正史の董卓役を私に求めているのだろうか？

それでもいいが、とはいえ、悪役董卓をやるのは真つ平ごめんだ、まあ正義も悪も世の中には無いから、正義の味方とかでなく場をかき回す存在になれば。

その為、正史でやらかした郭？、李？達やらお馬鹿さんは魔改造の最中。

それにしましても、ヒヤッハーな正史の董卓にはならないように頑張っています、うーん、順調過ぎますねえ上手く行き過ぎている不安になるくらい。

涼州なんて辺境があり得ない規模で経済が拡大し続けているんですから。

私と司が政治に参加するようになった7年前と比べおおよそだが人口は倍増、農業生産高もおよそ倍、商取引に関しては3倍以上になった。

とはいえ農業は水の確保など諸問題が山積みで中々規模の拡大できないのが悩みだ、農薬と肥料、輪作等で生産量は増えてはいるがこれからの伸びしろに不安が。

涼州の利益の一番は地の利を活かしシルクロードを使った大陸以外の貿易の独占、

あとは全国に散らばらせた大谷商会でうる新商品の販売での利益が。

とはいえ、頑張っても悲しいかな此処は辺境、北方四州だとかには敵わない、

一人当たりでは圧勝でも人口が違うなど、これだけ儲けていても総額では全然敵わない、悲しい物だ。

まあ、順調な経済はいいや、では、軍事は？漢の天敵である異民族への対策は？

涼州に限って言えば完璧に近い、例えば羌族とは相思相愛の関係である、ちと大袈裟か。

この前の事だが、羌族の族長が日頃の支援のお礼をしたいと隴西までわざわざやってきて、

ならば私は史実で董卓がやったように飼っている牛を潰して出したくらい感謝されましたよ。

トラクターなんてないこの時代に貴重な農機具である家の牛を潰す、しかも、子供である私が牛を潰す重要性を分かりながらそれを行う。

族長が如何に自分達が大事にされているのか分かり感涙するの、まあ当然か。

ごめん族長、見た目は子供だが私は実は族長よりはるかに歳上なん

だ、
しかも正史を知っているから出来たやらしい手段なんだな、まあ言わないが。

おかげで軍馬を千頭程プレゼントなんてあり得ないサプライズが、ただそのあとにもサプライズが族長が娘を側室に差し出すとまで言い出したのは参った。

馬のオマケが族長の娘って、提供するなら順番が逆だろ、普通なら娘そして馬もだろ、
ビックリマンならシールだろ普通はウエハースではなく。

最近の出番が少ないから？皆忘れていないか？母上の私LOVEぶりを、

いやまあ族長に関しては私とは初対面だし知らなくても仕方無いが。

だが、砲弾は別の所からも撃ち込まれるとは思ひもしなかったですよ、

琅？さんが黒さが漂ういい笑顔で「うちの翠が先だる順番無視はいかんよな。」って。

琅？さんがいつもと口調が違う！？黒いオーラが怖すぎます、

あと、私と翠ちゃんって何の話ですか、私は何も聞いてませんよ！？

太守の息子であり恋愛結婚なんか無縁な時代で、私の思いなんか関係ない時代だとはいえ。

翠ちゃんは7歳ながら可愛く将来は美人さん確定で物件としては優良物件です、

ただしお馬鹿すぎます、あと、当人の意思を無視してはいけません。

翠ちゃんは年齢的に私からしたら嫁ではなく、私は独身ですが娘みたいなもんですよ。

それに仮にですよ、翠ちゃんが15歳で私と結婚したとして、その時私の精神年齢53歳ですよ！

ナイスミドルですよ、ブランデーグラスとガウンな組み合わせの年齢です、

それで15歳の幼妻、犯罪ですよ、御天道様に顔向け出来ません。

この時代的にはセーフでも私的にはアウトです、一番アウトなのは親友であります、あのナチュラルボーンテロリスト司になんといじられることか。

司にかかれば私など強風の前の蠟燭ですよ、一瞬で吹き消されますよ、

そうか！！翠ちゃんを司のお嫁さんとして押し付ければいいんです。

ナイス提案、私天才だ！！！！司が「これは孔明の罠だ」と叫んでいる頃には、

私はそれを見て司に「ロリコンにジョブチェンジおめでとう」「と祝福のニヤニヤが出来る。

完璧なる勝利ですよ「勝ったッ！第3部完」って奴ですよ。

………、やはり負けフラグだったか、勝ったッ！第3部完は。

心を読みきられていたんでしょ、それとも分かりやすいくらい顔に出ていた？

1点ビハインドでノーアウト、ランナー1塁バッターは川相、何を
する位分かりやすかったか？

「安心して司君のお嫁さんには蒲公英がいるから。」

ボス戦からは逃げられないというのは本当なんですね、
私も司も、琅？さんというボスに一方的に殺られるのか……。

しかも、司は私の翠ちゃんより年下な蒲公英ちゃんですよ、完全に
アウト。

司を見ると顔付きが覚悟を決めた顔まさかメガンテを唱えるのか？

「お母さん助けて〜!!」

やりやがった、司LOVEの薊さん、私LOVEの母上が暴走したら琅？さんでも危うしか？

違ったよ……………。

「こういう機会に使わないと翠も蒲公英も将来行き遅れかねないじゃー!!」

本音を隠せよこの人！あと、もつと娘と姪の可能性を信じようよ！

そして、みんな客人である羌族の族長を忘れすぎだよ、いくらなんでも。

族長固まっていたし。

「保様も司さまももてますなあ、ワシもあやかりたいは。」

雷は空気を読み！とりあえず司と二人で雷はボコったが。

あれは悪夢な事件だったな……………。

話が明後日の方向に行きすぎた軍事に関しての考え事に戻そう。

太平要術の書も確保している、書の力を使えば張角達の場所も分かる、
そうになると身柄を抑えるのも可能、黄巾党すら起こるのを防げてしまふ。

これに関して司の言った言葉が、物騒にも程があるがどうも気になつてしまふ。

「いつそ黄巾党、何進と十常侍の対立をこつちで管理して動かさない？」

凄いやな！？軽い発想なのが、この大陸を揺るがす二つの大事件を、コンビニに煙草買いに行ってくるね、なんて感じて話すんだから。

まあ、私達が大陸の平穩の為に暗躍して黄巾党が起きなかつたとしても、

漢王朝の無能無策ぶりでは世は乱れるのは確實、黄巾党は看板にしかすぎず、
結果は大して変わらないだろう大規模な反乱は遅いか早いかの違いだけ。

霊帝がくたばって宦官と何進が争いその後の群雄割拠も確実に起きるだろう、

霊帝が死ぬまでに完全に洛陽のごみ掃除と改革が済めば別だが、う

ん無理だね。

うーん、確かに面白そうだが、正史だと黄巾党起きるまで調べたらいまから13年後。

私達で時計の針を進めてしまつて、早い段階で群雄割拠にするというのも、今の段階で人材確保出来ていて金もある有力勢力は涼州位しかないのが。

例えば袁家なんて金しかない存在なのが、まあその金が桁違いなんです、

正史での袁紹は猜疑心強いと問題あつたが優秀だつた。

だが、こちらの奴さんは今は私と同じ子供、そうなれば袁逢・袁隗は優秀だが、

この二人が死んだら袁家は今の段階で内部分裂しておしまいでしょ
うなあ。

二人を殺れるくらいの暗殺者はいるからいざとなつたらやつてしま
うか。

曹操だつてまだこの外史では単なるガキンチヨ、劉備なんて筵織り
だ。

内心、司の言葉をやってみたくはある、とはいえ私はこの世界に積

極的に戦争しに来たわけではない。

それに私と司は戦争未経験の人殺しについては童貞だ、頭でっかちな童貞軍師が、
そんな人間が思い付きだけで人を死に追いやる戦争をやっているのか！？

あかんよなあ。

悩むねえ、本当にろくでもない人間だな、私も司も。

大陸の安寧を求めるならば私と司の排除が一番の最短ルートっぽいというのが。

思考が変な方向に行きすぎたそろそろ司が訳のわからん事言ってるって来るかな？

- 司 -

今日は昼食後暇だし、する事が無いので部屋で一人考え事、とりあえず、あとで保さんのところに悩み相談に行こう。

最近よく思うのが、漢中とか司隸州といった涼州の周辺が欲しいというのが。

どう攻めるかなんてよく考えますが、欲しいから侵略を考えたりつて私は一体何処の蛮族だ！と。

とはいえ、益州なんてグチャグチャになるなら早い段階で欲しいなあ。

涼州は広いが住みやすい場所が少ない水の確保やら生活基盤を大規模に揃える困難さが。

ならば我々がはやくでかくなるには早い段階でまともな土地を貰ってしまっしかないかと。

国境線周辺に小さな集落を作ってそれを劉焉の所のはねっ返り兵が気に食わないと、兵に襲われて哀れ、可哀想な村、こんな悲劇が起きたら私達はやり返さないよ。

こちらは領民保護と制裁という大義名分がありますから、こちらは何もしていないのに劉焉の兵の鎧を着た軍人に襲われるなんてねえ。

いくらなんでもあからさますぎるか？まあ霊帝や宦官共は馬鹿だから平気だろう、実行するときは念のため奴らに金や酒といった鼻薬を嗅がせれば確実だな。

こつこつ事を考えているから腹黒とか言われちゃうんでしょねえ。

まあ、そんなことやるならば安全策で、漢王朝の連中に金ばらまいて司隸校尉を買わせてもらうかな。

涼州太守に異民族対策で活躍した褒美で琅？さんになってもらって、董家は司隸校尉になって、長安とか洛陽をおさめて実質董家がかなり早い段階で周辺を統一してしまうなんてのも。

これはいいなあ、董家なんて名門でも何でもない家が金を稼ぎ統治を成功させ名君主扱い、董家に新たにどこかの州の太守と兼任させてなんてのは洛陽はやりたくないだろう。

和さんは地元出身だというのもあるが、母さんと同じで洛陽に睨まれたから僻地涼州にきたと。

異民族対策成功なんて事で出世させると、洛陽の馬鹿共には邪魔な存在が増えるだけ、校尉任命は董家への褒美でありながら、故郷から引き剥がす罰にもなるなんて思えるでしょう。

涼州新太守に琅？さんにすることで董家の戦力をかなり削ることができる、二人が仲違したならばそちらに気が向き洛陽に砂掛けるような真似はしにくくなる。

司隸校尉は洛陽と長安を抑えるでかい地位だがそんな風になればよ
り舐められる、

地方の豪族程度に漢王朝に刃向う力など無い、とこついう勘違いで
舐めてくれるのが一番ありがたい。

漢王朝はでかいだけの龍、しかも死にかけ体のいたる個所が腐って
いる死にかけの龍、

宦官やら何進なんて連中はくたばり損ないという事実が分からない
でしょう。

ちよつとこれは面白い、今度、会議の際に提案してみましよう。

色々考えるのが実に楽しい、たぶん今の僕は黒い笑いをしているん
だろうなあ。

そついえば月ちゃんの保育園仲間に賈？がいたなあ、あの賈？だろ
うから鍛えてみるかなあ。

やめておくか、月ちゃんに影響あつたなんて事になったら、保さん
怒るから。

怒れる保さんにかかれば人体にある関節の数を倍にするくらいよゆ
うでしょうから。

とりあえず、今一番の悩みを相談するか、保さんならばナイスな答
えを出してくれるはずだ。

- 保 -

予想通り、司がわけのわからん事を話にやってきた。

「保さん、将来戦争となって兵の前で演説をするならば、どちらのほうがいいかな？」

満面の笑みで何を言いだしているんだこいつは、頭が痛くなってくる。

「私の親友諸君らが愛してくれた董擢様は死んだ！ なぜだッ？！

戦いは、やや落ち着いた。

諸君らはこの戦争を、対岸の火と見過ごしているのではないか？！

董擢様は諸君らへの甘い考えを自覚させる為に死んだ！ 諸君の、

父も、兄も、・・・以下略」

おいっ！！いきなり俺が殺されたことが前提の演説なのかよ、とりあえず突っ込んでおく。

「勝手に殺すな！あとそれは戦況が落ち着いた時にやるもんじゃないのか？

もう一つの案が嫌な予感がするんだが怖いもの見たさで聞こう、教えてくれ。」

笑顔の司が

第十五話、保と司の考え事（後書き）

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

とりあえず司の黒さが作者の予想を裏切り勝手に黒くなっていくとは。

第十六話、涼州の新人はやはり変人？（前書き）

第十三話で新たに涼州に加わった6人のうち軍人組が加わった直後の話を、

まあこんな感じのキャラですと言う説明の回です。

それにしても今後彼らは出番があるのか？和や司といった、個性だらけのキャラの中で新人達はいけるのかと不安になるばかりです。

第十六話、涼州の新人はやはり変人？

淳于瓊

皆様はじめまして私、馬騰様率いる騎馬軍団で団長代理を勤めさせていただいております、
姓は【淳于^{じゅんう}】、名は【瓊^{けい}】、字は【仲簡】、真名は【紅^{ほん}】と申します以後お見知りおきを。

二つ名は「涼州最後の突っ込み」「没個性の教科書」「困った時は淳于瓊」というのが。

將軍ですが二つ名がなくていいです、嫌がらせとしか言えない感じの物ばかりなのが。

涼州最後の常識といえますのは、涼州の突っ込み役は池陽君様、董擢様、私の三人いるが、董擢様は実際はボケで、池陽君様は普通に見えて普通にぶっ飛ばされていたりギャグ担当で、そうなるとう涼州で純粋な突っ込みと言うのが私しかいないことからつきまして。

「お母さん、紅は泣いても良いのですか？」

つい、不条理な人生が嫌になり呟いてしまいました。

「没個性の教科書」とは、政治、戦闘、キャラ、突っ込み全てに特

徴が無いと言われたことから、

「お父さん、まだ勤め始めたばかりですが紅は涼州での職を退職してもいいですか？」

「困った時は淳于瓊」とは私の突っ込みや発言があまりに普通な為、執務室での会議が目茶苦茶になった時に、普通の発言で場の空気をどうにかできるからと。

私は本当に軍人として涼州に採用されたのでしょうか？自分の人生に疑問が。

話を元に戻しましょう。

軍人としましては、涼州いや大陸に名を轟かす名将、馬騰將軍の副官をさせてもらっております。

私などが涼州騎馬を手足の如く扱う偉大な將軍の副官が務まるのかと思いますが、

太守の君雅様のご子息である擢さまの強烈な推薦があり今の地位につきました。

擢様とはじめて会ったのは君雅様との面接の時であり、正直なところ、

“何故子供がこんな所にいるんだろう？”と思ったのですが。

採用が決まり何処の部隊への配属になるのか等決める際に私が呼ばれ部屋に向かうと、
君雅様、池陽君様、馬騰將軍、韓遂將軍だけでなくそこにも擢様、更に李儒様がいました。

「淳于瓊さんは戦場でのいたる局面で堅実に部隊を運用指揮することが出来る人物ですので、
馬騰さんの補佐として騎馬隊が効果的な活動出来るように尽力していただくのが適任かと思えます。」

なんでこの場に子供がいる？くらいしか思っていなかった私ですが、私の事をろくに知らないはずの子供が、私以上に私のことを評価してくれるなんて。

とはいえ、天下の馬騰將軍の補佐なんて無理だと思ひ断ろうか悩んでいると馬騰將軍が笑顔で、

「保君や司君は見た目は子供だけど実際はどんな軍師よりもはるかに賢い軍師様なんだよー、
今の大陸で保君達を超える軍師なんかいるのかなー？保君が信じた人ならば琅？も信じるよー」

と驚く発言が、それどころか擢様は騎馬の新しい装備、戦術、涼州の政策全てに携わっていると。

世界は広く自分などまだまだということを思い知らされました、

だが、そんな私を擢様はかったださったので期待に応えられるよう努力する日々です。

こういう風にしか喋れない私を見てまた普通とか皆に言われるんでしょう、それが辛いです。

だが、紅の一番の問題は、能力は良いがキャラにあまりに個性が無く普通な為、和や司といった話を弾ませる事が出来る存在と違うので今後出番があるのか？という点だった。

- 琅？ -

新しく涼州にきた紅ちゃんが部隊にきて、琅？は凄く助かった！。

保君はいろんな事を知っていたり頭がすごく良いのは分かっていたんだけど、

琅？の部隊に何が足りないか？紅ちゃんが部隊に必要、って良く分かったな！と感心しちゃった。

皆が紅ちゃんの事の特徴無い普通とか、からかっていて紅ちゃん怒っているけど、

実はみんな紅ちゃんの実力の凄さを認めているからなのが紅ちゃんだけが分からないなんて変なの！。

突撃するだけでなく奇襲したり、罾の準備をしたり、偵察や兵站を管理したり、陣形の指示や伝達したりと地味な事もキチンとこなせるなんてどんな部隊も必要とする人なのに。

琅？の部隊は突撃は強いけど粘られて長期戦に入ったりすると大変だったけど、部隊の皆も紅ちゃんがいるようになってからどんな状態になっても戦いやすいって言うてるのー、でも、それだと私の元だとやりにくいって言われているみたいだから怒っちゃった。

からかったり面白いから紅ちゃんには皆が褒めている事を内緒にするんだけどね・・・ニシシシ。

あつ、でも、普通と言う皆の意見に賛成する点もあるよー。

紅ちゃんも年頃の女の子なんだからもっとお洒落をしないと可愛くないのー、街で紅ちゃんに声掛けられた時、警邏の兵に話しかけられたと思って気付かなかったなんて事あったの。

仕事ない御休みの日に街に出るなら鎧姿ではなく女の子っぽい服を着ないと、

警邏の一般兵と間違われぬ日が無いって普通ではなく逆に凄い事なのを感じしちゃう。

今日は新たに涼州の將軍見習いとして入ってきた二人の挨拶の日で、城の謁見の前で自己紹介しているが、どうしようもないのが入ってきたなと呆れたは。

「郭？阿多だ、呼び方は任せる」

「李？稚然っす、阿多に誘われてきたッす」

ワシも軍人として細かい事は気にしないし、色々口うるさく言われたりしたのを無視してきたが。

この二人は流石にワシもあせったぞ、ワシの部隊への挨拶ならばいいんだが、
和や空、保様、司様いる場での挨拶でこれはいくらなんでもないなと。

自由な城だが明らかに皆苦笑している、まあ結果出せば皆多少は目をつぶるところだが。

「なんで子供がいるっすか？」

気になるのは仕方ないにしても、太守への言葉づかいではないな。

「小守だろ。」

保様と司様の凄さを知らないからとはいえ、もしかしたら？を考えないの軍人として情けない。

「涼州の人間は基本寛大ですが皆が寛大だとは限らないですよ、礼儀を知らないなら躡されるべきかと。」

薊の口調が怒っているか、まあワシもこれは怒るべきだと分かっているが、

まあ、ワシの場合はゴチャゴチャ言うのは苦手だから力で教えてやるうと思っただが。

この少し前に入ったばかりの淳于瓊という奴なんか二人を怒鳴りつけたいが、
太守の面前だからと我慢しているが怒りで肩がふるえているのがよくわかる。

「躡されるべきって犬じゃないっす、失礼っす」

失礼はお前達の態度がだぞ、頭が痛い、李？か、こんな馬鹿でも武将になれる時代になるとは。

「文句あるなら回りくどく言っな、むかつくと素直に言えよ。」

なんだろうか、李？は馬鹿で済むが郭？はなんだ反抗期なのか？

「優秀な武官と聞きましたが、いたのは躰もされていないおつむが
からな野良犬でしたか。」

「いい歳して権力にも怯えず反抗する俺恰好良いみたいに思ってい
る痛い思考の人でしたよ、

野良犬に失礼ですよ董擢様、犬の方が賢いですよ生き残るのに知恵
が必要なのですから。」

保様と司様が顔は笑っている目が笑っていないあれは相当怒ってい
る、あの二人殺されなきゃいいが。

「ガキが失礼なこと言ってやがるっす、ただ大人としてお前らが謝
るなら許してやるっす」

「口先だけが一人前のガキがうるさい。」

保様と司様に確実に殺されるな、まあ御一方に忠誠を誓う私が代わ
りに拳で指導するか。

ワシがぶっ飛ばそうとする前に、保様が郭？の、司様が李？の懐に
飛び込んで右の正拳突きを

ドゴッ！！鈍い音がした、二人は手を休めず更に前のめりになった
相手の顎にガスッと左肘の一撃。

倒れこんだ二人の頭を右足で踏みつけ押さえるお二方、馬鹿共に何
があったとかよりも、

お一方の息のあいかた、同じ間で綺麗に重なる一連の動作の見事さに感心する。

「「「うぐうぐう」」

小さく鈍い声をあげる二人、將軍見習い候補でありそれくらいでは気絶はさすがにしていない。

「お前らが馬鹿であろうが構わない、ただ軍人なんだから目上の者に敬意を払え、

お前らが馬鹿で勝手に一人で死のうがこちらは一向に構わない、だが皆馬鹿の巻き添えはご免だ、

次会った時も馬鹿だったならばどんな敵よりもまず最初にお前らを殺してやるからな。」

司様が普段の喋りとは違う冷たく吐き捨てるように言う。

「礼儀を知らない知能も無い、そして、こんなガキにのされる、お前らに何の価値がある？」

今、這いつくばらされているのはお前らは殺すべき価値も無いと判断された事を足りない頭で理解しろ。」

保様が司様に続いて頭を踏みつけ抑えつけ、同じく冷たく口調で言い放つ。

この二人の問題は傲慢さと固定観念という致命的な物なのが、武人

ならば相手の強さを読み、
どう動くか察せないといけないが、強さを見誤りお二方が攻撃して
くると思いもしなかったのが。

今まで生き残っていたのは偶然相手が弱かっただけで、これでは遅かれ早かれ、
相手の強さも分からないで強者に喧嘩を売り突っ込みのたれ死にだ
など。

お二方は武の方はまだ成長途上であり、大陸有数となっている知力
と比べるとだが、
空いた時間は鍛錬に励み、いつもワシや琅？に殴られ蹴られ這いつ
くばらされ、
血まみれ泥まみれになりながらも這い上がり更に強くなるうとして
いる。

そんな二人に、軍人としての肝心な物が不足する人間がどうやって
勝つのだと。

「韓遂將軍、郭？、李？というヒヨコを預ますので、軍人とは何か
？戦いとは何か？を、
大変お手数ですが、ヒヨコを真の軍人とする為に軍人魂を叩きこん
であげてください。」

言っている言葉はかなりきついが先程までの吐き捨てるような冷た
い言い方ではなく、
むしろ優しい口調でワシに保様が命令してくるのだった。

「はっ、この韓文約が二人を董擢様の前に出しても恥ずかしくないよう鍛え上げます。」

保様と司真に絶対の忠誠を誓ったワシだ、忠誠の証としてこの二人を一流の軍人にしてやらないと。

「お前らが子供にやられて悔しいと思うのなら無様な姿を晒そうが這い上がってみせろ、ワシを筆頭に涼州の人間は優しいから貴様らが這い上がってくるつもりがあるならば、お前らが血反吐吐くまで、殺してくれとワシに頼み込むくらい徹底的に鍛え上げてやろう。」

ワシの軍人としての優しさを見せてやったら、まさか周りが冷やかしてくるとは。

「雷が優しいなんて大嘘つき、地獄の鬼だって逃げるにきまってるよ。」

「自称優しい雷に鍛えられるなんて、私ならば今すぐ殺してくれと頼むな。」

琅？に空やかましい、まあ、ワシの優しさは忠誠を誓う保様、司様にだけ向けられるのだから。

今日のこの出来事を悔しいと思うのならこの二人は成長して強くなるだろう、さてどうなるか。

それにしても採用決めたのは和に空、そういった点でこの太守夫婦はよくこの二人を採用したな、
将来の可能性への投資なのか、人を見る目が無いのか、不安だ後者でない事を祈るばかりだ。

ちなみに郭？の真名は【日^り】、李？の真名が【光^{くわん}】、さすがにまあんだけ人前で無様な姿を晒し自分の未熟さを思い知らされたら真名を預けて忠誠を誓うか。

二人は馬鹿だが素直でよかったわい、これでひねくれていたら保様に逆恨みとかしていたな、
まあ保様や司様ならば逆恨みしても100倍返し位でやり返してくるだろうが。

第十六話、涼州の新人はやはり変人？（後書き）

郭？、李？の馬鹿さ加減をどういったものにするか悩んで、キヤラ設定をきちんとせず思い付きでいったら駄目でしたね。

これでは涼州の人間達がなんで二人を採用したのか分からない位、痛いお馬鹿さんになってしまったのが、失敗であります。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第十七話、未来の涼州将とまたも紙芝居？（前書き）

今回は未来の涼州將軍のちびっ子と保達のお話であります。

早く皆を成長させたいものですが、問題はそれがいつになるのかが。

今回も相変わらずの話ですが、皆さん生温かい目で読んでください。

第十七話、未来の涼州将とまたも紙芝居？

- 保 -

今日は月に司、護衛に紅さんを連れて保育園に来ました。

いつものように皆と遊んだり勉強を教えてあげたりしたあとお楽しみ紙芝居となりました。

ただ紙芝居に不安が、今日のは私ではなく司のという点に猛烈に嫌な予感が。

タイトル見る限りは「赤頭巾」となっているから平気でしょう、いや、表紙の絵が原哲夫チックなのが大変バイオレンスな臭いがする。

いつから司はこんな画風を身に付けたのでしょうか？

紙芝居の絵柄ではない点に紅さんが明らかに頬をひきつらせている。

「今日は兄貴の絵じゃないんだな、愛で空が落ちてきそうだ！」

翠ちゃん、なんであなたが北斗の拳のオープニングを知っているんですか？

「いや、それよりもCYBERブルーだろ、ちょうちゃん」

霞、なんで貴女はそんなマニアックな作品を知っている？
北斗の拳が出たら普通そこは花の慶次ではないかい？原哲夫作品の
知名度ならば。

とりあえず往年のジャンプ作品の話は置いておこう、
ちびっこ軍団が楽しみにしている紙芝居をやりましょう。

「おばあさんのお口はどうしてそんなに大きいの？」

絵のタッチが原哲夫作品な以外はここまでは普通にすすんでいるぞ、
司作が不安だが。

この絵柄の狼だと食われたら絶対に赤頭巾ちゃんは助からないと内
心思っているが。

「「「「「あかずきんちゃんはやくきづ(け!)いて」「」「」「」

「それはお前を食べる為だよ」そう叫んだと思ったら、

おばあさんに化けた狼が赤頭巾に襲いかかりました、危うし赤頭巾
!!--」

驚かそうと盛り上げて演じながら読む私

「「「「「あかずきんちゃんにげ(るです)て」「」「」「」

やはりちびっこだからすごい怯え方、皆いいはまり具合である

「いまこそたたかうんだ！」

翠ちゃんに華雄ちゃん二人だけ答えが明らかに違うぞ・・・、お兄さんは不安だ。

部屋を見渡すと護衛の紅さんもこの後どうなってしまう？と興味津々の様子、

前に絵本描いている時にいたから赤頭巾はこんな話って簡単に話したし知っているはずなんだが。

考え事はいいや、ちびっ子たちの為に紙芝居に戻ります。

「隙をつかれた赤頭巾は狼に丸飲みにされてしまいました。」

周りを見渡すと子供達が今にも泣きそうな顔になっている。

「たべられちゃうなんて・・・うるうる」

あー、月はなんでこんなに可愛いんでしょうか。

「常在戦場、油断していた赤頭巾が悪いんだよな兄貴？」

翠ちゃん、私は貴女にどう接すればよいか分かりません。

「てきちゃん、くわれておしまいなんか？」

霞もなんだかんだ言って気になっている模様。

話の続きをはじめ、なんかセリフが明らかにおかしくなってきた、

司の野郎め・・・、とりあえず動揺を隠しながら紙芝居を続ける。

「見たか愚かな人間よ、最後に笑ったのはこの狼様なのだから！
なんなんだこの狼のキャラは。」

「おおかみのくせになまいきだ。」

華雄ちゃんジャイアンじゃないんだから気持ちは分かるが。

「勝ち誇る狼の耳に、それはどうかな最後に笑う狼君？」 謎の音が響きます。」

「「「「「「「「えっ！？」「「「「「「「

今にも泣きそうだったちびっこ達が顔をあげる

ちびっ子たち驚いているが私だって驚いているんだぞ、
なんだこの目茶苦茶な展開は、獬師は出てこないのか？

「誰だ!?」誰もいないはずのおばあさんの家に狼の音が響きま
す。」

もう嫌な予感しかしないよ、この後の展開予想すると。

「みかた……?」

恋ちゃんごめん私にもわからない。

「まだ分からないのか間抜けが!」まさか!?狼が自分のお腹を
見ると、

「外からの攻撃に強いが内側からは弱かったな。」赤頭巾の音が響
きます。」

赤頭巾の台詞が最初の時と全然違うよ、なんなんだこのキャラは。

「僕は最初から分かっていたんだからね、赤頭巾が無事だって。」

さっき驚いていたのは誰?でもそんなところが可愛いぞ詠ちゃん。

「うちがわからこうげきするためだとは、ねねにはもってんだった
のです。」

素直に驚いてくれるのは演じる側としては嬉しいが。

「ズブシュと音がしたと思うと“うがぁー”狼の泣き叫ぶ声が響きます、

狼の体の内側から鋭利な刃物と化した手刀が飛び出してきました。」

いつからこんなに派手に血が飛び散る作品になった赤頭巾は？

紅さんが固まっているよ急展開とあまりのバイオレンスさに。

「やったか!？」

華雄ちゃん、さすがにそれはフラグだ。

「すごい・・・」

確かに凄いな恋ちゃん、絶対に出来る訳無いんだから。

「狼のお腹の裂け目から右手だけでなく全身狼の血にまみれた赤頭巾が遂に姿を表します、

左手には最初に食べられたが無事だったおばあさんを抱き締めながら。」

普通なら婆さんは死体、死体どころかミンチだよな。

「おばあちゃんもぶじだったんだー！」

目をキラキラ輝かせる月、駄目だあまりの可愛さに卒倒しそうです、ただ、こんな凄惨な紙芝居で喜んでいる月に不安もあります。

「食われたんじゃない、わざと貴様の口の中に飛び込んだのさ、お前さんに噛まれないかーか八かの賭けで内心ヒヤヒヤだったかねー」

うん、気にしたら負けだ、キザなヒーローみたいな喋りになっているのは。

「ぜったいにじしんあつたくせにいやみなやつです。」

ねねちゃん、女の子な赤頭巾の口調に疑問は持たないんですか？

「不適に笑いながら言う赤頭巾、絶対に成功させる自信があったのでしょう、

さすがは地獄の戦乙女と呼ばれた伝説の戦士、赤頭巾」

赤頭巾にこんな嫌な二つ名があるなんて初めて知りましたよ、
なんでしようこの飛び具合、頭痛がします話を辞めたい誰か止めて。

「兄貴格好良すぎるぞ赤頭巾の奴、俺もやりてー」

翠ちゃん無理です狼に食べられたら死んじゃいます。

「腹を切り裂かれ息も絶え絶えな狼が命乞いをします、
“助けてくれ、婆さんだって無事だから、俺はもうこんな状態なん
だぞ”」

話の終わりが予想付いたがいかげんにしてくれ、これはいくらな
んでも。

「うわー、いのちごいとはおおかみもなさけないやつちゃうのう。」
霞ちゃんなら突っ込んでくれそうと思ったら、話に引き込まれてい
る。

「赤頭巾やってしまえー」

駄目だ、常識人なはずの詠ちゃんがこれでは完全に手遅れだ。

「命乞いをする狼に対し、赤頭巾は一言、貴様の失敗はただ一つ、」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」

見事にちびっこ達の声が八もった、なんでここでジヨジヨ？
なんでちびっこ軍団は台詞が分かるんだ？と私は叫びたいよ。

「・・・いけ」

恋ちゃんがのっている。

「こうして赤頭巾のオラオラで吹き飛ばされ殺られる狼でした。」

その前に腹切り裂かれた段階で死んでいるんだが、突っ込んだら負けか。

「「「ヤッター！」「」」

ちびっこ軍団大喜び司も作者冥利に尽きるでしょう、

紙芝居を読んでいる私は不満というか色々な意味でお腹一杯です。

「その日の夕方、丘にある小さな墓に話かける赤頭巾その顔は寂しそうでした、

「子豚達よ遅くなったが仇は討ったからな、」

そうです、それは煉瓦の家ごと焼き殺された子豚達の墓だったので。」

私の作った「三匹の子豚〜逆襲の狼〜」と勝手にリンクしている。

子豚の死は悲しいが全て終わって良かったと安心するちびっこ。

「ドシュッ、妙な音が辺りに響きます、グッ、赤頭巾のくぐもった声が、

立ち上がろうとした赤頭巾の胸に一本の矢が突き刺さったのでした。

「『ええっ——！！』」

子供達が10里先にも届かんばかりに驚きの声をあげる、うん、紙芝居を読んでいる私も驚きの声をあげたい。

「胸に矢を受けた赤頭巾、矢が飛んできた木陰を見ると、そこにたたずんでいたのは・・・、はいっ、今日はここまで続きは次回。」

このあと「あかずきんはどうなったおしえろー！」と、翠を中心に霞ちゃん詠ちゃんにまでボコボコにされるとは思わなかった。

幼稚園や小学校低学年にフクロにされるのはおっさんの心へのダメージでかいよ。

一番ダメージが大きかったのは月がポカポカ叩きながら、

「へうつ、おにいたまのいじわる、おにいたまなんかきらいでぶ。」

膝から崩れ落ちたよ月に嫌いなんて言われたら生きていけない。

でも、私はすぐには死ねない、こんなふざけた話を書いた男を！連載物にして月に嫌われる原因を作り出した男を道連れに！

部屋の隅では、ちびっこ軍団に袋叩きにされている私の姿を見て爆笑している司と蒲公英ちゃん

蒲公英ちゃんだけ他にいたのは3歳にして紙芝居よりも、翠ちゃんとかを驚かすドツキリの策を司に聞く方が楽しいようで。

私や司とは違った点で天才になりそうだな蒲公英ちゃんは。

蒲公英ちゃんはまあいい、とりあえず被疑者司を拘束しないと。

「保さん大丈夫ですか〜？」

笑ってやがる、司め。

「司くう〜ん、こんなふざけた作品を作らなければ僕は無事だったんだよ、

なんで完結する話に勝手に続きを作るんだ、新たな刺客まで出して

」

「保さん実はこの先の展開に悩んでいまして、皆には内緒ですよ、赤頭巾の母親率いる新たな敵軍団を出し、死んだはずの狼が赤頭巾の仲間に入るのもいいかなと？」

なんでそんな男塾的な展開なんだ。

「しんだあかずきんにしょっくりな、いもつとがでてくるのもありだとおもつによ。」

蒲公英ちゃん、満足に喋れず舌足らずな3歳の子がそんな駄目なストリーを考えなくていいです。

私は貴女の将来を考えると大変不安になってきます。

「とりあえずお前を殴る、私の怒りを知ってもらおう。」

拳をボキボキ鳴らし司に近づく。

「逆恨みでしょう、大体保さんが紙芝居でゴルゴ13をやるつもりからです、

しかも、ゴルゴの武器はやはり銃だ、って、機密の火縄銃まで作品に出そうとして、

機密をなんだと思っているんですか。」

どうせいずれ分かっちゃうし、今ならまだみんな知らないんだから空想の武器扱いでしょ。

「最初に用意した僕の浦島太郎を没にするからこれになったんですよ。」

「絵にも描けない美しさはモザイクかかるR 18な意味ではない。」

司の描いたのを見た瞬間即破りましたよ、紙がもつたないが。

それにしても浦島太郎なんかやったら、

「絵にも描けないならなんでこれ描けているん？」と霞あたりに言われそうだ。

「とりあえずゴルゴ13は社会人の必読本じゃ〜！」

人類史上最高の作品をなんだと思っているのでしょうか司くんは。

「月ちゃんの教育に良くないと普段は色々五月蠅いくせに、

ゴルゴ13はセックス、殺人なんて一番教育に悪いでしょうかー！」

なんて屁理屈でしょうか、司は至高の作品であるゴルゴを理解出来ないとは。

私は司と戦うべき運命にあったようです、向こうも覚悟を決めたようです。

- 紅 -

今日は董擢様、董卓様、李儒様の護衛として保育園にきたのですが。

ただ、最近韓遂様、馬騰様との調練で引き分ける事もあるお二人に護衛が必要なのでしょうか？

もしかしたら私よりも強いのではないか？と行ってしまいます。

それにしましても董擢様は本当にマメな方です、董君雅様達と一緒に執務を行い、
調練に参加し、色々な物を発明し、紙芝居や本を書き、保育園にも来る。

一体、董擢様はいつ寝ていらっしやるのでしょうか？
子供なのに倒れてしまわないか心配で仕方ないです。

今日は董擢様達の護衛で保育園に行くと最初聞いた時私が小さな子供と一緒になんて大丈夫か？
つい粗相をして泣かせてしまったりとか不安でしたが、それは平気でした。

子供達と仲良く遊んでいるとチリンチリンと音が聞こえてきました、
見てみると董擢様が「紙芝居の時間だよ」と鈴を鳴らしてました。

紙芝居が楽しみで子供達は走って集まっていました。

董擢様の紙芝居どんな話かと、大人ですが私も楽しみにしていました。
た。

この日は「赤頭巾ちゃん」という私も少し知っている話でした。

前に董擢様から大まかに噺を聞いた限りの内容ですが。

おばあさんの家にお見舞いに行く赤頭巾をかぶった可愛い女の子がいて、

おばあさんだと思ったたら実はおばあさんに化けていた狼にと。

そのあとどうなるのかが気になっていたので楽しみです。

「今回の紙芝居は自作ではなく司の作ったのだから不安でしかたない。」

董擢様がそのような事を呟かれていました、どう不安なのでしょう
か？

一目見て分かりました、李儒様の絵は大人顔負けの上手さなんです
が、
子供向けの紙芝居には似合わない物凄い迫力のある力強い絵柄なの
が。

絵を見た馬超様が「愛で空が落ちてきそう」と言われました、
私は、親の事言われると「親は関係ないだろ」とキレる銀行員に思
えました。

絵が力強い以外はお話は普通でたんたんと進んでいましたが、
赤頭巾ちゃんが遂に狼に食べられてしまった辺りからおかしな事に。

飛び散る血飛沫狼のお腹から飛び出た内臓、絵の凄惨さに驚きこころで記憶がなくなりました。

どれくらいだったのでしょうか？私が意識を取り戻すと、紙芝居は終わったのか董卓様や马超様はおやつを食べてました。

ただ、董擢様と李儒様の姿が見えないので辺りを見渡すと、お二人は互いに愛用の武器である方天画戟と鉄扇を構えて向き合っていました。

「殺す！！」

何があつたのでしょうか、とりあえず危険なので止めないと、ただ先程も言いましたがもしかしたら私より強いかもしれない二人をどうすれば？

オヤツに夢中になっていた子供達も二人の鬨いに気付き、董卓様やら皆が危ないからと必死で止めようとしています。

「へっつ、おにいたまあらそいはいけません」

「何やってんのよ、二人共止めなさい！」

「ばかなのです、どうせくだらぬりゆうなんですからやめるのですつ。」

董卓様、賈？様、陳宮様皆の言う通りです、危ないからやめるべき

です。

「兄貴、軍師に負けたら恥ずかしいから勝てよ」

「つかさおにいさま、さくしのすごさをみせてみてっー」

「なあ、かゆうよ、どっちがかつかかけへんか？」

「ぐもんだな、いつものようにさいごはあいうちでおわりだな。」

「みんなたべないからおやついっぱい」

訂正します、勝負を止めないどころか余興にしている人が大半です。

ガキーン、ドガン、グシャ、ドゴツ、子供の喧嘩の音ではありません。

「くたばれ、このボケー！」

「死ぬのはお前だ！」

明らかに台詞が喧嘩どころではないです私の実力では相討ちがいいところですよ。

天国のお母さん、私、紅はとても無力です、どうすればいいんですか！？

どうすればと途方にくれていると張遼ちゃんと華雄ちゃん、呂布ちゃんがやって来ました。

「しょうぶにみずさすのはぶすいやけどしかたない、いくでかゆう、れん。」

「「「おかあさーん……おかあさん」」」

お母さん？最初誰の事かわかりませんでした。

ニコニコした丁原さんが奥の部屋からやって来ました、

丁原さんは見た目からして強くなさそうですが大丈夫なのでしょう
か？

人は見た目によらないと言います、実際董擢様も李儒様見た目は子供です。

戦いはどうなっているか見ると、李儒様が董擢様に馬乗り鉄扇で滅多打ちに、
死にますよアレは、なのに「撫でているのかきかねーよ」董擢様は人間ですか？

私の気のせいでしょうか、普通なら争っている二人は血まみれの大怪我なはずですが、
傷口がどんどん塞がっていつているように見えるのが、お二人は人外ですか？

そんな人外、もといお二人の前に丁原様が現れました。

不思議と二人の争いがピタリと止まりました、丁原様はどれほど強いのでしょうか？

アレ？地面にペタンと座った丁原様がホロリと泣きました、それだけです、何も言わず、ただ涙を溢しただけです、ですが場の空気が変わりました。

先程まで争っていた董擢様と李儒様が揃って土下座したり必死で泣き止むよう頼んだり、なんなのでしょうか涙一粒だけでこのようになるのですか？

涙一つで圧勝なんて、今まで武を磨くとかやってきた私の人生に意味はあったのでしょうか。

涼州はなんでこんなに常識が通用しない土地なのでしょうか、私は勤め先を間違えたのでしょうか？

淳于瓊の悩みは続く。

第十七話、未来の涼州将とまたも紙芝居？（後書き）

駄目だ司の描くどうしようもない童話ばかり思いついてしまつのが、
保達の訓練とか書くべき話があるのに、駄目ですねえ。

それにしても淳于瓊さんが没個性な割に使いやすい、
その分キャラかぶりで空が消えてしまいそうですが。

思い付きで話を書いているから初期キャラがどんどん消えていきそ
う、不安だ。

第十八話、忘れられていた馬、そして二人の任務って？（前書き）

今さらながらドラマの三国志を見ていますが、見ながら恋姫は失敗でした。

小汚いおっさんの袁術に慣れてしまい美羽に愛着が持てない、美羽好きだったが。

華雄の戦いが敵将を宙に舞ませ最後は構えておいた偃月刀で串刺し、なんて魅せる戦い、でも殺られる時もお約束の関羽に瞬殺と魅せってしまうのが。

悲しいですよ華雄さん好きとしてはこの話での華雄さんは、まあ・・
・頑張ってもらいますか。

それにしても一番違うはずの貂蝉に違和感を感じないのは何故でしょうか？

さて、雑談はさておき今日もまた初っぱなからふざけた話です、皆さんどうぞ。

第十八話、忘れられていた馬、そして二人の任務って？

保

テンテンテンテンテテンテレレレレレレ

「いらっしやいませー」

店内に入って面喰った、此処は本当に三国志の時代なのか・・・？

前回（第十話）“あの曲が流れたら此処はフア マダ”と言ったが、あの曲が遂に流れはじめたよ、なんだ私が疲れているのか？妖術なのか？

此処は涼州にある武器屋なはずなのに完全に現代社会のコンビニだよ、

お会計の所で一番クジらしきものまでやりはじめているし。

いくら外史だとはいえ大丈夫なのかこの三国志世界はフリーダム過ぎるぞ！？

まあ、一番クジの商品が名馬だとか鎧だとか辛うじて三国志的要素があるのだが。

店内をきよろきよろと見渡していると『おおっ、久しぶり』と声かけられた。

神出てきたよ、ちょっと待て！！なんでそんなコンビニの制服っぽ

い物を着ているんだ？

この間まで仙人服と呼べばいいのか如何にも神様って格好だったのに。

見た目が禿げ上がった頭、額に深く刻まれたシワ、張りを無くした年寄りの皮膚、

それに胸くらいまで延びている長い真っ白な髭、手にはゴツゴツした杖を持っている。

見た目が完全に神だよな、なんで勝手に衣替えしてコンビニのユニフォームみたいなの！？

神な見た目な顔で神っぽくない服装していいのは亀仙人だけだろ。

『やはりお客さんとしてはワシが店の人間と分かりやすいじゃろ、あと商品陳列とかで汚れにくいし。』

ふ、普通の答えだよ・・・、いや、ぶっ飛んだ答えを求めてはいないよ、

だって、神なんてのがいて、コンビニ？経営している段階で既にぶっ飛んでいるんだから。

それにしても普通に心を読むな！！！！普段神との会話が念波だからとはいえ。

『おおっ、それはすまんのお、つい聞こえてしまっからな。』

だからそれをやめろと！！！！

『ちなみに制服を着るようになったのは指導員が巡回に来た際に怒られて、

店長として店に立つのならばちゃんと制服を着ると。』

指導員！！！？？？完全にコンビニのシステムやん。

「もしかしてフランチャイズ制で他にも店舗があったりして。」

『おや、知らんのか知っていると聞いたぞ？多店舗展開するにはチェーンよりFC制だろうと、

とはいえ、まだまだ規模は小さく、長安、洛陽、陳留、建業とかまだ都市部だけじゃが、

まあいずれそのうちこの店も大陸全土に出来るぞ。』

はじめて知った驚愕の事実ですよ。

実に嫌すぎる光景だ、このままだと三国志の時代の中国なのに、扱っているのが武器だとはいえ、

どんな地方に行こうがこのなんちゃってコンビニだらけなんて事がありえるのか。

『文句があるならお前さんの横にいる社長に言ってくれるか。』

だから心を読むな！あと、犯人は司なのね、OK、あとでぶっ飛ばしておく。

「いやさ、前にはじめて来た時に店に活気がないから、その後、店に来る度にやり方教えていたんだ、

ならば、いつそ親会社を涼州にして運営しては？ということになつてね。」

司君、大事なことは皆に相談しようよ、なに州の金でコンビニ経営をやっているの？

頭がクラクラしてきた、とはいえ、コンビニの話をこころでしていても仕方ないので、

私達が神に呼び出された理由を聞くことにしよう。

『では、話が長くなっていいように裏に行こうかの。』神の後をついていく。

バックヤードに行く為の入り口をくぐると、いつものあの真っ白い部屋に、

ただ、いつもと違うのはテーブルに椅子、そしてコーヒーとケーキが用意されている。

「今回わざわざ私達を呼んだのは如何様で？」と私が話を進めようとすると、

『お前さんには久しぶりだろう、まずはケーキとお茶を楽しむといい。』

「お茶と言うがコーヒーだけだな。」

司君細かいよ突っ込みが、貴方は相変わらず神を相手にするときは口調が荒くなるな、

神の出番があるとその分、貴方の大好きな母親薊さんの出番が無く

なるからとはいえ。

私は司ほど神には恨みが無いのでこちらに来てからはじめてのコーヒー、

12年ぶりのコーヒーをゆっくりと味わうとしましょう、うん、実に美味しい。

そういえば、転生する時に成長限界突破するから頑張れば知はヤン・ウェンリーに勝てる、
と言われたな、それはまあいいんだ、ヤン・ウェンリーで思い出しただけの事なんだが。

彼は優秀だがコーヒーの良さを理解しなかったのが勿体無い、
私みたいに紅茶もコーヒーもたしなめばいいのに、まあどうでもいいことだが。

さて、コーヒーの香りと味で鼻と舌をしっかりと癒されたし、肝心
要な話を始める。

「久しぶりにコーヒーを楽しませてくれる為に呼び出した？」

「なわけないよな、保さんはコーヒー党だが僕は抹茶派だし、呼ぶ
なら抹茶を出すでしょ。」

司君それはギャグで言っているんだよね？まさか本気で言っている
のかい？

私よりもはるかに優秀なのに、たまに君が頭が良いのか悪いのか分
からなくなるよ。

そんなどうでもいい事を思っていると神が怒って叫び出した。

『いい加減馬を手に入れろ〜!!』

横にいる司の顔を見ると向こうもこっちを見ていた、目線が合う、お互いに忘れていたぜよ、

おおう、神が転生の時に私達に馬をくれると言っていたんだっとな・
・・。

『ワシの設定ではお前さんが羌族の領地に挨拶しに行くとな族長がお前の為にと、

この前の歓待の感謝で馬貰えるようにしておいたのに、一向に行かないんだから。』

神、神、神さんよお〜、駄目だろ私とかに話さずに隠しておくべきだろ裏設定は、

カジノでディーラーが勝たせてくれるとかしないやろ、それくらいあり得んぞ。

「気持ち嬉しい、ありがたい、本当に感謝している、転生して三
国志の時代を楽しめているし、
これだけでも満足なのに徹底的に優遇してくれるのはありがたい、
でも、仕方ないでしょうが!!」

私の発言に続いて司も神に答える。

「僕だって色々行ったりしたいんですがあの過保護な親が行かせて

くれると思いますか？」

『・・・・・・・・・・』

神黙つちやったよ、神が両親の性格をいじっていくれていてもよかつたんだよ、

過保護過ぎて私達心配されすぎて遠くに二人で行けるような自由がないですから。

あり得ない存在ですよ私達の親、神を黙らす息子への溺愛、それを二人共持つているんですから。

どうするかねえ、まいったねえ、母上にロボットミーするわけにはいかないしねえ、

それに、この世界での大事な母上にそんなふざけた事出来ませんし、させませんし。

さて、どうするか悩むもんだねえ。

・司・

母さんの出番を奪う憎き神、最近は店長と呼ぶようにしているが、それはどうだっついていい。

まあ僕もムカつくとか色々言ったりしていますが保さんと同じで神に感謝しているんですよ、

それなりどころではない物凄い優遇をしてもらっているんですよ。

それに僕は先程抹茶でないのかよと言いましたが、コーヒーでも私の好きなキリマンジャロですよ、
こういう心遣いは嬉しいですよ、ただ僕にコーヒーを出すならやはり抹茶にしてください。

まあ、僕の抹茶好きな話は置いておきましょう。

前に神が言っていた、ごっつい馬をくれる話ですが貰えるのならば是非欲しいですよ、

まあ、馬どころか望めばV-22オスプレイだろうがなんでも貰えますが。

ですが、この時代にそこまでふざけたものは欲しくくないですよ、それにへりにしろ飛行機にしろ操縦した事が無いのでオスプレイなんか貰っても困りますから。

馬の話に戻しましょう、転生直前に神が言っていた原哲夫作品の馬を、

というのは大変面白そうです、ただ、不安もあります、貰っても乗りこなせるかどうか。

うーん、でも黒王号にしろ松風にしろ欲しいですよ、なんとか乗りこなして愛馬にしてみたいです。

見た目だけで周りは逃げ出しかねない巨体と威圧感を持っている点。

更に、馬鹿みたいに強いですから、もしかしたらあの馬はそこいらの武将より強いかも？

『強さは・・・、まあそうじゃの、三国志ならば関羽に敵つか敵わないくらいだ。』

「ブツ!!!」

あまりの驚きに保さんと揃ってコーヒーを吹き出す。

神、それはやり過ぎにも程があるぞ馬だけで軍神とやりあえるってどんな強さだと!?

そうなるとあの馬に勝てるのは呂布しかいなくなるような?

そんな馬を乗りこなせるように出来るのか、不安だ・・・。

話が少し変わりますが、先程名前が挙がった呂布ですが、いま保育園にいて、

保さんや月ちゃんに懐いています、涼州は将来の大陸一の武力を押しさえているんですよ。

それに、僕や保さんは成長限界突破というアビリティがありいずれは範馬勇次郎越えの強さです、
原哲夫の馬に乗って、実力が最大で範馬勇次郎を超える生き物が二人いることになる、涼州は。

涼州は将来ですが、大陸最強の上位三名おさえてしまった?

そうなければかなりの無茶が出来るでしょうねえ、歴史では董卓に対抗するため十八鎮諸侯が集まり、中国史特有の水増しだろぅが40万という大軍団を集め洛陽に向けて攻めてきますが、
董家は史実みたいにしないでも真っ向から戦っても圧勝しそうですよこのままいけば。

実際涼州の騎馬部隊とか錬度、武装、戦術とか全てが他国と比べてチートクラスなのですから。

武將は将来有望な大陸最強の三人、さらに霞ちゃん、翠ちゃんもいる。

現役組ならば琅？さん、雷さん、見習い組の紅さんに、日、光の馬鹿二人もいる。

兵数も常備軍だけで今の段階で6万、余力はまだまだあり10万でも余裕でいけます、
さらに徴兵もしたらどれほどの数になるやら？望めば異民族も派兵に協力してくるでしょう。

更に保さんと作り上げた大陸中に散らばらせ広げている商売人と細作の網で、
市場価格を常にチェックし兵糧や鉄などの転売でかなり稼がせてもらっています。

おかげで他国は戦争をしなくなっても準備に相当苦勞するでしょう、その間こちらは一方的に殴り続ける事が出来ると。

「アレツ、これって詰んでない!？」なんて漫画とかの台詞であります、
今の段階でそれは涼州以外の国が「これって詰んでない!？」と言
うでしょう。

そんな状態ですから、馬鹿な靈帝に、玉無し、妹におんぶでダツコ
な肉屋の馬鹿、
明日にも洛陽に進軍すれば今言った馬鹿一同みんな仲良く晒し首に
してあげられるかと。

とりあえず、こういう事を深く考えるのはやめましょう、まともな
思考ではない、
勝てそう、と、勝てる、と、勝つ、では意味が全く違うのですから。
それにしても私の発想が明らかに悪なのが、神の目の前で神の代理
人に近い僕が陰謀を企むのは。

この戦乱の時代をどうにかしろと言つのが神の指示だったのですし、
陰謀は控えましょう。

『今日呼んだ本当の理由は馬の件ではなく、今、司が考えている事
に関してなんじゃ。』

神が口を開いた。

とりあえず保さんではないが、勝手に心を読むなよ!?

保

『今日呼んだ本当の理由は馬の件ではなく、今、司が考えている事に関してなんじゃ。』

何の事だろうか？たぶん司が黒い笑みを浮かべていたから陰謀についてなんだろうが。

とりあえず分からない事は素直に聞く事にしましょう。

「どういったことでしょうか？」

『ワシがお前達を転生させる時にこの世界が大変な事になっていると伝えたじゃろ、

その件に関してお前さんらに協力を頼みたいと思ってな。』

その後聞いた限りでは神の代理人として混乱した世をおさめると。

『そうなんじゃ、この世を安定させるといふのは間違っではないんだが、

たぶん想像している事とはかなり違うのじゃ。』

どういうことだ？

『この大陸の戦乱を治めるだけだったらお前さん方は必要ないんじゃない、英雄がいるから。』

此処までは言わんとしている事が良く分かる。

「性別や性格とかが反転していたりしているIFの世界だとはいえ、やはりそこは三国志、今はまだだが後々劉備や曹操といった英雄が出て来るから安定は築けるという事ですか？」

『そうなんだ、問題はこの外史事態がなんじゃ。』

とりあえず私も司も黙って神の話を聞いてみようとなる。

『正史に対してこんな世界があつたらという願望から誕生するIFの世界が外史なんじゃが、時として皆の願望とかに関係無く偶然誕生してしまう外史があるんじゃない、こここの事なんじゃが。』

『外史は願望の具現であるが、此処は望まれて出来た訳でなく、存在が非常に不安定なんじゃ、だから此処が存在するという認識が弱いとこのまま消えさつてしまふ、この世界の生き物には悪いが。』

「テレビの視聴率みたいだな。」

その例えはどうかなあ？司君よ。

『あながち間違っていない、だからこの世界を安定させる為に正史と違う特色を出さないと。』

「私達がこの世界に送り込まれたのは、既存の三国志をひっくり返

し目茶苦茶にする為と。」

なんか昔のプロレスの軍団抗争みたいだな言っている事が。

『そうじゃな普通にそのままではいつ消えるか分からないと不安定ならば、

劇薬だが徹底的にこの外史をかき回すお前さん達のような存在が必要じゃと思つてな。』

なるほど司の企む陰謀と関係しているというのもあながち間違っちゃいないな。

司はどうせ乱れる世の中ならばいつそのこと早い段階で黄巾党、何進や十常侍の争いを起こさせ、

または漢王朝やそれに準ずるだけの無能な諸候を早急に潰す事を計画したりしている。

一時的な混乱はでかいだろうがその方が大陸への被害を少なく出来るからという大義名分で、

とはいえ正史を知っている人間、維持しようとする人間がいたら、真っ先に狙われるだろうな。

まあ、私も司も実のところ大陸の平和の為なんかではなく、自分が面白いかどうか、

あとは自分の周りにいる人間の命を守る為だけのエゴイストでしかないのだから。

傍から見れば場をかき回すだけの台風みたいな、そう、テロリスト

にすぎないんですから。

「私達みたいなふざけた人間のやる世を乱す行為が、皮肉な事に外史の存在価値を高め、この外史に住む人間の命を守る事になるとは実に皮肉で面白いじゃないか。」

私はやはり狂っているんだろう、こんな事を普通に思いニヤリと笑っているのだから。

「本来は暴君に天罰を下す存在の神が、好き勝手暴れまわっていると錦の御旗をくれるんですから、こんなありがたい申し出はないですよね保さん、是非かき回してやりましょう。」

司も笑っている、お互い少しどころかかなりオツムのネジが外れているな。

「司なんか、錦の御旗なんか無くても常に面白いと思えば喜んで場をかき乱す人間だけだな。」

私の言葉にそれは心外だという表情を見せ苦笑している司、そんな二人を見ている神

『すまない、嫌な役回りをさせてしまって、危険で人から恨まれる事でもあるのに。』

神に頭を下げられるようなことではないんだがな、とはいえ凄いな

神が頭を下げて来るんだから。

既に私達はこの段階で、洛陽にいる天使とか呼ばれているお飾り皇帝よりも遙かに上の存在だな、まあ、皇帝の地位なんか興味無いし、だからどうしたところではあります。

それにこんな事言ったら気がふれていると言われるか、まあその前に不敬罪だと処刑されるか。

「今も好き勝手やっているんですから構いませんよ、歴史を無視している、

波乱万丈な人生に自分から飛びこめるこれほど幸せな人間なんかいないんじゃないんですか。」

「おもしろき こともなき世を おもしろく、 ですよね保さん。」

あの世の高杉晋作が聞いたら蘇って怒鳴りつけてくるぞ司君。

『とりあえず、この外史はお前さん達のおかげで今の段階でも当初に比べかなり安定している、今のままでいけば近いうちに、それでも何年もかかるだろうが完全に固定されるじやろう。』

「では固定されたら教えてください、ただ言っておきますが外史が固定されたからといって、

私達二人が急に真人間になれるわけないですから、死んでも無理だよな、特に司君は。」

「暴走した時の保さんの方がはるかに危険ですよ。」

とりあえず普段と同じように馬鹿話をする事で世界の平和を守る事を知るとは、

もう少ししたら司と話し合って、色々やらかしてみるか涼州の為に。

まずはなんだ静かに徐々にだが近隣州を切り落としていくとかか、楽しみだ、どう遊ぼうか。

『あつ、お前らに最後に頼みごとが、特に用無くてもいいから店に来てくれ、

お前さん達は何をするか分からないという点で他の人間と違って面白いからな。』

宇宙で一番偉いというか、この世界を作った神が完全に友達になっているな、

こんな狂った世界を楽しめるなんて死んで転生するのも悪くないな、うん、じつにいい。

「保さんは知らないが、また店の経営状態チェックでいくから待っているよジジイ。」

司も心底楽しんでいるな、さあ、これから更に好き勝手暴れまわりましょうか。

第十八話、忘れられていた馬、そして二人の任務って？（後書き）

恋姫世界をかき回す存在である二人に、更に自由に動けるようにさせてみました、フリーダム過ぎてどうなるか作者の私もこの後どうすればと。

後々なんでこんな展開にしてみましたんだ俺は！？と猛烈に後悔しています。

いつもいつもこんな馬鹿な話ばかりですが、皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十九話、嵐を避けられるのか？（前書き）

この話とは全く関係ないのですが今日は夕方から取引先のパーティーでした。

会場にいた人でずっと無口で、口を開いてもボソツと用件しか喋らず、

黙々と山のようにご飯を食べ続けている人がいた。

恋転生したのかよ！？と突っ込みたかったが、問題はその人が50近いおっさんでったのが。

多分、ここ最近の仕事の忙しさで疲れているんだなと思いましたよ。

話に全く関係ない雑談ですいません、さて、今日はどうなりますか。

第十九話、嵐を避けられるのか？

保

あつ、どうも皆さん、007ならば殺しのライセンス保有者みたい
に、
神から好き勝手やっていいよとお墨付き貰った董擢こと保です。

今日は涼州の外れに来ていますが、何もありません。

テレビもねえラジオもねえ、あの歌よりも何もありません、
車が若干でもあつたら怖いですが。

いるのは羌族の皆さん方にあとは馬やら家畜、涼州から来た我々が
いるくらい。

何故そんな場所にいるのかと申しますと羌族から招待を受けたから
であります。

招待を受けたのならばと涼州も羌族を大事にしているというアピー
ルのために、
太守である母上は無理ですが父上、琅？さん、雷さん、薊さん司の
親子、紅さん、私、
といった恐ろしく豪華な涼州の主力メンバーで行って来ましたよ。

羌族の皆さんから普段の取引や友好関係、そして族長達が城に来た時受けた歓待の礼をと、
族長さんが特に私にお礼がしたいと大変貴重な牛を漬してまで出してくれたことへと。

「何が貰えるんでしょうねえ族長自ら渡そうとするくらいですから楽しみですね保様」

とか、紅さんやら皆族長のプレゼントが気になっているようで。

「そ、そうですね、どのような物を用意していただけるのかと。」「引き攣りながら返事します。」

羌族の皆ごめんなさい貴方方の用意したサプライズプレゼントの正体を知ってます、
しかも、私だけでなく司君も、私の手元に来るように神が準備した馬なんですから。

羌族の皆さんとても良い人なんだろうなあ？驚かせようと頑張っているんだよ。

本当にごめんなさい、としか言えないですよ、答えを知っています。

まあそんな事を思ったりしているうちに時がたち夜になり宴席にな

りました。

私は太守の息子な為見た目12歳のガキンチョな私もかなり良い席に案内されました、問題は私の横にチヨコンと座らされたこちらの可愛らしい女の子はなんででしょうか？

族長が満面の笑みで「自慢の娘なんだが董擢様の妻として」私のお嫁さんにですか、

族長第十五話で懲りてな・・・、なんて嬉しいサプライズプレゼント、
ト、
ごめん、このサプライズプレゼントは予想していませんでした。

馬じゃないとは、神大丈夫なのかあっさり期待を裏切られて。

まずいです、今回は母上は来ていませんが、琅？さんと薊さんがいます。

琅？さんは翠ちゃんを僕に、蒲公英ちゃんを司にと企んでいるんですから、

これは危険です、前回族長に順番があるだと切れるような人です。

母上の私LOVEぶり、薊さんの司LOVEぶりとはまた違った危険さがあります。

それにしても翠ちゃんは私なんかには押し付けようとしなくても、今のまま成長すれば

将来結婚相手に困らない位美人さんになるの確実な可愛い女の子な

んですから。

とりあえず前回と違い母上はいいませんが、このまま結婚の話になると大惨事でしょう。

琅？さんキレる薊さんに飛び火、大惨事この流れだけは防がないといけません、

全力でなんとかしないといいけません、あと族長でも当人の意思を無視するのも駄目です。

ただ“お前の娘なんかいらぬ”なんて言ったりしたら、今度は羌族側がキレます。

父上、雷さんとか涼州組は大丈夫か？と不安な顔を司君だけは楽しそうな顔をしています。

司君貴方も蒲公英ちゃんがいるから他人事では済まされなんでしょう。

流血沙汰を防ぐ為にも舌先三寸でなんとか乗り越えられるように努力しましょう。

舌先三寸といえは昔、会社で部下の子に言われました

「課長は息を吐く様に嘘をつきますね。」

営業熱心でちょっとオーバーな表現をしてみると言ってほしかったなと

思いましたよ。

まあ私の知り合いの社長は部下と取引先へプレゼンに行った帰りのタクシー内で、

「社長は嘘つき病です今すぐ病院に行ってください」と部下に言われたそうで。

そこまで部下に言わせるとは何があったのでしょうかねえ？
聞いた話では仕事とるために納期で相当無理をしたようで。

まあ、嘘つきだとかの話は置いておいて今そこにある危機に対処しましょう。

「羌族の皆様は普段から私達涼州の人間は感謝しきれないほどお世話になってます、
それなのにこのような豪華な宴席に招いていただけるとは誠にありがとうございます。」

お世話と言ってますが持ちつ持たれつな取引の関係ですがへりくだっておきましょう。

更に挨拶を続けます。

「そして更に族長の自慢の娘さんを私のような未熟者にという話をいただけるとは、
これほど厚遇していただけるとは涼州の人間はどうやって羌族の皆様
様に恩返しをすれば。」

遠回しな表現でやんわり断っておきましょう。

族長とか羌族の皆さんはどうやら話が変な流れに進んでいる事に驚いているようです。

驚くのも無理もありません、母上が進めている異民族融和政策で一番簡単で確実な手段は、
家族にする事ですから、それを断ろうとしているのが融和推進者の一族では驚くでしょう。

「もしここで娘さんを私の妻に、となりますと涼州の者は諸手を挙げて賛成してくれるでしょうが、
我々を知らぬ他州の口さがない人間達は族長は保身の為娘を人質として売った等と嘲るでしょう。」

彼らのプライドを守るためという形になるよう話をすすみましょう。

そんな事態になっていなIFの話だが、私の例えでその様子を想像し、

羌族の皆さんの表情に怒りが灯りはじめている。

実際漢王朝の人間達に異民族だからと蔑まれてきた屈辱の歴史があるのですから。

「誇り高き羌族の皆様が愚か者に馬鹿にされても平和の為に怒りを堪えるのは辛いでしよう！」

そして、私は羌族の皆様以上に羌族の皆様への侮辱に耐える事が出

来ないです!!

その愚か者共を皆捕らえ首を叩き落とし門前に並べても決して気は晴れないでしょう。」

皆驚いています子供である私が此処まで激しく羌族の為に怒りるので、

ここまでの言葉を吐き出すとは思わなかったでしょうとどめを刺しにいきましょう。

「何故ならば親を家族を侮辱されて許せますか!? 私にとって羌族とは友人であります、
そして、それ以上に父であり母であるのですから。」

中国ではお前の息子や孫だとか言うのは相手への最大の侮辱になるから、

気をつけないといけない表現ですがあえて言ってみました。

「娘さんの話を断っておいて、更に恥知らずな事をお願いさせていただけたいのですが、
ただ一つだけ、父上と呼ばさせていただけませんか?」

ここで土下座をしてみました、やりすぎたかもしれません、いや実際やり過ぎでしょう、

実の父親の目の前で勝手に異民族の族長を父と呼ばせてくれとか言ってるんですから。

族長とか皆さん感激しているようです、涼州の人間はポカンとしております、

司君だけは“上手く逃げ切ったなあ野郎”という顔でニヤニヤしていました。

上手くいったのは良いですが、この時代の人は皆ピユアですよ、もう少し、人を疑う事を覚えましょう、騙した私が言うのもなんですが。

とりあえず逃げ切りに成功したようです、羌族の皆さんが笑顔で私の所に集まってきました。

私の知っている正史では羌族は漢に従うようになった後も何度も刃向ったりでしたが、これで更に結びつきは強くなったでしょう、漢ではなくあくまでも涼州であり私にですが。

無事に宴会は終わりました、これで琅？さんとかがキレルシナリオは回避できたなど。

問題は涼州に帰った後に、今日の私の発言が母上に怒られないかがとてもとても不安です。

まあ後の恐怖は後に考えるとしましょう。

翌日族長が「お前は私の自慢の息子なのだから何処に乗っていても恥ずかしくない

汗血馬にも負けられない羌族自慢の馬を乗るようしないといけない」と、見に行つてきました。

「この馬“達”は羌の人間の誰にも懐かなかつたがお前なら出来るだろう。」と案内されました。

達つて複数いるんですか？神が私達二人の分の馬を用意してあると言つていましたが、まさか羌族の皆は司の分もくれると言つのでしょうか？

私の分は分かるが羌族に司はあまり関係ないんだが。

一応、司は私と杯交した義兄弟と教えてあるので、兄貴だけでなく弟の分もという事でしょう。

それにしましてもどれ程凄い馬なのか分かりますが、羌族の人間の誰にも懐かなかつたって、ある意味“人に懐かない厄介な馬をよこしたの？”と勘繰つてしまいますよその台詞では。

着いた先にいましたよ馬が、いや、馬！？という感じです。

馬の概念に収まらない巨大な生き物が。

普通の馬がポニーそれどころか世界最小の馬アラベラに見えてしまふ馬が二頭もいる。

あまりののでかさに見て驚いてフリーズしている常識人グループである父上や紅さん、
琅？さんや雷さんといった馬に慣れている人間もなんか引き攣った顔をしている。

私と司が近付いてみる「危ないです」おっ、紅さんがフリーズから復活して叫んでいる、
いや、馬のそばでいきなり大きい声出したりする方が危ないのに、臆病な生き物なんだから。

私と司が近付いたら何も言わず屈んで、背中に乗れと態度で示してくれ、
だから跨ってみましたよ。

私達が跨ったと思うとスツと立ち上がりドドドドつと走りだししました、
試し乗りをしてくれたんでしょう、感動しました、それ以上に死ぬかと思いました。

ラオウさまや前田慶次はこんな物に乗っていたんですか、阿呆ですよ。

ちなみに彼らに乗るのは簡単だったがその後が大変でしたよ。

鞍も鐙も付けていない状態で黒王や松風に全力疾走されるんですから、

私も司も何度舌を噛み切りかけ、股間から破滅の音が聞こえたことか？

危うく何もしていないのにナチュラルで宦官の仲間入りする所でしたよ、

嫌やー、まだ此方の世界に来てから全く使っていないのにおさらばするなんて、

まあ、おさらばしないで済みましたが。

「玉が潰れて駄目になっても将来子供が駄目になるだけやん。」

司君そんな冷静な答えはいらないよ、君だって危うく砕けかかっていたんだから。

「あの馬達を乗りこなし無事だったとは!？」

族長――！！！！！！なんだ、その発言は！そんな危ない物を渡すな！

昨日まで自慢の娘を与えて引きこもった人間になんて馬を渡そうとするんだ！！

まあ、元が神のプレゼントではあるんだが。

遂に族長までもが私達のようなギャグの世界側に足を踏み入れてしまうとは。

とりあえず、こんな風にでしたがなんとか念願の馬を手に入れましたよ。

ちなみに黒王号や松風は流石にそのまんますぎてまずいのではない、

中国の伝説の馬から名前取ろうと穆王八駿から。

私が光より速く走れた「踰輝ゆき」司が翼ある馬「挟翼きょうよく」と名付けました。

私達二人のチート化がこれで更に加速しました、大丈夫か三国志の世界？と不安になります。

とりあえず司君は長物武器を手に入れてもらわないとそうではなくても武器が鉄扇と、
リーチがまったく無いのにこんなばかどかい馬に乗ってどうやって戦うつもりなんでしょうか？

此処から余談、

隴西の城に戻る最中にためしにと父上も踰輝に跨らせてあげました、まさか乗った瞬間に振り落とされ鎧に足がハマったまま落馬したために、
引き摺られ続け城まで赤い線が延々と続いていました。

ちなみに母上はさすが沈着冷静の董君雅と呼ばれるだけあり、
見ても「あら大きいのね」

うーん実は母上は沈着冷静ではなく感情の一部が欠損しているの
は？と悩んでしまいました。

あと、関羽とやりあえるという神の言葉通りだけあり、今の涼州で
の武力比較をすると

キレた和〓キレた薊<琅？ 踰輝〓挟翼<雷 保〓司<紅

紅さんが「馬に負けた、馬に負けた、馬に負けた」と死んだ目をし
て呟いていたとかいないとか。

更に余談ですが涼州最強は一粒の涙でどんな争いも鎮圧できる丁原
さんという事で意見は一致しておりますが。

更に更に余談、私達が帰る際に族長が「なんとでもうちの子の婿
に」と呟いていたとかいないとか。

第十九話、嵐を避けられるのか？（後書き）

ご都合主義にも程がある感じですが、やっと主人公達がチート化第一弾でした。

それにしても普通人である紅さんが普通である分かなり使いやす
いとは、
キャラ設定していた時は思いもよませんでした、・・・お恥ずかし
い限りで。

皆さんのご意見ご感想をお待ちしております。

第二十話、いつのまにやらラブ空間に？（前書き）

どうしてこうなった、どうしてこうなった、気づいたらこんな話になっていた。

淳于瓊さんがこんなに出番が増えるようになるとは思わなかった、この話を書いている作者が言うのもなんですが、どうしてこうなったのだろう。

あっ、ちなみに時間は更にキンクリして保達は今14歳です。

第二十話、いつのまにやらラフ空間に？

- 紅 -

「ひまだああああ〜！！！！！！」

李儒様がいきなり叫び出す、何を言っているのでしょうか？

つい先程朝議が終わったばかりでまだまだ執務が控えているのにですよ、

涼州の政治を司る李儒様が暇なわけないのですから皆書簡の山の処理なのですから。

だと思っていたのですが。

「分かる分かるぞ司さんよ〜！！」

分かる人が出てきてしまいましたよ、しかも董擢様ですよ。

董擢様も李儒様と同じく涼州の指導者ですよ、何処が暇なんですか！？

つい董擢様と李儒様をにらんでしまいましたよ。

「紅さん、こちらを見詰めていますかどうかされましたか？」

美人に見詰められると恥ずかしいので照れてしまつんですが。」

いきなり何を言うのでしょうか李儒様は。

「な、な、何を言っているんですか李儒様は、わ、わ、わ、私がびびびび美人だなんて！」

び、び、美人というのは董君雅様みたいな方を言うのであって。」

私なんか美人なわけないんですから。

「紅さん、そこまで動揺しないで惚れた司に誉められたからとはいえ照れちゃって。」

と、と、董擢様まで何を言ってるんですか！董擢様といい李儒様といい、

こうやって私をからかって遊んでくるんですから困ってしまいます。

私より年下の子供なのにわざとドキッとすることをする事を言ってくるんですから。

最近の李儒様は、2年前に比べ背も延びてきて私とかわらない位になられて、

空いた時間を作っては調練に参加されているので日に日にたくましくなってきたいて。

茶色がかった肩まで伸びた美しい直毛、浅黒い肌に漆黒の瞳、彫りの深い顔立ち、

年相応に子供っぽく笑っていたかと思うと、時おり見せるやけに大

人じみた横顔が。

李儒様は軍師であり戦場に出る事になっても後衛で武を振るわないでいいはずですが、

李儒様にしか懐かない凶暴な巨馬挟翼を乗りこなし、最近の調練では、

涼州最強の琅？様とほぼ互角に戦える程の武の実力を見せつけたり。

そんな李儒様の姿を見ると胸が苦しくなる事があるんです。

って、ええい、私は何を考えているんですか、落ち着きなさい私。

李儒様は上司李肅様のご子息で単なる同僚で、年下の子供でしかないんだから。

「最近の李儒様は格好良いし、好きかと言ったら好きかな？と・・・」

はっ！！！！私は無意識にとんでもない事を口に出してしまっていた。

こんな事を聞かされても李儒様は迷惑でしょう、ううん、

迷惑とかでなくまた困惑している私を見てニヤツと笑っているはずです。

はっはっ恥ずかしい、どうすればいいんでしょうか、

そう、これは気のせい、そう、気のせいに違いないんです！！

どうもここ最近の仕事がパターン化していて落款押しマシンになれば、

すぐに済んでしまうような仕事ばかりで、ついストレスがたまって叫んでしまいましたよ。

「暇だー」と愚痴の為に叫んだら保さんも同意してくれたが、なんか紅さんがこっちを見ているのでからかったら話がおかしな方向にいつている。

「最近の李儒様は格好良いし、好きかと言ったら好きかな？と・・・」

あれっ？紅さんがとんでもない事を口走っているような・・・。

「ほ、紅さあくん、もしもし、大丈夫ですか？」

呼び掛けるが返事がない、返事が無いただの屍のようだ、いや、違うし！紅さん生きているし、自分の発言にパニックっているだけだろ。

顔を真っ赤にして両手を頬にあて顔を左右にいやいやという感じで振っているよ。

紅さんもしかしてもしかして、私にガチで惚れているのか、だとしたら参った。

うん、紅さんが私に好意を向けてくれるのはとてもありがたいが、好きとか嫌いとかそういう感情は無いし、でも人に嫌われるよりは好かれる方がいいが。

紅さんはすれ違った人間十人中十人が振り向くなんて程の美人ではないが、でも、けっこう顔立ちは整っているから美人な方だしなあ。

うん、性格は真面目だし、仕事もキチツとやるし皆の評価も良いし、服が破れていると気づいて縫ってくれたり女性的な面もあるし。

今までなんとも思っていなかったんだが、相手がこちらを好いてくれる、なんて知ってしまうと、ちょっとは気になってしまっなあ。

これから仕事とかで顔合わせたりするとやりづらくなりそうだな、どうすればいいのかなあ、紅さんについて……。

- 保 -

おかしい！？冗談半分で二人を冷やかしたら、なんか反応がおかしい、

紅さんが司を意識しているのは何となく分かっていたから冗談で話

したら。

司も満更でないような、お互いがお互いを意識するようになったのか？

冷やかした人間としてはなんだかなあ……。

それにしても、このままで良いのか？今回の話が一向に進まなくなるが大丈夫か？

いいや、よくない！折角最初に司が暇だ！と話を振ってくれたのだから、

司もまさかこんなBOYS BEもどきみたいな展開にする気はなかったはず。

話を進めるようにしよう！

では話を進めるためにまずは状況確認だ、執務室を見渡すと、うん、薊さんがいる。

はっはっは、薊さんが紅さんの言葉に反応しそつだぞ大丈夫かな二人は？

こういった発言をしていると、友達の恋を邪魔するモテない男の嫉妬に見えてしまうね。

うん、嫉妬ではないよ司が上手くいってくれるなら嬉しいし、

ただ、司は良き人でいられるかがわからん、下半身とかフリーダムだったし。

まあ、司の恋愛の話はいいや話を進めましょう、

何故なら今執務室では司LOVEな薊さんが荒れ狂っているんだから。

現実逃避しておきましょう。

とりあえず司の暇だ、という理由はよく分かる。

仕事がワンパターンで飽きているんだよなあ、書簡は多いが落款を
押すだけ、

量はあるが簡単に終わる仕事だから、皆なんであんな時間かかるんだか？

司が叫んだのは普通の単純作業へのイラつきもだろうが、
最近の張略がなかなか結果が出てこない事へのイラつきだろうな。

司が仕事で悩んでいるのなら友人として手伝ってあげましょうか、
司の企む事なんて絶対に面白いだろうし、協力するしますか。

問題は司がどれくらいの事をやろうとしているのかだな？

前にボソッと「漢中」と呟いていたし、あの漢中だろうなあ。

たぶん漢中地域の混乱起こさせるとかかな？

漢中って歴史ではたしか劉焉が張魯を送りこんで橋を切って道を遮断し官吏を殺し、

それを張魯のせいにして益州が中央との連絡とれないと言いつの材料にされていたはず。

もしかして司はそれを早い段階で此方で起こそうとしているのか？

漢中を益州から独立させてしまつて、涼州に増えている難民や族を鎮圧で派兵する気か？

もし私の予想通りならば実に面白そうだな、あとで聞いてみるか。

国境線周辺のゴタゴタほど戦争の材料に適した物はないしな、ふふふ。

「保様、保様、何やら考え事でも？」

おおつと、考え事していて雷さんに話し掛けられていたの気づかなかった、

漢中の乗っとり、戦争を企んだ、とは言えないので適当にごまかしますか。

「司と紅さん二人がもし将来くつつこうとなつたらどうやって薙さんを説得するか？」

いくらなんでもこれは答えに無理があるかな？

「おお、それはたしかに難しい問題ですなあ、でも平気では？」

雷さんって戦場では策略家で頭良いが、こういう点は結構間抜けと
いうかよく騙されるな。

それにしても過保護な息子LOVEな薊さんが平気とは？何か策が
あるのか？

「親はなんだかんだ言いながらも子供の事を理解してくれるでしょ
うから。」

うーん、雷さん、だとしたら今この部屋の惨劇という状況を回避で
きていたような。

部屋を見渡したら、部屋が戦場になっているよ、何処の激戦地だよ。
もしくは忠臣蔵の松の廊下、薊さんがモルゲンステルンを振り回す
室内にいた衛兵達が敵わないまでも何とかしようとおさえつけに。

“吉良殿殿中のごさる、殿中のごさる”と吹き替えて違和感がまっ
たく無い状態だ。

「保君は翠がいるから平気だよね。」

そんな事を思っているら？さんが来たよ、このままではまたこじれてしまうよ。

母上が介入してくるよ、私の結婚とかの話しになったら、どうおさめるか。

とりあえずいなしてみますか。

「ええつ、翠ちゃんがお嫁さんに来てくれますから私は安心してますよ、」

翠ちゃん可愛いですし、ただまあお馬鹿さんなのはちょっといただけませんが。」

いつもなら嫌がる私があつさりと翠ちゃんの結婚を受け入れたことに驚いているよ。

「本当に翠でいいの？」

うん、いつもと明らかに反応違いますね、あんなだけ結婚させようとしていたのに。

「ええつ琅？さん、翠ちゃんはお馬鹿ですが純粹でとても可愛いですし、」

いずれ私と手を取り合い共に歩んでもらえたら嬉しいですよ、ただそれは将来お互い大人になり、その時に翠ちゃん当人が望んでいたらですけどね。」

「こつこつ断り方ならば琅々さんも仕方ないなとなるな。

「はあつ、やっぱり保君は首をなかなか縦に振ってくれないねー。」
当たり前ですよ。

私は人に言われたからといって“はい、そうですか”と言う人間ではないですから。

それにすぐそばに母上がいるから不用意な発言は惨劇を迎えますので。

実際、翠ちゃんが、と言った時、母上の表情に一瞬ピクリと反応があつたんですから、
わずかな変化で分かりにくいですが、これは気付かなかつたら大惨事でしたよ。

それに私の好きな女性のタイプが母上みたいなクールビューティーですから、
翠ちゃんが将来クールビューティーになるかという点、うーん……
・？

今思い出しても転生した直後は辛かったね、理想のタイプの女性がいて母親だったと。

私転生しているから精神年齢は47歳ですよアラフィフですよ只今、
今、37歳の母上位の年齢でちょうどいい感じなんですよねえ。

こちらでの年齢は14歳ですから、23歳歳上ですから世間はビツ
クリ、

ペタジーニやラミレスみたいな姉さん女房ですから。

あれ？当初母上が「保ちゃん是我的婿だ」発言をするたびに、
聞こえないふりをしていた私は何処に行った……。

あっ、結婚したいのはクールビューティーとは違いますが、可愛い
月です。

母上も月も私を大好きと言ってくれてます幸せですよ、ただ家族と
しての好きですが。

うん、私は先程から何を言っているのでしょうか？

多分仕事の疲れとかストレスで混乱しているだけでしょう。

気のせいかな？私の好感度が先程からストップ安という感じで駄々下
がりしているような。

キュピーーン

今、何か凄く嬉しく感じる事を感じとりました、何か強烈な思いを感じました。

私にとってはすごく嬉しい事のようにですが、気のせいかしら？

まあ、たまには感じたことや思っていることを横にいる空に素直に言ってみましょう。

「貴方、最近思ったのですが、今はいいですがいずれ保君も結婚しますよね、

今まで保に近づく悪い虫は排除なんて思っていました、それではないかと思って。」

あら、あの人があるふるしています、どうしたのでしょうか？

「うっっ、ついにお前も子離れをするようになったんだな。」

泣きながら何を言っているのでしょうか、一体うちの人は・・・。

「保くんがお嫁さんを連れてきたら暖かく迎えてあげないと、保君が選んだ人なら間違いないですから、ただ一回はひっぱたきますけどね。」

私が微笑みながら言うと横にいたあの人が苦笑してる、でも一度位はね、

私がお腹を痛めて産んだ大事な保君を取られるんですから。

でも、それ以上はしませんよ、余裕があるところを見せないで。

「やはり正妻の余裕を見せてあげないと保君の側室に対しては、ねえ貴方。」

あらっ、あの人が固まっている、どうかしたのかしら？

- 空 -

久しぶりな出番の空ですが、とりあえず今から一言

『誰か助けて下さい、妻が、妻があああゝゝ!!』

どうして妻がこんな風になってしまったんだ・・・。

なんか妻がこの後も

「最近、保君を見ると一人の男として見てしまいそうな私がいる。」

「貴方も好きよ、ただ保君も家族としてだけでなく男として好きになりそう。」

あまりの恐ろしさのあまり妻の目を見ることが出来ませんでした。

誰でもいいので助けて下さい！妻を治せる医者はいませんか？

五斗米道でも妖術でもいいから助けて下さい・・・！！！！

なんでこんなことになってしまったんだ。

・百合・

「二十話目にしてやっとの僕達の出番がきました！皆さんはじめまして、

僕は涼州三人娘で姓は【田】名は【豊】字は【元皓】真名は【芍薬】しやくやくって言うんだ。」

執務室の中が混沌としているなかで芍薬は一体誰に話しかけているのだろうか？

「芍薬ちゃん誰と話しているの？あつ、ちなみに牡丹は涼州三人娘の一人、

牡丹の名前は【沮授】で字が無くて真名が【牡丹】ぼたんだよ。」

牡丹まで一体誰と話をしているんでしょうか？

「ふふふ、牡丹さんあなたまで一体誰と喋っているんですか？

私も他の二人と同じように涼州三人娘と呼ばれておりますが、
姓は【審】名は【配】字は【正南】真名は【百合ゆり】と申します、以
後お見知りおきを。」

なんか私も言わないといけないような気がしたのでとりあえず名乗
っておきましょう。

それにしても芍薬さんも牡丹さんもよくこんな混沌とした状況で普
通でいられるんですね。

李肅様が暴れ衛兵が取り押さえ、淳于仲簡さんや李文優様が呆けて
いて、

董君雅様が何かを話して、池陽君様は何か叫んでいて、何なのでし
ょうかこの状態は一体。

「ついに紅ちゃんが司ちゃんに告白したね、しかもこんな人前で。」

何処をどう見れば告白に見えてしまっんでしょうか牡丹さんには。

「アレを告白って牡丹さん貴方どこをどう見ればそう思えるのかし
ら。」

夢見る乙女ということだからなんでしょうか？

「でも、僕は紅さん誉めてあげたいな、だって好きって言うの勇氣
いるから。」

確かに告白は勇気が必要でしょうが、どうして二人には告白に見えるのでしょうか？

「芍薬さんまで、アレを告白というなんて、どう見ても独り言のたぐいでしょう。」

二人にあの瞬間がどう見えたのでしょうか？私の眼とは違った物が見えていたのかしら？

「紅さんも長かったねー、周りで見ている方が頭にきたくらいで。」

確かに芍薬さんの言うとおり淳子仲簡さんが李文優様を気にしているのは、

私達の間ではいつも話題に上がっていました。

「でも、芍薬ちゃんだって好きな人いるのに告白してないでしょ牡丹知っているよー。」

牡丹さんも此処で芍薬さんの思い人について話を振るなんて酷い人ではね、

狙って発言しているのではなく自然と言っているのですから怖い人で。

「ぼたーん、何を言っているの僕はそんな雷さんの事をなんて」

芍薬さんもまた淳于仲簡さんに負けず劣らず分かりやすい反応をされる人ではね、
長い付き合いですが芍薬さんの新しい一面を見る事が出来るとは思いませんでしたは。

たまには芍薬さんを困らせてあげましょつかしら。

「あらあら、牡丹さんは韓文約様の名前など一言も出していないのに、

芍薬さんは何故ここで韓文約様の真名をよばれるのですか。」

私達三人の中で一番優秀な芍薬さんがどうされますかしらねえ。

「うううう、あううう。。。。」

実に面白いではね、真つ赤な顔して泣きそうなこんな可愛い芍薬さんを見られるなんて。

たまにはこういうのもいいなと思っていきましたら、空気を読まない人間がいるんではね。

- 光 -

「ただいまっす李？っす、族討伐から帰ってきたっすが部屋どうなっているんすか？」

阿多と一緒に族討伐から帰ってきたつす、だから太守に報告に来たつす。

そしたら執務室中が目茶苦茶だったつす、盗伐した族のネグラより汚いつす、

だから、言っただつすよ。

「こつちは阿多と一緒に族退治をしてやっとなつす、それなのに皆が遊んでいるなんてふざけているつす、真面目にやるつす。」

そしたら急に執務室が静かになつたつす、さすがおいらつす、おいらの威厳にかかればあつというまつす。

なんか部屋のいたる所から「光が常識を問うとは」「光に言われたらおしまいだ」

「李稚然に言われたらおしまいではね」

皆して酷いつす。

第二十話、いつのまにやらラブ空間に？（後書き）

涼州の新加入六人組の出番を出来る限り作ってみました。

なんだろうハムの人を超える常識人で個性薄くなるはずの淳于瓊が、当初の予定と違ってなんかやけに出番が増えることになるとは、なぜなのかなあ？

今回は修正いらなと思うたら、年齢の所間違えていた、またか。

皆様のご意見ご感想お待ちしております

第二十一話、徐州から招かれざる客（前書き）

おうふ、またも新キャラを出してしまった。

恋姫原作キャラでなく、しかもまたもマイナーどころから、いや曹操や劉備とか大好きですよ、でも気づくと変なところから採用と。

第二十一話、徐州から招かれざる客

保

おはようございます、どつきあいでしたら、

今、涼州最強の一人になりました董擢こと保です。

部屋の外に出たいのですが、今、私室に身柄拘束されています。

「董孟高様、今の事態を認識されておりますわよね、何故、今、部屋に閉じ込められているのかを。」

いいえ、いきなり軟禁される理由なんて身に覚えがありません、品行方正、勤勉実直、質実剛健な私には全くわかりません。

ちなみに今、部屋には百合さんと雷さん私と三人がいるのですが。

「保様ならばあんな奴片手で捻って倒せてしまうぞ、だから、気にすることなくどうどうと戦えばいいんじゃないよ。」

ええ、今や琅？さんともガチで引き分ける自分の武に少しは自信はあります、

ただ、雷さん誰かが来ているの？相手誰なの？刺客が送り込まれてきたの？

本当に訳が分かりませんよ。

私が私室に書簡を持ち込み落款押しマシーンになっていたら、半刻程前にいきなり部屋の扉が開いたと思ったら雷さんと百合さんがやってきて。

「董孟高様、緊急事態ですので部屋から出ないで下さいますか。」

口調はいつもと同じだが、百合さんの表情からただならぬ事態と。

「百合殿も芍薬殿といい心配性だのう、保様ならば平気だよ、わはは。」

雷さんはいつものように豪快にお前らは心配しすぎだと笑っている。

うん、何が何だか分からないね。

「韓文約様、世の中にはもしもということがありますので、大体ですすね韓文約様、事態を悪化させない為にこのような手段をとらせていただいているのですから。」

百合さんが雷さん相手に怒っている、雷さん百合さん苦手なんだよな、

上品な口調で理詰め徹底的に攻めてくるからやり辛いよう。

謎だよなあ雷さん、私や司ほどではないが戦いにおいて策略家で優

れた武勇もあり、
でも、まずは策で相手を弱らせ最小被害で勝つ、この時代としては
珍しい勝利至上主義者で。

手段を選ばないで戦ってくれるから軍師の出した非道な策もOKと、
個人の武がとか寝言が当たり前な他の武将からすると卑怯、
と言われるような、まさに名将だが普段は何でこんな大雑把で、理
詰めに弱いんだ。

まあ、雷さんの考察はいいや、とりあえず話を進ませよう。

ただならぬ事態なんだろうが一体何があったのか？まずはそれにつ
いて聞こう。

「百合さん、雷さん、一体何があったのか教えてもらえますか？説
明ないのは困ります、
先程から部屋を出るな！私ならば平気！とだけ言われても、何があ
ったのですか？」

「・・・・・・・・・・」

あれっ、急に部屋中が沈黙に包まれたぞ、これはもしかして、
内容伝え忘れた事に気づいてしまったか二人とも。

「わ、私としましたことがついつい焦ってしまって、
肝心のあらましを伝えるのを忘れてしまっていたなんて。」

滅多に見られない百合さんの慌て具合。

「おおっ、そういえば何があったか話すの忘れておっは、いかなのう、ガハハ。」

雷さんはいつものように気楽に笑っていた。

「百合さん、雷さん、二人ともうっかりさんなんだからまったく、ブツ飛ばすよ!!!」

満面の笑顔で殺気を飛ばしながら言わせてもらいました。

「誠に申し訳ございませんでした。」

使徒イスラフェルに勝てるくらい見事に二人の動きがユニゾンした土下座だったね。

まあ、許してとりあえず話を進めましょう。

「実は問題はこれなんです」

百合さんが取り出して私に見せた物は、私が書いたジョークの本、この娯楽が少ない時代なら受けるだろうと私の知っている、落語やら小噺やら古今東西の笑い話を乗せて出した本です。

「これが何か？売り上げが悪く赤字出したからキレた本屋が乗り込んできた？」

自分の本だけ見させられても訳がわからないので適当に答える。

「いえ、今もこの本は売れております、問題は売れ過ぎた故になんです。」

意味がわからん？私の頭上に巨大な？が浮かぶ。

雷さんが本を開いて渡してくる。

「この嘶に怒って保様を出せと怒鳴り込んできた奴がいて。」

開いたページを見ると、お釈迦さまと侍従の会話のページが。

「なんだ単なる小話じゃないの、これで怒るって尻の穴が小さい奴だ。」

そういった後自分の書いた小嘶本を読み、面白いなと笑っていると。

「確かに器が小さい相手ですが、相手が問題なんですよ董孟高様。」

相手が問題ねえ？誰でしょうか全く分かりません。

「誰が来たの？仏陀は既に死んでいるが？融でも来たか？」

まあ、んなわきゃないな、かるく話すと。

「保様よく分かりましたな、？融と名乗る男で。」

ブツ！！！！

思わず吹き出してしまふ。

？融ですか、三国志での知名度は地味ですが、仏教の庇護者で略奪好きな人ですよ。

演義ではなぜか良い奴になっているあの略奪スキーが来るとは。

そりゃ怒るか、自分が庇護している宗教を笑い話にされたら。

ちなみにこんな感じの小噺なんです。

お釈迦様は産まれるまで母親のお腹に3年3か月もいたという事で、私からしたらなわきゃねえだろと思いますが、老子が母のお腹に80年とか。

噺をすすめましょう。

侍従が仏陀に母親のお腹の中はどうだったのですか？と聞いてきたから仏陀が、

「夏のように暑すぎることもなく冬のように寒くなくすごしやすかった」と。

「ほう、それでは母親のお腹は春のようであったと」侍従が話すと、

仏陀は「いや季節は秋でした、時折下から松茸がニユツと顔を出す。」
じつにくだらないでしょうもない小喃ですよ、ただ酒飲んだおっ
さん達には大ウケ。

今、謁見室にいる？融殿から百合さんが詳しく話を聞くと。

当人は徐州で役人やっていて、ある日街を歩いて本屋に寄ってみた
ら、
今人気と書かれた本があり、なにげなしに手に取り読んでみると、
自分が支援している仏教をネタに笑い話をする奴がいる許せん！

それどころかこの本のおかげで、街を歩くと「松茸の庇護者」と笑
われ。

更に出勤すると小喃をネタに同僚に「松茸庇護ってあやかって大き
くなりたい？」

「チ コに生まれ変わりたい？」と散々笑われ屈辱の日々を過ごし
ていると。

松茸呼ばわりされたり、普段から脳味噌筋肉と馬鹿にされるのも、
食卓に行ったら私の分だけ朝飯がなかったのも、全てこの私のせい
だ！と。

この屈辱は涼州にいる作者を討ち取って汚名挽回、名誉返上じゃー

！！
そして、その後名誉の死を迎えるんだと槍を片手に涼州に突撃してきたと。

おい、？融大丈夫か？汚名挽回、名誉返上はいくらなんでも不味い
だろ、
ネタにした私も悪いが松茸のとか笑った住民や同僚にキレろよ、私
にっつて八つ当たりだろ！

「切っ掛けを作ったわけですから八つ当たりではないですよ。」
百合さんが突っ込んでくる、心を読んで発言しないでくれ。

「保様どうしますか？徐州の手　コ人間は？追い返しますか？」
雷さん、松茸呼びわりならまだしも手　コ人間はまずいだろ、
下半身に脳味噌があるような人間じゃないんですから。

怒れるお馬鹿さんがいるのか、実に厄介です、会いたくないです。

「とはいえ私が会わないわけにはいきませんね、会いたくないです
が。」

ここにはいないが先程名前が上がったということは、
芍薬さんが向こうで私を会わせないようにしているんでしょうが。

私を守るうと考えて行動してくれた二人には悪いが謝罪しに行きましよう、
？融さん自身は悪い事していないのに松茸呼ばわりは可哀想ですか
ら流石に。

まあ、馬鹿だし、かなり八つ当たりもありますが目を瞑ってあげましよう。

「ちなみに今、誰が応対してくれているの？」

とりあえず私が行くまでの間宥めすかしている苦勞人は誰かと尋ねる。

「あああーっ!!！」

慌てないキャラの百合さんが叫んでいる、何があった!？

「今、謁見の間にありますのは、池陽君様に、芍薬さんに李文優様が
が。。。。」

あかん、他の人間は良いが司だけは絶対にあかん、宥めるところ
か火に油を。

「大丈夫だよ、司様ならば」

雷!!お前のその根拠の無い自信は何処から出てくるんだ!!!!

「大人しく突き殺されるーーーーー!!!!」

雷さんに怒鳴ろうとしたら城の奥、謁見の間辺りからすさまじい叫び声が聞こえてきた。

司

仕事が早く終わったので城内をうろついていたら謁見の間から怒声が聞こえる。

小話の件で？融とやらが保さんを殺すと徐州から殴りこんできたそうで。

これは面白そうだなあ、こつこつ絶好の暇潰しがやってくるなんて・・・、
もとい、親友である保さんの命を守らないといけませんね!!

謁見の間の中を見ると空さんと芍薬さんが多分その？融という人を諫めていて、

その間に牡丹さんと雷さんが保さんを部屋に閉じ込めておくと。

じゃあ、それなら私も手伝おうと「此処は任せて行って来て」

と僕が言ったら、皆絶望的な顔するのは何故かなあ？

？融という人を見ると、ショートボブにした髪型が特徴な人で、

うん、後ろから見ると巨大な手　コだね。

「松茸庇護するってあやかって大きくなりたい？」とか笑われているけど、

その髪型と後ろ姿って、やはり松茸、もとい、チ　コを意識したの？」

素直に思った事を言ってみただ、人間我慢しすぎるのは体に良くないですから。

「貴様あああああああ~~~~!!!!!!!!」

あら、何を怒っているんでしょうかねえ？槍で襲い掛かってきましたよ。

ヒュッヒュッヒュ、？融の放つ槍が空気を切り裂く音が聞こえる。

ただ、私の相手にならない、上半身を軽くそらすだけで避けれる。

「遅い遅い、そんな三段突きくらいなら簡単に避けれるぞ、あと、青筋立てて怒らない方がよいよ、更にチ　コそっくりになったよ。」

面白いから軽く煽ってあげましょう。

「誰が青筋立て怒張したチ　コそっくりだとおのれええええ。」

ブウン、ビュッ、ガキン

そこまでは言っていないませんがさすがに僕でも。

それにしてもよく怒鳴りながらあんな早い速度で槍を振ったり突いたり出来ますねえ。

とはいえ、しゃがむ、バックステップでかわし、たまに愛用の鉄扇で叩き落としてあげると。

「大人しく突き殺される!!」

なんて物騒なんでしょうか、そんな事を言うなんて。

それにしても突き、薙ぎ払い、切り上げ、切り下げ、必死でやっています。遅いですねえ。

いや、馬鹿力はすごいですよ。攻撃を鉄扇で受け止めたら手が痺れましたから。

でも、避けるのは簡単です。

「司ちゃん煽っちゃだめええ」

芍薬さんがこっちに向かって叫んでいますね、これはいわゆる振りですね、

上島竜兵がいて目の前に熱湯風呂押すなよ発言、それは押せという合図のようじに。

芍薬さんの方を向いて笑顔で頷く事で返事ということにする。

「さあ、お前のそそり立つチ コ力はそんなもんか。」

アレっ？芍薬さんが絶望的な顔している、おかしいな！？

「当たれえええいいい」

だから避けれてしまっつて、学ばないのかな？このお馬鹿さん、薙ぎ払いならバックステップ、突きならば軽く体を捻るだけで切り上げならサイドステップで余裕で避けれる。

フェイントがないただ突っ込んでくるだけの攻撃ならば簡単に避けれますよ。

おっ、保さん達がやってきた、主役が来たようですし、そろそろ終わらせましょうか。

「チ コだけにやはり突っ込むのは得意なんですわ、それにしても特大サイズチ コのくせに玉のちっちゃい男だなー。」

更に煽ってみましょう、動きがより大振りになって突っ込んできました。

あら？保さんが笑っていなくて頂垂れている、保さんなら煽ると思っんですが。

「俺は女だああ!!!!!!」

あら女性でしたか、それは失礼しました。

「失礼しました女性だとは、とりあえずそのチ　コ髪型は男性になりたい願望からですか？」

男性と間違えるなんて失礼な事したので素直に謝りました。

「あがあああうがああああ」

もはや人間の言葉ではない、獣の雄たけびみたいになっていますよ。

「おかしいですね、謝っているのに何故か攻撃が激しくなっているのは、
うーん、獣のようになってしまっではいけません仕方ない終わらせ
ましょう。」

ブウン

空気を切り裂くような切り下げを避け懐に飛び込み鉄扇で右手を思
いっきり強打する。

ガランガランカラーン

強打の痛みで？融は槍から手を話し、その槍が床に転がる。

ふう、これで大人しくなったでしょうね。

「うわわー！ー！ーん」

あら、膝を崩してペタンと座りこんだと思ったたら泣きだし始めちゃいましたよ。

これは参りましたねえと思ったら、

「貴様のようなのがいるから、戦いは終わらないんだ！ 消えろ！
！」

保さんの声が聞こえたと思ったら意識を失う事になるとは。

- 芍薬 -

保ちゃんを切る、と徐州から？融さんっていう人が怒鳴りこんできたから、
僕も頑張って緊急事態を何とかしようと思ってるんですけど司ちゃんがやってくるなんて。

司ちゃん根は良い人だから平気だと思ったら、駄目だった僕の努力の水の泡なんて。

どうしよう謁見の間で戦いが始まっちゃうなんて。

「司ちゃん煽っちゃだめえ」

こつちを向いて笑顔で、理解してくれた。

「さあお前のチ コ力はそんなもんか。」

ネタ振りだと思われるって、もう駄目だ僕には止められない、おしまいだよー。

そんなところで保ちゃんや百合ちゃん達がやってきた。

どうするんだよーこんな目茶苦茶な状態、僕なんかじゃむりだよー、融さんはやられて地面に伏せて泣き始めて、司ちゃんは僕悪くないって顔して。

こうなったら保ちゃんならばこの場を丸く収めてくれるはず、頼むよー。

「貴様のようなのがいるから、戦いは終わらないんだ！消えろ！！」
保ちゃんが叫びながら縮地で一瞬で間を詰めて司ちゃんを殴ってた
！。

「悪は倒した、だから貴女も泣きやんでください」

そういつて？融さんを泣きやめさせようとしていた、なんか納得いかないのはなんだろう。

「うわあーん、俺は汚名挽回も出来なかった、徐州では松茸呼ばわりされ馬鹿にされ、涼州ではこんな奴にチ　コ呼ばわりされ辱められ武では打ち負かされる、

こうなったら生き恥をさらす前に死んでやる。」

汚名挽回って発言は恥ずかしいと思うんだ、しかも地元ではなく涼州にまで来て、ポコポコにされて既にこの段階で生き恥をさらしまくっていると思うんだ僕は。

って、つい軍師として内心突っ込んでいたら事態は大変な事になっていたよお、

？融さんが小刀を取り出す喉を突いて自害しようとして止められないと思ったんだ。

そしたら保ちゃんがその小刀の刃を右手で握り締めて止めていたんだ、
右手からすごい血が出てて凄く痛そうなのに保ちゃん微笑んで。

「貴女が死んでしまったら悲しむ人がいます、私もそのうちの一人です。」

「貴女を悲しませた男は私が退治しました。」

「貴女のような美しい人に涙は似合わない、だから笑ってください。」

保ちゃんが自害を食い止めたんだけど、口説きにいつてるスケコマシにしか見えないよ。

結局、司ちゃんという悪がぶっ飛ばされた事でうまくおさまったんだよー、

でも、？融さんいいのかなあ、原因は保ちゃんが書いた本なのに・・・。

しかも、？融さん明らかに最初は保ちゃんのことを切るとか言ってたくせに、

「こんな俺を美しいなんて言ってくれる人がいるなんて。」

「私を助けるために怪我を恐れず守ってくれるなんて」

「私の命を助けてくれた王子様」

なんか言い始めているんだけど、しまいには。

「お、おれ、いや、わ、わたしは？融と言います、真名は嵐らんと、貴方様への愛のために戦わせていただきます。」

なんかとんでもない事を言いながら保ちゃんに真名を預けてたよー。

保ちゃんがあんな本を書かなければよかつただけなはずなのに、なんか全て司ちゃんが悪者になって保ちゃんが良い人になっていて。

それでいいのかなあ？融さん？

第二十一話、徐州から招かれざる客（後書き）

うーん、なんでまた？融なんかを採用しようと思ったんだらう、話を書いている自分でもまったく分からん。

とりあえず、また新キャラを出してしまった収拾つくのだろうか、そろそろ恋姫原作キャラを出さないといけないのに、どうしましよ
う。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

オリジナルキャラ紹介（前書き）

とりあえず話が20話を超えオリジナルキャラがかなり増えたので、
此処でやっとキャラ紹介をさせていただきます。

これからさらに新キャラ増やそうとする私って馬鹿なんだろうな、
収拾つかなくしてしまう可能性が。

オリジナルキャラ紹介

- 保 -

姓 董

名 擢

字 孟高

真名 保

年齢 14歳（転生前の年齢は33歳）

通称 涼州の神童、産まれた直後に喋り立ち上がるなどした為、政治の世界で表に出ていないが城内から漏れ聞く噂で神格化されている。

特徴 この物語の主人公、前世の名「大谷 保」おおたにたもつ

一人将は私、元々は数百年続く地元の名士の息子、悪巧み大好き、悪戯大好き

もう一人の主役である司とは前世の段階で義兄弟の杯を交わす

司の悪ふざけに巻き込まれ突っ込み役が多いが基本はボケ、神から貰った能力成長限界突破があり鍛えると範馬勇次郎を超えられる。

今現在は琅？（馬騰）と怠慢でガチンコできる実力。

ただ、出陣した経験はなくそういった点で童貞の為、琅？
には劣る実力

超回復でアンデルセン神父並みの回復力+毒、病気無効

将来のお嫁さんは月と公言するほどの重度のシスコン

好きな女性のタイプは母親である和（董君雅）のようなク

ールビューティー

最近では母親が理想と公言するなど初期の時とは違う、

マザコンを超えた厄介な何かの病を抱えている

趣味 未来知識を使った発明、子供達に読む為に紙芝居作成、自

己鍛錬

雷との酒造、司に負けぬ悪戯

見た目 董毛特有のウェーブのかかった紫色の髪を伸ばし、丸い卵
のような輪郭

見た目は可愛い、目は常に笑っていない、背は155

cm（成長中）

武器 近接、乱戦時は方天画戟、遠距離は重藤弓、愛馬は黒王号
こと「踰輝」ゆき

その他 過去の悪戯エピソードなどは作者の実体験が多数

ハロウィーンのコスプレで頑張り過ぎて警察に通報された

など

姓 李

名 儒

字 文優

真名 司

年齢 14歳（転生前の年齢は32歳）

通称 洛陽の神童、産まれた直後に天上天下唯我独尊というなど
悪乗りした為

ナチュラルボーンテロリスト、生粋のトラブルメーカーの
為保命名

特徴 前世では保の一歳年下の友人、前世名「上尾 司」あけおつかさ

一人称は僕、前世では防衛医大卒から実家の総合病院勤務

保曰く天才、当人は姉が国指定の天才であるIQ140越
えだった為

自分は凡人だと思いきんでいる、謀略大好き、この世界で
は重度のマザコン

戦闘力では神との取引によりいずれは範馬勇次郎、今は琅
？と互角

保と同じくアンデルセン神父並みの超回復能力+毒、病気
無効

最近では紅（淳于瓊）と相思相愛まではいかないがお互い
意識する関係、

前世ではかなり自由な貞操観念だった為、女も男も有り、保に家庭は持てないと思われる。

場をかき回す悪戯大好き、当人曰くキレた保さんにはかなわない、

だから保さんにやる時は命懸けだとのこと

子供時代に先生に言われた「人の嫌がる事をしなさい」を間違った解釈で実行

趣味 陰謀、例えばいかに面白く三国志の時代をかき回せるか検討する事が多い

絵本作成、保絵本と違い原哲夫タッチなどかなり見た目のインパクトあり

農業、漢方薬や農作物の開発研究を兼ねて

見た目 茶色がかった肩まで伸びる髪をオールバックで、浅黒い肌、彫りの深い顔

鍛え上げられた逞しい体、可愛いではなく格好良い、背は

167cm

武器 近接では鉄扇、遠距離は元戎、愛馬は松風こと挟翼きょうよく

その他 作者の友人がモデル、悪戯の大半は実話

- 和 -

姓 董

名 君雅

字 無し

真名 なごみ 和

年齢 37歳

通称 沈着冷静の董君雅、どんな窮地でも慌てず指示を出す姿から命名される

特徴 涼州太守、高貴な家の出ではない政務能力は大陸有数、賄賂を否定するなど、

性格が誠実過ぎた為宦官に疎まれ故郷涼州太守に出世という名目で左遷

好き 保、司の転生したという秘密を打ち明けられている、保大

夫の空を悩ませる 最近保を息子ではなく一人の男として見てしまうと発言、

私塾時代の同級生は空、薊、荊州太守劉表らがいる
保と月の二児の母

趣味 あるとすれば息子の保の行動を監視、応援する事

最近保を争う好敵手である嵐との調練が新たな趣味とな
ってきている

見た目 董毛特有の柔らかなウェーブがあった腰まで伸びた髪、丸

い卵のような輪郭

目は特徴的なつり上がったきつい目付き、背は165cm

武器 斬馬刀（鬼切丸）鬼すらも切るからと命名、空はこの命名センスはどうなの？と

保に言いよる人間が出たと感じた瞬間には構えている
キレた時の実力は薙と並んで涼州最強

- 空 -

姓 池

名 陽君

字 無し

真名 空

年齢 39歳

通称 涼州の常識、変人揃いの涼州人の中での常識人の為

特徴 和の夫で保、月の父、洛陽の名家の三男坊、私塾時代の同級生の空と恋愛結婚

和と同じく将来有望視されたが宦官に嫌われ、妻の和と共に涼州へ、

今現在は筆頭軍師として知恵を働かせる。

月大好き人間、月に将来はお父さんと結婚すると言われた
いと発言するなど

よく和にぶっ飛ばされるが、すぐに回復するなどギャグ体
質持ち

月ほどではないが、また和には敵わないが息子の保大好き、
保と司の秘密を打ち明けられてからは息子ではあるが、
二人の実力を一人の政治家として男として尊敬する事も。

酒に酔うと「私の真名空はそらではなく、存在が空気の“
くう”だ」が口癖

家庭では良き父であり良き夫である、最近の悩みは常識人
の為の出番の少なさ

趣味 和のご機嫌取り、月と遊ぶ、ただ和も月もベタベタされず
ぎて嫌な時もあると

城内の営繕、和達が壊した城内を笑顔で修繕している姿を
ちらほら

見た目 身長177cm、カラスの濡れ羽根色と言われる漆黒の髪
をオールバック

糸のように細いたれ目、優男のような細い顔立ち、ほんわ
か癒し系

武器 トンファー（名無し）あっても無くても変わらず一般兵に
毛が生えた程度

ただし月をめぐって保と争う際は保と互角の力を見せつけ
る事も

その他 本当は池陽君は名前じゃないんだが、作者の勝手な解釈で

名前にしました。

- 薊 -

姓 李

名 肅

字 無し

真名 薊^{あざみ}

年齢 38歳

通称 李儒攻略の最大の敵、紅の壁、最近はとくに紅を危険視している為

特徴 司の母、洛陽の私塾時代は和、空、劉表と同級生、空に惚れていた

和に負けたが今も空を落とせないか陰謀を企てる事も
紅は司を奪う敵でもあるが真面目さなどから内心認めては
いる

趣味 料理、司の服を縫うなど司に関して母親的な行動

見た目 光り輝く黒のタキシードにオールバック、保曰く宝塚、身長164cm

美人よりもハンサムと言われる、実際涼州では女性人気

高い

武器 モルゲンステルン（名無し）司に言いよる女性が出ると襲
い掛かる

キレた薙は涼州最強

その他 作者としては出番を増やしたいが、何となく使いにくい存在

- 琅？ -

姓 馬

名 騰

字 寿成

真名 琅ろうかん？

年齢 37歳（和の二カ月遅れ）

通称 涼州の化け物、見た目15歳のロリッ子おばさんの為

特徴 翠（馬超）の母親、保に翠、司に蒲公英を嫁がせようと企
む、

嫁がせる為ならば鬼にもなれる、でない二人が将来確実に一人身になると。

一人称は琅？、保の底の知れなさに平伏、保、司に絶対の

忠誠を誓う

大半の人は真名 + 君付けで呼ぶ

趣味 翠と蒲公英に保と司を籠絡するためのテクニクを教える
乗馬および馬の世話、これは涼州で生きていくための必須
技能の為

見た目 恋姫の蒲公英そっくり、身長148cm、茶色い直毛な髪
をポニーテールで、

上着はスカイブルー胸元オレンジのスカーフ、真っ白なシ
ョートパンツ、

足元はスニーカー、どう見ても15歳程度

武器 十文字槍（石断槍）石すらも紙を切るように切る切れ味から
保LOVEでキレイな和とかネタを抜けば涼州最強

- 雷 -

姓 韓

名 遂

字 文約

真名 雷

年齢 34歳

通称 天水の策士、これはそのまんま天水周辺で謀略に必ず名を連ねている為

特徴 口癖はワシ、戦闘時は謀略、暗殺何でも有りの謀略家、普段は真逆の豪放磊落

武力は琅？に負けず劣らず、保と司に絶対の忠誠、二人だけには真名+様

それ以外は真名の呼び捨て。

保に愛馬を殺されるなどされるが、保や司が子供でありながらも、

謀略、肝っ玉のでかさ全てにおいて器の違いを見せつけられ忠誠を誓う

趣味 酒造、保や司の発明した酒を作る手伝い味見目当てではなくかなり真剣

流鏑馬、騎馬調練で知って以来はまる

見た目 身長184cmとこの時代では長身、左顎から鼻にかけて大きな傷跡あり

四角い顔で逞しい顔つき、一言で表すなら実に男くさい顔

武器 馬鞭（絶対勝利）保が戦で必ず勝つ事を命令された事からそのまんまな命名

- 紅 -

姓 淳子

名 瓊

字 仲簡

真名 紅^{ほん}

年齢 22歳

通称 涼州最後の突っ込み、没個性の教科書、困った時は淳于瓊、変人だらけの涼州で怒鳴れるなどからついた物がほとんど、あまりに常識的行動過ぎて花が無いと言われるのが悩み。

特徴 涼州が開いた人材募集試験第一号合格者、琅？率いる部隊の副隊長

最近の司に惚れている、今は相思相愛までいかないが互
い意識する関係

常識的な突っ込みには定評あり

趣味 家事炊事と意外と女性らしい

見た目 趣味は女性らしい行動が特徴的だがファッションセンスは
壊滅的

私生活での街への買い物時も鎧姿など私服は無いも同然性
真ん中で綺麗に別れた真っ蒼な肩まで届く髪、美人系統の顔
10人中10人が振りむくような顔ではないが整った顔立ち

武器 柳刃刀（文司）、先祖伝来の無名刀だったが司の名前から

抜き出し名付ける

- 日 -

姓 郭

名 ?

字 阿多

真名 日^リ

年齢 27歳

通称 年中反抗期、その態度の悪さから命名。

遅れてきた厨二病、普段の態度から司が命令
馬鹿一号、光とセットで馬鹿二人組扱い

特徴 紅と同じく涼州人材募集第一弾で募集、遅れてやってきた
厨二病

あまりの態度の悪さから制裁ときたちびつ子保に一瞬で
られた屈辱あり。

で人気 普段の喋りからは想像がつかないが街の子供達の遊び相手

光とは幼馴染

趣味 風揚げ、子供達には風揚げ名人と呼ばれている

達磨さんが転んだ、司に教えられて以来子供達には最強の王者として君臨する

見た目 身長174cm痩せ型、赤い髪を短く刈りあげ、髭を伸ばそうか悩み中

やせぎすな為見た目の威圧感が無い顔つき対策として。

武器 昇竜偃月刀、前は特に武器にこだわりは無くあてがわれた物を使っていたが、

司の運営する店のくじで当たって以来愛用、理由は壊れにくいから

- 光 -

姓 李

名 ?

字 稚然

真名 光くわん

通称 馬鹿二号、言わずもがな日とセットで馬鹿一号、二号扱い
救いようが無い馬鹿、他の馬鹿キャラと違い憎め無さが無いから

ウドの大木、涼州一の背の高さぬぼっとした顔つきから

年齢 27歳

特徴 日とは幼馴染、兄貴分の日の後を追いかけていてそのまま涼州へ

いる為 「っす」が口癖、救いようが無いくらい馬鹿と認識されている為

20話の時のように彼に常識を問われた時のダメージはで

かい 人の名を呼ぶ際は字呼び捨て

趣味 趣味が郭？と言われているほど郭？の追っ掛け、

BL要素ではなく子供の頃から親分子分の付き合いの為

見た目 身長196cmこの時代にしては長身、ぬぼおっとした顔

つき

武器 槍（名無し）日の昇竜偃月刀と同じくくじの景品

日と同じく今まで武器にこだわりは無かった。

- 芍薬 -

姓 田

名 豊

字 元皓

真名 芍薬

通称 涼州三人娘一号、芍薬、牡丹、百合の三人一組でいることがほとんどの為

知恵の一号、三人娘の中での一番の知識がある為

年齢 19歳

特徴 僕っ娘、人の名を呼ぶ際は地位に関係なく真名+さん付けで
ガールズトーク大好き、全ての物を恋愛と結びつけてしま
う桃色目線装備、

普段の喋りや行動から百合が一番に思えるが三人娘一の知識
戦場と普段のギャップ萌えで雷に片思い中

趣味 甘い物食べ歩き、牡丹からはあれだけ食べて太らないのは
卑怯と言われる。

牡丹、百合とのガールズトーク、三人寄れば姦しいの見本

見た目 水色の髪の毛の三つ編み、白いセルフレームっぽい眼鏡、

グレーのブレザーにベージュのタータンチェックのスカート
身長158cm

武器 鉄扇、司から護身で習っているがいかんせん付け焼刃護身
程度の実力

- 牡丹 -

姓 沮

名 授

字 無し

真名 牡丹

通称 涼州三人娘二号、二番目に自己紹介したから二号と天然の二号、天然発言でパニックに陥らせるため

年齢 19歳

特徴 自分を牡丹と呼ぶ、人の名を呼ぶ際は地位に関係なく真名+ちゃん付けで。

桃色目線装備
ガールズトーク好き、芍薬と同じく全て恋愛ごとに見える

素で芍薬の雷好きをばらしたりと爆弾発言娘として恐れられている

趣味 芍薬、百合とのガールズトーク

見た目 黄緑色のポニーテール、縁無し眼鏡の眼鏡、紺ブレザー白のパンツスタイル

口調性格とは対照的で身長173cmと長身、巨乳ではなく爆乳

武器 バグナウ、三人娘に共通しているが武力は無く護身程度の為

姓 審

名 配

字 正南

真名 百合

通称 涼州三人娘三号、三人娘で常に最後に自己紹介している為
おつちよこちよいの三号、冷静でいながらおつちよこちよ
いの為

年齢 19歳

特徴 喋りはかなりお上品、しないが高笑いがあったら完全なお
嬢様キャラ、

普段は冷静だが結構おつちよこちよい、芍薬、牡丹とのガ
ールズトーク大好き
人の名を呼ぶ際は姓+字で様付け

趣味 芍薬、牡丹とのガールズトーク、話のまとめ役

見た目 銀色のお団子ヘア、

ベージュのブレザーにベージュのタータンチェックのスカ

ート

身長148cmと、口調、態度と対照的な見た目口リツ子、

でも巨乳

武器 皮の手甲、他の三人娘とおなじく武は嗜み程度で拳を守る

ため程度で手甲を装備

- 嵐 -

姓 ?

名 融

字 無し

真名 嵐

通称 チ コ人間、司がショートボブにした彼女の後姿から命名、
禁句中の禁句

きのこの山、同じく司命名、これも呼ぶと危険だが最近は
受け入れている？

神童の盾、保に常につき従う護衛

年齢 20歳

特徴 一人称は俺、自害しようとしたところを保に止められて以
来の保大好き

汚名挽回、名誉返上などとお約束的な発言を平気でしてし
まう馬鹿、

ただ竹を割ったような性格、見た目のかわいらしさなどが
ら許されてしまう

史実で仏教の庇護者だったように熱心な仏教徒、最近保

が上になった

趣味 保の護衛、保の副官兼護衛として趣味と実益を兼ねている
和との調練、保LOVE同士の好敵手としての女の争い

見た目 ボーイッシュな見た目、胸が無い、俺口調の為男性と間違われやすい

あだ名となったショートボブが特徴、身長145cm、涼州のちびっ子

武器 槍（蜻蛉切）保が自分の部下になるならばと神から受け取り渡す

オリジナルキャラ紹介（後書き）

オリジナルキャラの設定はこんな感じに見ました。

うーん、どうなんでしょうかねええ。

第二十二話、遂に出陣？（前書き）

北京ダック、恋姫の世界にあつたら何と呼ばれていたのだろうか？
北京はまだこの頃無かつたし、そんな事を夢で悩んでいた今朝。

自分でも分からないくらいこの作品で悩んでいるのか？とも思いましたよ。

とりあえず、今日も皆様生温かい目でよろしく願います。

第二十二話、遂に出陣？

- 保 -

「見る人がゴミのようだ！」

司くーん、開口一番君は何を言っているのかな、ため息が出てきたよ。

「司、今この場で言うな身内に言っている事になるぞ！敵兵に言う。」

なんでこんな当たり前の事を言わないといけないんだ私は。

「董擢様、李儒様そろそろお願いします。」

うん？何か聞こえた？気のせいか。

「そうはおっしゃいますが、ムスカは一応味方にも言ってたじゃないですか。」

たしかにそうだけど、って、待えええーい！

「駄目じゃん！！それだと私達が敵ごと涼州兵殺す事になっちゃっじゃん。」

私は仲間を大事にするぞ、勿論司だって仲間を守るが。

「保さん、真面目に答えなくても、流石に私でも・・・ねえ。」

妙に嫌な間があつたぞ、今。

「いくら司でも平気だ、平気だと思う、まあちょっとは覚悟しておけ」

自分に言い聞かせましょう。

「オッホン！保様、司様ーお話をやめてください！」

あれ？やはり何か聞こえましたか？

「関白宣言乙、保さん、さだまさし好きですよね、歳に似合わず。」

さだまさしの良さを知らないとはなんと勿体無い！

「さだまさしの良さを知らないなんて人生かなり損しているぞ、ライブなんか歌よりもフリートークを聞きに行っているくらいだし。」

だてにライブのフリートークがCD化されてないですよ。

「董擢様！！！！李儒様！！！！」

なんかうるさいな、先程から周りが。

「歌じゃないのかよ！！さだまさしに求めるものは！？」

さだまさしのライブを知らない人は皆最初そう言うんだよな。

「いや、償いとかいいよ、あれを酒飲みながら聞くと泣きそうになるよ。」

タイトルの通り償いについての真面目な歌で染みるんだこれがまた。

「董擢様、李儒様、いいかげんにしてください！」

本当にうるさいなあ先程から、こちらは話が盛り上がっているのに。

「マジで！？あの涙を知らない冷血人間な保さんが泣くの！？」

えらく酷い言われようである。

「何気に酷いな、まあいいや、さだまさしは聴くと良い歌あるぞ。」

「二つになりました！」

ゴスッボグッ

「うぐお、いつてえー!」

司と話が盛り上がっていたらいきなり頭部に凄まじい痛みが走る、頭を殴る時ってゴチーンとか響く音だろ?なんでこんな鈍い音がするんだ。

「誰だー!!!」

頭を押さえ踞りながら犯人を探す。

「と、と、と、董擢様と、り、李儒様がい、い、いけないです!」

あら、顔真つ赤にして泣きそうな表情の紅さんがいた、もしかして先程のうるさいのは紅さんが呼び掛けていたのか?

「お二人がさつきから何度も呼び掛けていたのに無視するから・・・
ううっ」

全く気づかなかった、って、これはまずい、紅さんが泣き出している、

泣きそうな美人というのはグツとくるものがありますが、って違う。

司と目線を合わせる、うん、これしかないね、恥も外聞も捨て

DO・GE・ZAだね。

「そ、そ、そ、そんな頭をあげてください、ど、ど、土下座なんかないでください。」

紅さんいい人だ明らかに俺らが悪いのに、土下座したら慌てちゃって。

ただ、これで終われば良かったんだが・・・。

- 琅？ -

これから部隊を率いて出発だと言つ時に皆気が緩んでいるなー、まあ、琅？としては今回の派兵は余裕あるんだけど、流石に気が緩みすぎだよ。

今の保君と司君は特に酷いんだからよく分からない話に夢中になっていて、

紅ちゃん呼び掛け気づかないし、紅ちゃん泣きそうになっているし。

紅ちゃん大好きな司君に無視されると凹んじやっていたし、二人とも殴られて気づいたみたいだけど殴った紅ちゃん泣いていたし。

司君には蒲公英がいるけど、でも、恋する女の子は助けてあげないとね、

こついつ時は琅？みたいにやはり頼れるのは年上のお姉さんのの。

女の子泣かせる悪い男の子には罰がないとね、キシシ。

「二人とも本当に悪いと反省しているなら何処でも謝れると琅？は思うんだ。」

謝っていた保君と司君の二人が、私が話に加わってきて焦っているの。

でも、もう遅いんだ、パチンと親指と人差し指を鳴らすとあれが運ばれてくる。

「本当に反省してるなら土下座できるはずだ肉を焼き骨を焦がす高熱の鉄板の上でも。」

此処で決め台詞を言わないとね。

あれっ、泣きそうだった紅ちゃんが固まっているよ？

「ろ、ろ、琅？さん、その物体はヤバイ、それは冗談でもヤバイ！」

司君が腰を抜かして怯えている、でも、琅？は驚かせたりするけど冗談は言わないよ。

「なんで琅？さんがカイジを知っているんだよ！」

カイジ知っていたらいけないのかなあ？保君が変なことを言ってる、それよりも、今は焼き土下座の心配じゃないのかなあ？

気になるなら保君に教えてあげよーっと。

「今、保育園の紙芝居で翠や蒲公英とか子供達に大人気だよ司君の紙芝居のカイジは。」

保君が絶望的な顔している、知らなかったんだ、まあ、この後の展開の方が不安なんだろうけどね、ニシシシ。

「うぎややああああああああ~~~~~!!!!」

可愛い女の子を泣かす悪は娘？によって滅んだのだ。

- 光 -

うつす、光つす、今日はこれから孟高や文優達が出陣つす、謁兵所に見送りに行ったら、一向に進んでないつす、自分は関係無いつすが流石に酷いと思ったつす。

だから、常識人の自分がバシッと言ってやるつす

「いい加減出兵するつす、遊ぶのはやめるつす!」

相変わらずな俺の一言っす、切れ味鋭いっす。

でも、また言われたっす。

「光君に言われるなんて。」「光さんが正論吐いたら涼州は終わりだ」

皆本当に酷いっす。

- 保 -

熱いは痛いは散々だった、いくら超回復能力があるとはいえ痛い物は痛い。

まったく司がカイジを紙芝居で広めなければこんなことにならなかったのに、最近忙しくて保育園に行っていなかったが、まさかカイジが流行るなんて。

あのあと司から聞いたが、目眩がしてきたよ。

月が利根川、詠が会長、恋が班長をお気に入りなんて聞きたくなかった。

可愛らしい月が言うのか？「Fuck you・・・ぶち殺すぞゴ

三めら」と、

詠ちゃんが「祈るようになったら人間も終わりって話だ！」なんて言うのか？

うーん、詠ちゃんが言ったらちょっと似合ってしまいそうだった。

恋が班長なのは「班長ご飯持っている」と言っていたらしいが。

月と詠に関しては兄として保護者として不安しか感じません。

って、話が明後日の方向に行きすぎた、本題に戻りましょう。

今日は何があるのかと言いますと、今回益州を荒らしていた200名程度の賊が涼州に、涼州に被害が出る前に兵を派遣し鎮圧を、それで私と司が派遣される事になったんです。

それで今から閱兵場に集まる千名の兵の前で将としてこれから演説を。

私も司も、琅？さんとガチでやりあえる人間なのは兵達は知っているが、初陣がまだなガキ二人が補佐が付くとはいえ大将で派兵されるんですから。

一応、大将が私、大将付き軍師が司、補佐として琅？さんに紅さん
つて。

うん、初陣を迎える私や司にはとてもありがたい事ではあるが、
つき従う兵達からしたら実にふざけていますよ、たまらないでしょ
うな。

琅？さんが大将で二万とか普段率いているのに、千名の部隊の將の
補佐職つて、
紅さんだつて琅？さんの部隊の代理でいるのに申し訳ないと言
えない。

まあ、今回は上二人が初陣、しかも、兵数は賊より多いが新兵ばか
り、
賊に負ける訳はまず無いが何かがあるか分からない保険の為なんだろ
うが。

母上も父上も親馬鹿だよなあ、嬉しすぎるよ心遣いとして。

ならば期待に応えられるように頑張りますか。

では、まずは鼓舞しますか、兵達を、兵の前に出て演説を始める。

「諸君達を率いる事になった董擢だ、此処に集まっているのは私と
同じく皆新兵だ、

私のような者に率いられて皆不安であろう、私もだ。」

一瞬程度だが間を明け、新兵の顔を見る、皆不安そうな顔をしている、

まあ、私が弱気な発言をしているんですから当然でしょう。

「だが、それがどうした！と、我々も諸君らもまだ初陣もまだまだなひよつこだ、

だが普段から我々は馬騰將軍、韓遂將軍に鍛えられている一騎当千の兵ではないのか？」

新兵達に自分は強いんだという事を認識させましょう、そして燃料を投下しましょう。

「舐められているんだぞ、益州を追われ涼州に逃げてきたんだ賊徒共は、

精強なる涼州兵はだらけきつた益州兵より弱いと看做されたのだ、よいのか諸君！我らは新兵だが愚かな益州の連中より弱いのか？」

「「「「「否！！！」「」「」「」

叫んでいる新兵達の顔つき、目付きが最初と違い瞳には怒りの炎が宿っている。

「ならば奴等に教えつけてやるのだ涼州の強さを、怖さを、我ら涼州を舐めた代償が如何に高いのかということをし、奴等の首をネジ切り街道という街道に並べてやるぞ！」

「「「「「「「「「「「「「「」

これだけ煽ればいいでしょう、皆がやる気、もとい殺る気です。

補佐で一騎当千の琅？さんに紅さんいるんだから圧勝してくるしかないでしょう。

「街道という街道に首を並べるですか怖いですねえ保さん」

演説後に司が愉快そうに笑いながら話しかけてくる、目が笑っていないが。

「廃村を根城にした族はおよそ200名、こちらは5倍で猛将揃い余裕ですよ。」

わざとお気楽に発言する司、司も同じく緊張しているんだろう。

戦いに行く前に弱気でいてはいけないんだが、周りに兵はいない、私と司の二人しかないから出来る話なんだが。

「常識的に考えたら勝てるのは分かっているても死者を出さないか？不安だよ、

戦に犠牲は付き物とはいえ、やはり怖いよな人の命を預かるのは。」

たぶん率いる兵が100万だろうが、この怖さは消えないでしょうな。

ただ、ここで躓くわけにはいきません、今、司と企んでいます、将来歴史通りとなったら黄巾党、反董卓で何十万と戦うのですから。

「さあ保さん行きましょう、数は揃っているが初陣の將軍と軍師に初陣の兵達、相手はしょぼい益州から涼州に逃げてきた馬鹿な賊徒共、全てがふざけている、悪ふざけが大好きな僕達の為にあるような戦じゃないですか。」
司の言うとおりだ、ふざけ過ぎな条件ばかりだ。

「これから嫌という程戦争するんだからな、ならば今日の戦いは次の戦いの為に、次の戦いの為に行くか、派手に大陸に名を響かせるか。」

まるでどこかの少佐みたいだな、あちらの台詞はもつと凶悪だが。

「保さん、良いですねえ悪い笑顔していますよ、そうでなくちゃ保さんは。」

これからはじめての殺し合いに臨むのに笑っている私と司、戦を楽しもうなんて頭がおかしいんでしょう、でもそうでないと。

三国志の世界を本当の意味でかき回すんですから馬騰と淳于瓊なんて、凶悪な助さんと角さんを従えていくんですからねえ。

保さん大将に千名の兵をひきつれて賊の討伐で益州の境にある麋村
近くまで来ましたが、
さてさて、いったいどうしましょつかねえ？

賊共は、村に籠城していて防衛戦する気満々で困った、とかではな
く、
賊の連中油断しきっていて、こちらに全く気付いていないのが。

楽に勝てるなんていいですよ、ローリスクハイリターンなんて最高
ですが、
ただ、此処まで相手が何もしていないと畏なんではと疑ってしま
いますよ。

斥候を放って待つ事数刻、戻ってきた斥候の報告を聞くと、
村の入り口に二か所に見張りが二人ずつ、あとの賊達はまだ夕方だ
が酒盛り中と。

益州から逃げ切れたと安心しきっているんでしょう、涼州がすぐに
気付く訳無いと、
舐めてますねえ、益州は攻略の有力候補ですから細作だらけなん
ですが此方の。

しかも、こっちの兵は騎馬が大半なんですから情報伝達も移動速度
も反則ですよ、
それなのに賊徒共は涼州で大手を振って生きていられると思ってい
るんでしょうか。

さて、これからどうするか話をしましょうか。

「斥候の情報からですと賊徒は当初聞いていた数二百名より多くおよそ三百弱程度、

村には西と東の二か所しか入り口が無くそこに二名ずつ警備が、あとは中で皆宴会中。」

皆が食いつく情報は賊の数が予定よりも若干多いという点よりは、村の出入り口は二か所、警備も合わせて4名しかいなくあとは皆だらけていると。

「部隊を二つに分けて村に近づき夜まで待ち二か所から夜襲では？」

まあ、紅さんの言うのが無難ですが確実にしよう。

「紅ちゃんの言う方法が良いと思うんだ。」

琅？さんも同意と。

「夜襲もいいが村に攻めるとして同士討ちの危険性は？」

まあ、保さんの言うとおりですね、それならば。

「では、部隊を二つに分けて西側の出口側から火矢で攻撃しましょう、
う、

此方は村に無理に攻め込まず、混乱した賊徒共を東側出口から逃げ

させます。」

なんで一気に攻め込まないのか紅さんとか聞きたい模様

「賊からしたら西側から敵が来ている、東側出口の方はあいているし益州に近い、

となると、賊徒共も土地勘の無い涼州よりも益州側に逃げるでしょう、

それで東側出口から出た先で待機していた混乱する部隊を攻撃をしていき、

弱り切ったところにトドメで琅？さんの騎馬部隊が。」

部隊を夜戦専門で鍛えた訳でなく夜戦で同士討ちのリスクがあるのですから、

出来る限りそうならないように被害を少なくする安全策で参りましたよ。

これが敵がちゃんとした軍ならば買仕掛けられているか？

とか疑うんですが、ろくに見張りも立てず夕方には酒飲んでいて。

とりあえずこの啄木鳥の策で痛い目にあってもらいましょう。

西側からの襲撃部隊は紅さん率いる300名の部隊が火矢で攻撃尻を蹴飛ばし。

僕や保さんが600名を率いて東側出口の先の森で待機、琅？さんは100名の騎馬で。

数刻後、現代とは違い何も無い静かな夜、遠くからかすかだが銅鑼の音が聞こえる、赤い炎が遠くからでもよく分かる、廃村だとはいえかなり燃えている。

少したつと東側の門が開いて賊共が逃げてきた、大半が飲んだくれ寝ていた奴らばかり、軍師として策を練った苦勞が、鴨撃ちの鴨よりも楽な獲物になるとは。

兵が新兵達ばかりだから焦って混乱しないかなど不安な点もあったが、あまりに相手が情けないからか、普段の訓練の方がはるかにきついからか、皆落ち着いていて、敵を引きつけ、そして弓や元戎から矢が一斉に放たれる。

ハリネズミになって死んでいく死体だらけ、琅？さんの突撃準備なんかいらなかった。

結局半刻程度で逃亡してきた賊を退治し終え、紅さんの部隊から終わったと伝令が。

琅？さんは出番が無かったと凹んでいた、仕事しないで済むなんて、

私からしたら実に羨ましいんだが目指せ給料泥棒ですから。

そんな雑談はさておきまして本筋に、

伏兵がないか念のため気をつけながら村の中に入ってみたら、戦意があるような敵はいず、いたのは戦に気づかず寝ていた賊くらいだったのが。

結局、涼州軍は千名ひきつれ、軽傷5名、重傷、死者0名
賊徒共は死者237名、捕縛14名の完勝となった。

それにしても保さんは弓で僕も元戎ではじめて人を殺したが大した事は無かった。

向かってくる人を斬ったとかではなく、混乱した賊という名の酔っ払い達を、
遠距離から一方的に射殺す、そういう点では胸をはりづらいい戦いだ。だが仕方がない。

あまりにもあつさりと童貞を捨てる事になるとは、普通ならば人を殺した事に悩むとか、
罪悪感から押しつぶされそうに、といった感じがほとんどないとは。

ただ、幾ら罪悪感が無くても人を殺す事に慣れてはいけなさと自分に言い聞かせ、

そして、保さん達と賊の死体を茶毘にふし埋めるなど戦後処理を終え。

いつもの日常生活に戻る為に城に戻る事にするのだった。

第二十二話、遂に出陣？（後書き）

保と司の初陣をさせてみましたが、うん、手を抜き過ぎましたね、カロリー50%OFFどころか0カロリーみたいになってしまった。

主役たちが人を殺すという大事なイベントを、

此処まですかすかにするとは我ながら酷い文章です。

こんな調子でいずれ黄巾党とかの戦闘が起きたら、

一体私はどう表現するんですかねえ。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5697x/>

恋姫世界で二人旅

2011年11月1日02時20分発行